

靈界物語 第三六卷 海洋萬里 亥の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第三六卷』愛善世界社

2000(平成12)年11月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～
～
～
～
～
～
～
～
～
～

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 天意か人意か てんい じんい

第一章 二教對立（一九八九） にけう たいりつ

第二章 川邊の館（一九九〇） かはべ やかた

第三章 反間苦肉はんかんくにく（一九九一）

第四章 無法人むはふにん（一九九二）

第五章 バリーの館やかた（一九九三）

第六章 意外な答いぐわい こたへ（一九九四）

第七章 蒙塵もうちん（一九九五）

第八章 惡現靈あくげんれい（一九九六）

第二篇 松浦の岩窟まつうら がんくつ

第九章 濃霧の途のうむ みち（一九九七）

第一〇章 岩隠れいはかく（一九九八）

第十一章 泥醉でいすゐ（一九九九）

第十二章 無住居士むぢうこじ（二〇〇〇）

第十三章 惠の花めぐみ はな（二〇〇一）

第一四章 歎願たんぐわん〔一〇〇二〕

第三篇 神地かうぢの暗雲あんうん

第一五章 眩代思潮げんだいししてう〔一〇〇三〕

第一六章 門雀もんじゃく〔一〇〇四〕

第一七章 一目翁ひとつめをう〔一〇〇五〕

第一八章 心こころの天國てんごく〔一〇〇六〕

第一九章 紅蓮ぐれんの舌した〔一〇〇七〕

第四篇 言靈神軍ことたましんぐん

第二〇章 岩窟がんくつの邂逅かいこう〔一〇〇八〕

第二一章 火ひの洗禮せんれい〔一〇〇九〕

第二章 春の雪（一〇一〇）

第二三章 雪達磨（一〇一一）

第二四章 三六合（一〇一二）

（ ）

序文

現代の學者は、
『宗教は藝術の母なり』とか、
『宗教が藝術を生むのだ』と謂
つて居るさうである。私はそれと反對に
『藝術は宗教の母なり、
藝術は宗教を生
む』と主張するものである。

洪大無邊の大宇宙を創造したる神は、
大藝術家でなければならぬ。
天地創造の
原動力、之れ大藝術の萌芽である。
宗教なるものは神の創造力や、
その無限の意
志の僅かに一端を、
具體的に人の手を通し口を徹して
現はされたものに過ぎない。
さうでなくては、
宗教が神や佛を假想の下に描いたことになつて了ふ。
ソナ根

據の薄弱なる神又は佛なりとすれば、吾々は朝夕これに禮拜し奉仕する心がどうしても湧いて來ない道理だ。然るに天地の間には、何物か絶対力の存在する如く心中深く思惟さるるのは、要するにこの宇宙に人間以上の靈力者の儼存するものたる事を、臆氣ながらも感知し得らるるからである。如何なる無神論者でも、地震、雷鳴、大洪水等の災厄に遭遇した時は、不知不識の間に合掌し、何ものかの救ひを求むるのは自然の人情である。裏の神諭に曰ふ

「雷鳴の烈しき時、地震の強く揺る時は、神を祈らぬものはなし。その時の心を以て、平常に神を求めよ祈れよ」

とある。どうしても宇宙には大藝術家たる神が儼存し玉ひて、萬有一切を保護し給ふことは争はれぬ事實である。現代の人は神と云ふのを愧ぢて、自然とか天然力とかの雅號にかくれて、神と唱ふることを避けようとして居るものが多いのは、實に残念な事である。

出口直子刀自の筆先を一見して、低級な神だとか拙劣な文章だとか、到底神の言として見るに忍びないとか、筆先は怪亂狂暴一讀の價値なきものだとか謂つて

居る人もソロソロ現はれて来た様である。併し乍ら私は決してさうは思はない。茲に一つの例を擧げて曰ふならば、良金神國常立尊は大海の潮水の如きものである。そして出口教祖は手桶の様なものである。其手桶に汲み上げられた一杯の潮水こそ、教祖の手になれる良の金神の所謂筆先そのものである。併し乍ら大海の潮水も、手桶に汲み上げられた潮水も、其色に於て、鹹味に於て、少しも變化は無きはずである。さすれば如何なる卑近な言を以て表はされた筆先と雖も、神様の意志表示に就ては毫末も差支ないものである。筆先にも「出口直の落ぶれものに書かした筆先であるから、人民が疑うて誠に致さぬは無理なきことであるぞよ云々」と示されてある。落ちぶれたといふ言葉は物質的のみを指して仰せられたのではない。教育の程度にも神魂にも應用すべきものであります。水は方圓の器に従つて其形を變ずる如く、神即ち大海の潮水も同様に、その器に由つて變化し、その容器の大小と形状に従つて、力と形に變化を來たすは自然の道理である。故に出口教祖の筆先が如何に拙劣なものでも良の金神國常立尊の權威を傷つくべき道理は決してない。只今迄出口教祖の身魂を、全良の金神、全國常立尊その儘の

顯現けんげんと信しんじて居あた人ひとの小言こごとに過すぎないのであります。それ故ゆゑ、筆先ふでさきにも女子によしの身み魂たまが克よく調しらべてくれと斷ことわつてある所以ゆゑんであります。要えうするに筆先ふでさきそのものは、神かみの藝術げいじゆつの腹はらから産うまれた所ところの宗教しうけう（演劇えんげき）の脚本きゃくほんを作るべき臺詞せりぶがき書であることは、既すでに已すでに靈界物語れいかいものがたり第十二卷だいじふにくわんの序文じよぶんに述のべた通りとほであります。變性女子へんじやうによしそのものも、決けつして瑞みづの御魂みたまの全體ぜんたいではない。矢張やはり大海たいかいの潮水しほみづを手桶てをけに汲くみあげたその一部分いちぶぶんであります。私わたくしは世人せじんの見て、最ももつと不可解ふかかいなる筆先ふでさきの臺詞せりぶを茲ここに纏まとめて、嘗かつて神しん靈界れいかいを探險たんけんして見聞けんぶんしたる神劇しんげきに合あはせて、教祖けうその筆先ふでさきの出所でどころや、如何いかなる神かみの臺せり詞ふなるやを明あきらかにせむため、この物語ものがたりを口述こうじゆつしたのであります。この神幽しんいう二界にかいの出來事できごとを一巻いつくわんの書物しよもつに綴つづつたのが靈界物語れいかいものがたりである。靈界れいかいの幾分いくぶんなりとも消息せうそくが通つうじない人ひとの眼まなこを以もつて教祖けうその筆先ふでさきを批評ひひやうするのは、實じつに愚ぐの至いたりであります。あゝ惟かむながら神靈たま幸倍ちはへませ。

大正十一年九月二十四日正午十二時 於瑞祥閣

靈界物語も筆録者諸氏の丹精に由つて、漸く彌勒の神に因みたる三六の巻を口述し了りました。本巻は神素盞鳴尊の御愛兒八乙女の一人なる第七女の君子姫が、メソポタミヤの顯恩郷を立出でて敵派の邪神に捕へられ、破れた小舟に乗せられて、姉妹五人と共に大海洋に捨てられ、神助の下にシロの島、現今のセイロン島に漂着し、侍女の清子姫と共に、バラモン教の宣傳使友彦が、鬼熊別の愛女小絲姫と隠れ居たる松浦の里の岩窟に、サガレン王を尋ね、王を助けて神地の城の龍雲なる邪神を言向和し、又北光の神なる天目一の神の偉大なる應援の下に、三五教の神力を輝かし、敵味方の區別なく神の仁慈に悦服して神恩を感謝し、サガレン王を元の如く國主に推擧し、上下和合の瑞祥を顯現せしめたる、尊き面白き神代の古き物語であります。惟神靈幸倍坐世。

大正十一年九月廿四日 午後一時

第一篇 天意か人意か

第一章 二教對立（一九八九）

亞細亞大陸の西南端に突出したる熱帯の月の國は、後世これを天竺と稱へ、今は印度と云ふ。此國の東南端の海中に浮び出でたる大孤島はシロの島といふ。現代にては錫蘭島と稱へられて、佛教の始祖釋迦如來が誕生したる由緒深き島である。

釋迦は此島より佛教を、印度、西藏、安南、シヤム、支那、朝鮮と、其教勢東漸して、遂に自轉倒島の我日本國にまで、其勢力を及ぼしたのである。佛教は概して、有色人種の宗教となつてゐる。之に反してキリスト教は、大部分白色人種の宗教となつてゐる。土耳其、希臘の如きコーカス人種も亦、佛教の感化を受け、たこと最も大なるものがあつた。

シロの島といふ意義は「シ」は磯輪垣の約りである。シワ垣とは四方水を以て天然の要害となし、垣を作られてゐるといふ意味である。「口」といふ言葉の意義は、國主あり人民あり、そして獨立的土地を有し、城廓を構へて王者の治むるといふ事である。神代の昔より此島は非常に人文が發達してゐた。エルサレムに次いで神代に於ける文明國であつた。故に之をシロの島といふ。又シロといふ別の意味はシロは知るの轉訛にて、天下をしるしめす王者の居ます島といふことである。

序に島といふのはシは水であり、マは廻る言靈である。故に古は島には人の家もなく、又人類の棲息せざりしもの稱へであつた。然乍此物語にも高砂島、筑紫島、自轉倒島などと島の名義を以て呼んでゐるのは、此言靈の意義より言へば實に矛盾せし如く聞ゆるであらう。さり乍ら、今日の稱呼上分り易きを尊んで、現代的に島と稱へた迄である。其實はシロといつた方が適當なのである。我國の武家が頭を上げてから、各地に群雄割據し、各自に居城を作り、其武威を誇つた其城廓及び境域を總稱して城といつたのも、館の周圍に堀を穿ち、水を

めぐらしたから城と云うたのである。偶には山の上に館を建てて城と呼んでゐる。變則的のものもあつた。故に之を特に山城といつて、山の字を冠してゐたのである。又島といふ字は漢字で山扁に鳥を書き、又山冠に鳥を書いてシマと讀ましてあるのは、海島に數多の鳥族が棲息してゐたからである。筑紫の島とか、オーストラリア島とかいふのは、三水扁に州と書いて、現代用ゐて居る。之は字義の上からは最も適當な稱呼である。此シロの島は後世、釋迦が現はれて、佛教を起す迄は、殆どバラモン教の勢力の中心となつて居たのである。後世のバラモン教は、すべての人間は自在天の頭より生れた種族と、胴から生れた種族と、足から生れた種族と三種あるといふ教理が、深く國人の腦髓に浸み込み、頭より生れたりと稱する種族は所謂此國の貴族にして、人民の頭に立ち、遊逸徒食にのみ耽り乍ら、之を惟神の眞理と誤信してゐたのである。又自在天の胴から生れた階級人は、すべて人民の上に立ち、政治を行ふ治者の地位にあつた。又足から生れたと稱せらるる階級に屬する民族は、營々兀々として朝暮勤勞に服し、上級民族の殆ど衣食住の生産機關たるの觀をなして居た。

釋迦は此國の或一孤島の淨飯王といふ王者の子と生れ、悉達太子といった。彼は此バラモン教の不公平、不道理なる習慣を打破して、萬民を平等に、天の恵に浴せしめむと思ひ立ち、自他平等の教理を樹立し、生老病死の四苦を救はむとして、彼の佛教なるものを創立したのであつた。そして此釋迦は、神素盞鳴大神の和魂、大八洲彦命、後には月照彦神の再生せし者たることは、靈界物語第六卷に示したる通りである。

地球の大傾斜せしより以前は、今の如く餘りの熱帯ではなかつた。氣候中和を得、極めて暮しよき温帯に位置を占めて居たのである。併し釋迦の生れたる時代は、すでに赤道直下に間近き島國となつて居たのである。印度は言ふに及ばず、此錫蘭島の住民は何れも色黒く、少しく黄味を帯びたやうな膚をして居た。

神素盞鳴大神の八人乙女の第七の娘、君子姫は侍女の清子姫と共にバラモン教の本山メソポタミヤの顯恩城を後にして、フサの國にて三五教の宣傳に従事せむとする折しも、バラモン教の釘彦の一派に捉へられ、姉妹五人は何れも半破れし舟に乗せられて波のまにまに放逐されたのである。君子姫は侍女と共に激浪怒濤

を渡り、漸くにしてシロの島のドンドラ岬に漂着し、それより夜を日についで、先年友彦が小糸姫と共に隠れゐたる、神館を尋ねて進み行くこととなつた。

此神館より數里を隔てて神地の都といふがあつた。此處にはサガレン王、ケールス姫の二人が館を構へ、此島國の殆ど七分許りを統轄して居た。そしてサガレン王はバラモン教を奉じ、其妃のケールス姫はウラル教を奉じて居た。

此國の人々の言葉は残らずサンスクリットを用ふるは言ふまでもない。されど口述者は一般の讀者に諒解し易からしむる爲、成る可く日本語を以て、述べることとしておく。

神地の都の少しく南方に、娑羅雙樹の密生したる小高き風景よき丘陵がある。そこに二三の中流階級と覺しき黒い面の男が、展開したる原野の中に點々として咲き亂れて居る白蓮華を眺めて、酒汲みかはし、雑談に耽つて居る。一人はシルレングといひ、一人はユーズと云ひ、も一人の男はベールといふ。何れもサガレン王に仕へて居る一部の役人であつた。今日は休暇を賜はつて、ここに蓮の花見をすべく、一日の清遊を試みて居たのである。

シルレング「オイ、サガレン王様も本當にお氣の毒ではないか。あれ丈好きなバラモン教を公然と祀ることも出来ず、ケールス姫様がウラル教だから、姫の方の勢力が旺盛になり、館の内は何時とはなしに、信仰争ひで、何ともいへぬ殺伐で冷たい空氣が漂うて居るやうだ。王様もさぞ不愉快な事であらう。何とかして吾々の奉ずるバラモン教に立替へたいものだなア。王様計りか、吾々共も本當に不快で、政務も碌に執る氣にならないぢやないか」

ユーズ「何を言つても、ケールス姫様がウラル教の神司龍雲を殊の外寵愛し、今ではサガレン王様よりも尊敬して居られるといふ體裁だから、何うにも斯うにも仕方がないぢやないか、又あの龍雲といふ怪物は、いろいろと神變不思議の妖術を使ひ、ケールス姫を甘く籠絡し、權勢竝ぶものなき今日の有様だから、ウツカリスんな話しても龍雲の耳へ這入らうものなら、それこそ大變だ。モウ此話しは打切りにしたら如何だ」

ベール「ナニ、どこの牛骨か馬骨か知れもせぬ風來者の龍雲如きに、尻尾を巻いてたまるものかい。おれは何とかして、あの怪物を征伐し、ケールス姫様の御目

をさましサガレン王さまの御安心を得たいと思つて居る。これが吾々臣下たる者の、君に盡すべき最善の道だからなア

シルレング「時にあの龍雲の奴、左守の神のタールチン殿の奥様、キングス姫と

關係があるといふことだが、お前聞いて居るか

ベール「聞いて居るとも、第一夫れが癩に障るのだ。それだから、タールチンさ

まに、此間も面會し、いろいろと忠告をしたのだが、何といつても、嬪天下だか

ら、タールチンさまの言はれるには……今日飛ぶ鳥も落す様な龍雲さまのなさる

事に、吾々が嘴を容れる場合でない、モウそんな事は今後言つてくれな……と箝

口令を布きよるのだ。本當に良い腰拔だなア。閨閣關係を以て自分の地位を保た

うとする、其卑怯さ、實に吾々の風上におくべき代物でないのだ。何とかして龍

雲の面の皮を剥いてやる妙案はあるまいかな

ユーズ「そりや方法は幾らでもある。併しながら大事を遂行せむとする者は、輕々

に事を執つてはならない。先づ沈思黙考して敵の虚を窺ひ、時節を待つて決行す

るのだナア

ベール「其決行は如何するといふのだ」

ユーズ「オイ、ベール、お前はそんなこと云つて、龍雲の閒者になつて来て居るのではないか。どうも目付が怪しいぞ。自分の方から龍雲の悪口を言つて、俺達の腹を探つて居るのだらう。そんなことの分らぬユーズさまぢやないぞ」

ベール「コレは怪しからぬ。誰があんな怪物のお先に使はれてなるものかい。何程ベールの様に鳴る男でも、そんな秘密は言ふことは出来ないからなア」

ユーズ「ヤツパリ貴様は自白しよつたなア。秘密をいふ事が出来ないとは何だ。龍雲に頼まれて俺達の腹を探らうと、蓮見物に事よせ、ここまでつれ出して来たつたに違あるまい。サア斯うなる上は、モウ見のがすことは出来ぬ……オイ、シルレング、今の中にベール奴を片付けて了はうぢやないか」

シルレング「ヨシ、合點だ」

といひ乍ら、ベールに向つて武者振ついた。ユーズは後からベールに繩をかけむと組付く。さすがのベールも一生懸命になつて、二人を相手に格闘を始め、三人は組んづ組まれつ、小丘の上から麓の蓮池の中へ一塊になつて、ゴロゴロゴロと

落ち込んで了つた。

此時すでに月は半圓の姿を現はして頭上に輝き始めた。銀河はエルサレムの方
面から印度洋の彼方に清く流れて居る。颯々たる風は蓮の池の面を撫で、葉のふ
れて鳴る音パタパタと聞えて居る。三人は泥池の中で、バサリ、ドブンと音を立
てて泥水まぶれになつて、力限りに互角の勢で掴み合つて居る。

娑羅雙樹のこもつた枝から、梟が「ハウスケハウハウ、ドロツクドロソボ、ゴ
ロツトカヤセ、ボーボー」と鳴き立てて居る。

(大正一一・九・二一 舊八・一 松村眞澄録)

第二章 川邊の館(九九〇)

神地の城は東北西の三方、美しき青山に圍まれ、南方は稍展開し、城の東西に
餘り廣からねども、水清く流れ深き清泉が通つて居る。奇石怪岩最も多く、奇勝

絶景の地點を選んで、ケールス姫の別宅が建てられてあつた。東の河は別館の西を流れ、河の中には種々雑多の形をしたる大小無数の岩石が點在し、其間を涼々と流るる水音、聞くも見るも壯快の思ひに満たされる。

ケールス姫は、ウラル教の神司龍雲を此處に招き、朝夕となく不義の快樂に耽つて居た。サガレン王はいつも神地の館にあつて政務を見、バラモン教の自由自在天を祭りたる神殿に、殆ど閉ぢ籠り祈願に餘念なく、信仰をもつて唯一の樂みとして居た。

ケールス姫「龍雲さま、どうして又王様は此のやうな結構なウラル教の教が分らないのでせう。何とかしてウラル教を信奉さるるやうに、貴方の神力を以て悦服さして下さる事は出来ずまいかなア」

龍雲「盤古神王の御威勢、天ヶ下に何一つ御自由にならない事はありませぬ。王様をウラル教に入信させるのは朝飯前の事で御座いますが、これには何か深き神様の思召があつて、吾々に一つの決心を與ふべく仕組まれたので御座いませう。バラモンの如き、人の血を見なくては到底承知せないと云ふやうな神様を祭り、

これを信仰すると云ふは、一身上の不幸のみならず、延いて國家國民の大不幸です。併し乍ら、この錫蘭島にて誰一人指をさへるものなき王様の事ですから、吾々人間としては、何程教理を申上げた處で、いやと一口首をお振りになつたが最後、もはや申上げる事は出来ずまい」

「本當に困つたことで御座いますなア。何とかよい分別が貴方にありますまいか。かうして互に親しうなつた二人の仲、何も遠慮は要りませんまい。どうぞ貴方のお考へを、包まず匿さず私に打ち明けて下さいませ」

「何と仰せられても、是許りは口に頼張つて、如何に親密な貴女様にでも申上げる事は出来ませぬ」

「龍雲さま、貴方は随分冷靜な方ですなア。未だ私の心が分らないのですか、イヤ信用して下さらないのですか」

「決して決して信用せない處か、貴女より外に、此世の中に私の力になつて呉れる方はありません。私は貴女の爲めには一つより無い生命迄も捧げて居ります」

「それなら何故云つて下さらないのですか」

「是計りは暫く御猶豫を願ひます」

「ハイ、宜敷う御座います、貴方はタールチンの女房キングス姫には何でも仰有る癖に、信用のない私にはお隠しになるのでせう、宜敷う御座います。それならそれで私にも一つの考へが御座いますから……」

「さう悪氣を廻されては大變に困るぢやありませんか。どうぞ冷静に胸に手をあてて、今日の私の地位と境遇とをお考へ下さいませ」

「貴方は今日の地位がお氣に入らないのですか。そりやさうでせう。私だつて貴方を眞の夫と仰ぎ、この錫蘭の島をして、ウラル教の教に立替へ、島民を安く楽しく暮さしてやりたいのは胸に一ぱいで御座います。併し乍ら貴方が、エツトキング、サーチ、エール、アイ、シエール、ビーベツトになると云ふ事は一つ考へものです。うつかり遣り損ふものなら、それこそ、大變ですからなア」

「第一邪魔になるのはタールチン、シルレング、ユーズの頑固派です。あれを何とかせなくては、到底此目的は達成する事は不可能です」

「そんな事は御心配には及びますまい。併しながら蟻穴堤防を崩すとか云つて、

些とも油斷はなりませんまい」

龍雲は、ケールス姫の耳に口を寄せ、

「エールベツト、キング、シヤームン、デー、イツクス、バー」と囁いた。此言葉は如何なる意義を含んで居るか、讀者の判断に任す事とする。

かかる處へ、ベールは泥まぶれとなつて慌しく馳歸り、

「モシモシ、ケールス姫様に申し上げます。大變な、プロテスタントが現はれ、龍雲さまをベツトすると云つて、計劃おさおさ怠りなき有様です。愚圖々々して居れば、今に龍雲様は申すに及ばず、ケールス姫様の御身邊が危くなりますから、命からがら御注進に参りました」

ケールス姫「シルレング、ユーズの兩人が、龍雲様をベツトせむと云ふ計劃を廻らして居るのでは無いか」

「ハイ、其通りで御座います。貴女さまの御命令により、蓮の花見に事よせ、娑羅雙樹の森に兩人を誘き出し、彼が心底を探りみたる處、蛙は口から、何も彼も酒に酔つて喋つて仕舞ひました。さうして私を貴女様の間者に相違ないと云つて、

兩人は雙方より私に飛びかかり、ベツトせむと息巻き來るを、死物狂の力を出して格闘の結果、漸く夜に紛れてここ迄逃げて歸りました。あなた方も斯様な處にお出で遊ばしては、生命が危く御座います。どうぞ早く神地の館にお引き取り下さいませ。何時彼等は徒黨を組んで押し寄せ來るかも圖られませぬ」

龍雲「それは大變だ。姫様一先づ城内へ立ち歸る事と致しませう」

ケールス姫「別に驚くには及びますまい。盤古神王様が吾々の信仰をお認めになつた以上はキツト御保護をして下さいませう。かう云ふ時に騒がないやう膽力を練るために平常から信仰を勵んで居るのではありませぬか。龍雲様、もしシルレング、ユーズの押し寄せ來るとも、神變不思議の貴方の靈力をもつて打ち懲してやれば、すぐ埒のつく事では御座いませぬか」

と迷信しきつたるケールス姫は、龍雲の神力を過信して平然と構へて居る。

ベール「モシモシ姫様、何程龍雲様に御神力があればとて、非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は權に勝たずと云ふことが御座います。身に寸鐵も帶びざる貴方方に對し數多の反逆者共が凶器を携へ闖入し來る事あらば、時と場合に寄つて

は、いかなる運命に陥るやも分りませぬ。又貴女と龍雲様との、トツチケーアイの一伍一什を、彼等は看破して居ますから、何時サガレン王様に、貴女の御不在を窺ひ上申するやも分りませぬ。さうならば、ますますもつて事が面倒となります故、どうぞ一時も早く此處を立ち去り、お館へお歸りになつた上、姫様の御口より王様に向ひ、シルレング、ユーズの一派は、クーデターを企劃し、日ならず館へ侵入し來るべければ、早く王様に其御處置を遊ばすやうと、申上げて下さいませ。先んずれば人を制す、愚圖々々して居て彼等に計られては御身の一大事、龍雲様の御身邊も氣づかはしければ、何卒ベールの申上げる事をお聞きとどける程を願上げ奉ります。』

と顔色迄變へて述べ立てた。龍雲は顔色をサツと變へ、

「兔も角、姫様一刻の猶豫もなりませんまい。サア早く歸城致しませう。」

と惶て座を立つ。ケールス姫も稍不安の念にかられながら、城内さして立ち歸り、奥深く艶姿を隠したり。

(大正一一・九・二一 舊八・一 加藤明子録)

第三章 反間苦肉（九九一）

サガレン王は神前の間に端坐して冥想に耽つて居る。其處へ慌しく襖を押開け入り来りしケールス姫は、兩眼に涙を湛へ乍らワツとばかりに泣き伏したり。サガレン王は驚いて、

「消魂ましき汝の其様子、何事なるぞ」

と尋ねれば、ケールス姫は漸くにして顔をあげ、涙を拭ひ、

「王様、大變な事が出来ました。御用心なさいませ」

「大變な事とは何だ」

「外でも御座いませぬ。シルレング、ユーズの輩、私に徒黨を結び反逆を企て、

王様を始め妾等を今夜の中にベットして、クーデターを行ふ陰謀を企てて居りま

す」

「何、シルレング、ユーズが左様な事を企劃して居ると申すのか。それは大方何かの間違ひであらう」

「イエイエ、決して間違ひでは御座いませぬ。先日より兩人の様子如何にも怪し
と存じ、私にべールを遣はして、彼等が胸中を探らせし處、今夜を期して事を擧
ぐる手筈になつて居ります。愚圖々々致して居れば御身の一大事、社稷の顛覆は
風前の燈火も同様なれば、時を移さず彼等一派を速かに獄に投じ、而して後ゆる
ゆるとお調べにならば、一切の事實が判然する事で御座いませう。萬一べールの
報告にして誤りなりとせば、之に越したる喜びは御座いませぬ。兔も角も彼等を
捕縛し、一時投獄を仰せ付けられるが安全で御座います。此事をお聞き下さるな
らば、妾も只今限りウラル教の信仰を捨て、バラモン教に入信し、王と共に神政
に仕へ奉るで御座いませう。王様！ 何卒一刻の猶豫もなりませぬから、早く御
英斷をお願ひ申します」

「そなたがバラモン教に歸順してくれるのは有難い。第一家内圓滿の曙光を認め
た様なものだ。然し乍らシルレング、ユーズに限つて左様な不都合な事を致すべ
き道理がない。篤と取調べた上、改めて報告せよ。吾も亦ゼム、エール、エーム
スに命じて、事の實否を急々探らせ見む。先づ心を落ち付けよ」

姫はワツとばかりに泣き出し、恨めしげに王の顔を見上げながら、

「お情ない其お言葉、妾の申上げた事を貴方は信用して下さいませぬか。ゼム、エール、エームスの如き臣下の方を、貴方は妾よりも幾層倍御信任なさるのでせう。エーさうなれば最早妾は是非に及ばぬ。居ながら王の危難を見るに忍びませぬ。此處にて自害を致します」

と云ふより早く、隠し持つたる懐劍を引き抜き、アワヤ咽につき立てむとする姫の狂言を王は誠と信じ、驚いて座を起ち、姫の手をシツカと握り、

「ヤレ待て！ ケールス姫、早まるな」

「イエイエ妾は貴方には捨てられ、臣下にはせめ立てられ、此世に生きて何の望みもなく、ムザムザと臣下の手にかかつて死恥を曬さむよりも、御身の前にて潔く咽を突き切り自害を致します。何卒其手をお放し下さいませ」

と泣き叫ぶ。王は默念として居たりしが、暫くあつて口を開き、

「然らば兔も角も、シルレング、ユーズの件に就ては其方に一任する。然し乍ら一切の事情の判明する迄は、決して成敗する事はならぬぞ」

姫は此言葉を聞いて、私かに舌を剥き出し乍ら、面に涙を流しつつ、

「ハイ、不束な妾の願を御聞き届け下さいまして有難う御座います。然らばこれよりタールチンに命じ、彼等を獄に投じます。就ては彼等の罪状は後で篤と取調べ、御報告申し上げます」

と云ひ乍ら此場を立たむとするを、サガレン王は、

「ケールス姫、暫く待ちや」

と聲をかけた。ケールス姫は後振り返り、

「待てと仰有るのは、御心變りがしたのでは御座りませぬか」

「イヤ別に心變りは致さぬ。其方は今ウラル教を捨てて、只今限りバラモン教になる」と云つたであらう。それに間違ひはないか」

「仰せ迄もなく、一旦申上げた事に如何して間違ひが御座いませう」

「ウン、それなら宜い。其方がウラル教を捨てた以上は、最早龍雲は本城に必要のない男だ。速に退却を命ぜよ。一刻も置く事はならぬぞ」

「それは餘り急な御命令、龍雲にも篤と云ひ聞かし、得心をさせて歸さねばなり

ますまい。假令ウラル教なればとて、今の今迄師匠と仰いだ龍雲に對し、さう素氣なくも取扱ふ事は出來ますまい」

「イヤ、彼こそ吾に對する危険人物の張本人だ。早く退却を命ぜよ」

「一國の王とならせ給へる御身を以て、左様な無慈悲の事を仰せられましては、如何して國民が悦服致しませうか。そこは圓滿に因果を含めて退却を命ずるが、王の爲にも最前の御道だと考へます。然し乍ら謀反人の計畫は、時々刻々に準備が整ひますれば、後に至つて臍を噛むとも及びませぬ。兔も角タールチンを呼び出し、シルレング、ユーズの兩人を捕縛させませう」

と云ひ乍ら欣々として、ベールを伴ひ此場を立つて行く。

後に王は只一人黙念として差俯向き、思案に暮れて居る。かかる處へゼム、エールの兩人は、足音何となく忙しく現はれ來り、恭しく兩手をつき、ゼム「恐れ乍ら王に申し上げます。龍雲なるもの、此頃の舉動何となく怪しく、一時も早く退却を命じ給はずば、如何なる事を仕出かすかも分りませぬ故、何とか御英斷を以て彼を放逐して下さいませ」

「ウン」

と云つたきり又俯向いて居る。

エール「サア早く何とか御命令を待ちます。彼が如き怪物は最早一刻も此城内に留め置かせられては王の爲になりませぬ。云はば暗剣殺も同様ですから、吾々は死を決して忠言を申し上げます」

王「龍雲は何かよくない事を計畫して居るか」

エール「ハイ確にレール、キング、ベットの計畫を立てて居りますれば、何卒一

時も早く本城より放逐あらむ事を御願ひ申します」

王「龍雲が左様な不羈を企み居ると云ふ確な證據がつかまつたのか」

エール「ハイ、これと云ふ證據は御座いませぬが、吾々一同の考へには、如何しても彼の面上に殺氣が現はれて居ります。一刻も留めおかせらるべき人物では御座いませぬ」

王は「ウン」と云つたきり又もや両手を組んで俯向いて居る。

そこへ慌しく入り来るは以前のケールス姫、ベールの兩人である。

姫はゼム、エールの二人の姿が王の前にあるを見て大に怒り、目を釣り上げ乍ら、

「汝は奸佞邪智の大悪人、城内の秩序を攪亂致す不忠者、今宵の中に本城を乗取らむとする憎き曲者！」

と呶鳴りつけられ、ゼム、エールの二人は案に相違の姫の言葉に呆れ返り、ゼム「これは又思ひも寄らぬ姫様のお言葉、何を證據に左様な反逆者呼ばはりをなされますか」

エール「假令姫様の御言葉なりとて證據もなき其暴言、卑しき臣下なりとも吾々は聞き捨てはなりません。何を證據に左様な事を仰せられますか」

姫「黙れ！ 悪人猛々しとは汝等の事、汝はシルレング、ユーズと私かに謀し合せ、レール、キング、ベットの計畫を立てて居つたであらう……王様これも一味の奴原、決して油断はなりません。早く投獄を仰せつけられます様に……」

王は首を左右に振り、稍不機嫌な面持にて言葉鋭く姫に向ひ、
「ゼム、エールの兩人は豫が最も信任するもの、兩人に限つて左様な不心得は決

して致いたすまい。汝なんぢは居あ間に歸かへりて休きう息そく致いたせよ〽
と儼げん然ぜんとして宣せん示じした。流さす石がのケールス姫ひめも王わうの一言いちごんには返かへす言こと葉はもなく、兩りやう人にん
を睨ねめつけ後あとに心こころを殘のこしつつ吾わが居あ間まさして歸かへり行ゆく。

(大正一一・九・二一 舊八・一 北村隆光録)

第四章 無む法ふ人にん (一九九二)

神地かうぢの都みやこに程ほど遠とほからぬ、青木あをきヶ岡がをかの麓ふもとに館やかたを構かまへたタールチンの奥座敷おくざしきには、
妻つまのキングス姫ひめと共にヒソビソ話はなしが始はじまつて居ある。

タールチン〽何なんと御館おやかたには困こまつた事ことが出来できて來きたものぢやないか。ケールス姫ひめ様さま
を龍雲りゆううんの奴巧やつうまく取とり込こみ、横暴わうぼう日に夜よに募つのり、サガレン王わう様さまを見みる事こと恰ただも配下はいかの
如ごとき態たい度どである。此儘このままに放任ほうにんしおかば、神地かうぢ城やうも、シロの國くにも木端微塵こつばみぢん、滅茶苦めつちやくち
茶やに瓦解ぐわかいし大騒亂だいさうらんをかもすは、火ひを見みるよりも明あきかであらう。今いまにして何なんとか能よ

き手段を廻らし、彼の怪物を排除せなくては、王さまの御身邊も案じやられる。

何んとかそなたに良い考へはなからうかな

キングス姫「本當に困つた事が出来て来ました。バラモン教を以て民を治むる此御國へ、宗旨の違つたウラル教を植ゑ付けられては、到底紛亂の絶える間は御座いますまい。それに付けても、龍雲の悪僧、千變萬化の妖術を使ひ、ケールス姫様の心を奪ひ、今は誰恐るるものもなく、無法の限りを盡す憎き奴でムいます。何んとか之は致さねばなりませんまい」

「あの忠良なるシルレング、ユーズなども龍雲のために獄に投ぜられ、今は無辜の罪に悩んでゐる。どうかして之を救ひ出さむと、千苦萬慮すれ共、ケールス姫の疑ひ深く、龍雲の勢ひ侮る可らず。吾々左守の神としても、之を如何ともする事が出来ないのは、時世時節とはいひ乍ら實に殘念な事である。此儘にしておけば善人は悉く龍雲の毒舌にかかり、残らず亡ぼされ、悪人のみ跋扈跳梁して、遂には龍雲は如何なることを仕出かすかも知れない。彼は決して、現在の地位に甘んずる者ではない。野心満々たる怪物であるから先づ大樹を切るに先立ち其枝を

切る如く、吾等も何時如何なる運命に陥し入れらるるやも計り難い。彼を誅伐するは、今を措いて他にある可らず、どうだキングス姫、そなたは龍雲より艶書を受取つたさうぢやなア」

キングス姫は夫の言葉にやや顔を赤らめ、

「ハイ、仰せの通りで御座います。餘りの事で申し上げやうもなく、心の内にて大變に煩悶致して居りました。併し乍ら、あなた様が御存じの上は何をか隠しませう。之を御覽下さいませ」

と差出す一通の艶書、タールチンは手早く受取り、押開いて読み下せば左の通りである。

「龍雲よりキングス姫に私かに此の手紙を差上げる。此の手紙を夫にお見せになる様なことがあらば、貴女の生命はなくなりませぬ。又決して他言はなりません。龍雲は貴女の御登場の際、一目お姿を拜してより、戀慕の心禁じ難く、朝夕煩悶の鬼に捉へられ、青息吐息をついて居ります。就ては龍雲は近き將來に於て或目的を達し、シロの島國のキングと相成る考へなれば、今の内に夫を棄て、表面獨

身を装ひ、龍雲の隠し妻となつて貰ひたい。又あなたの御願とあれば、タールチンを従前の如く重く用ゐるであらう。貴女の一身の浮沈、夫の存亡に關する一大事ですから、何卒色好き返詞を賜はり度く、指折り數へて、貴女の御返詞を待つて居ります。左様なら……」

と書き記してあつた。タールチンはニツコと笑ひ、

「アハ、ハ、ハ、馬鹿な奴だなア。之さへあれば、面白い、どんな計略でも出来るであらう……コレ、キングス姫……」

と側近く耳に口を寄せ、何事か囁けば、キングス姫は莞爾として打諾き、

「仰せに従ひ美事成功させて見せませう」

と稍確信あるものの如く肯いた。

それより二日目の夕方、龍雲の側へキングス姫の手紙がそつと届いた。龍雲は願望成就と打喜び乍ら封押切つてよくよく見れば、左の如き文面が記してある。

「龍雲さま、妾のやうな不束な女に、神力無雙の生神さまより、懇切なる御手紙を頂きましたことは、妾身に取つて一生の光榮で御座います。早速御返詞を申上

げたいと存じて居りましたが、何を云つても、夫ある身の上、御返詞を書きま
暇もなく、やうやう今日、夫タールチンが小絲の館に参りました不在中を幸ひ、
此手紙を認めました。夫は四五日歸りますまい。就いては詳しく御話しを承はり
たく、又妾の心の中も申上げたう御座いますから、どうぞ藤の森の森林迄、萬障
繰合はせ、明後晩御越し下さいませぬか。もしも御越し下さることならば、此使
に嚴封して、返詞の御手紙を頂きました御座います。吾家にてお目にかかるのはい
と易き事なれ共、數多の人々の出入多く、且つ夫の不在中にあなたと御話しをし
てゐたと言はれては、世間體も何となく面白からず存じます故、何卒藤の森の頂
上まで御足勞を、強つて御願申上げたう御座います』
と記しあるを見て龍雲は大いに喜び、直ちに返書を認め、使の男に渡した。
タールチンは藤の森の或處に陷穽を掘り、其上に落葉を澤山に被せ、龍雲の來
るを今や遅しと木かげに潜んで待つてゐた。

龍雲は斯かる企みのあるとは夢にも知らず、神ならぬ身の悲しさ、得意然とし
て、城内をソツと脱け出で面部を深く包み、藤の森の頂きさして、月照る山路を

登つて行く。

細い路の中央に深き陷穽のあるのも知らず、悠々として、キングス姫に會はむと登り行く途端、踏み外して、陷穽にバツサリと落込んで了つた。タールチンは物をも言はず、土をかきあつめ、陷穽を埋めて素知らぬ顔して吾家を指して歸り行く。

此時エームスは藤の森の山上に月を賞しつつ、二三の部下と共に登つて居たが、夜中頃歸りに就き、知らず知らずに其陷穽を踏み外し、自分も亦それに陥つた。されど俄に柔かき土を以て埋めたることとて引ならしたる土も四五尺許りゴソツと落込んで了つた。其時何だか、足許に暖かい毛のやうな物が觸つた様な感じがした。エームスは二三の部下と共に、鋤鍬を吾館より持ち來らせ、汗をタラタラ流し乍ら、何人か生埋めにされて居るならむ、救ひ與へむと、一生懸命に土を掘り上げ、救ひ出して見れば豈計らむや、日頃城中に暴威を振ふるウラル教の龍雲なりとは。エームスは心の内にて……あゝ失敗つた奴を助けたものだ、こんな事なら、救ひ出すぢやなかつたに……と後悔すれ共、最早及ばなかつた。

龍雲は救ひ出されて、

「危い所を助けてくれた、恩人は何人なりや？」

と言ひ乍ら、顔を覗き込み、

「ア、お前はエームスか、能くマア助けて呉れた。何れ歸城の上、何分の沙汰を

致すから、何處へも行かず待つて居て呉れよ」

と云ひ捨て、早々藤の森の岡を下りて歸り行く。

エームスはサール外二人の部下と共に、龍雲の居間に、稍不安の念に驅られ乍ら、生命を助けてやったのだから、決して不足は云はうまい、何かキツと詞の禮位は云ふのだらうと、腹をきめてやつて來たのである。

龍雲は心の内にて、エームスの吾生命を救つて呉れた事に就いては好感情を持つて居た。されどエームスはサガレン王の右守の神として聲名あり、且つバラモン教の熱心なる信者であつて、常に自分の目の上の瘤として憎んでゐた。それ故龍雲は此機を逸せず、自分の目的の妨害になる者は善惡に係らず、何れ亡さねば

止まぬと云ふ悪心を發揮し、言葉嚴かにエームスに向つていふ。

「昨夜は危き生命を助けられ、其段は龍雲にとつても感謝する次第である。さり乍ら汝等は、タールチン、キングス姫等と謀し合せ、此龍雲を始め、ケールス姫、サガレン王をレース、ベツトせむとの野心を抱く者たる事は、歴然たる事實であれば見せしめの爲、汝を叛逆罪に定むるに依つて、さう覺悟を致したが宜からう」と儼然として言ひ渡したるにぞ、エームスは案に相違の龍雲の言葉に呆れ返り、吾々を叛逆者とは何を證據に仰せらるるや。人命を救助し乍ら、思ひもよらぬ冤罪に問はるとは前代未聞の事で御座る。龍雲殿は狂氣めされたのではあるまいか」

と氣色ばんで詰めよるを、龍雲は冷然として聞流し、ワザと作り笑ひをし乍ら、
「アハ、ハ、ハ、能くもマア白くれたものだなア。其辨解は後にゆつくり聞かう……ヤアヤア者共、叛逆人のエームスを早く縛り上げ、獄に投ぜよ！」
と呼ばはつた。かねて待構へたる數名の捕手は、有無を言はずエームスを引捕へ、直ちに暗黒なる獄屋に無理無體に投込んで了つた。

龍雲とケールス姫の命令にて、タールチン、キングス姫も亦同じ運命の下に捉へられ、獄舎に呻吟する身の上となつて了つたのである。

サールは僅に身を以て此場を逃れ直ちにゼム、エールの館に駆け至つて、其實状を一々報告した。ゼム、エールはサールと共に、時をうつさずサガレン王の館に参り、龍雲が暴状を陳奏した。サガレン王は大に驚き、直ちに侍臣をしてケールス姫、龍雲を召し出だした。

龍雲、ケールス姫の二人は豫て覺悟の事とて、驚きたる色もなく、悠々として入り来り、
姫「今お呼びになつたのは、如何なる御用で御座いますか」

サガレン王は目をしば叩き、

「ケールス姫！」

と言を強め乍ら、

「其方は左守の神、タールチン夫婦を始め、エームスを獄に投じたのは如何なる罪あつての事か、一應吾の裁斷を得た上にて決行致すべきものなるに、汝一了簡

を以て、斯かる重臣を徒に投ずるは不届きならずや。又汝はウラル教を捨て、龍雲を放逐すると、吾に誓ひながら、相變らず龍雲を側近く招き、種々良からぬ計畫をなすとは、言語道斷の行方、今日より汝を始め龍雲の兩人を放逐いたす、サア早く此場を立去れ！」

と怒髪天を衝いて呶鳴り立てたれば、龍雲はケールス姫に目配せし、龍雲「苟くも王者の身を以て斯くの如き暴言を吐き玉ふは、普通の精神に非ざるべし。王には發狂の兆あり、否既に發狂し居れり。早く座敷牢に入れまつり、御攝養を遊ばさねば、此上病勢募る時は、第一本城の爲には不幸此上なく、國民の迷惑は一方ならざるべし。ケールス姫殿、如何遊ばす御考へなりや」

ケールス姫は黙つて俯いてゐる。サガレン王は益々怒り、

「汝龍雲、吾に向つて發狂とは何事ぞ。手打ちに致して呉れむ」

と大刀をスラリと引抜き、斬つてかからむとす。數多の近従は王の背後よりムンツと許り抱き止めた。龍雲は一同に向ひ、

「王さまは御病氣におはしませば、御全快遊ばすまで、座敷牢にお隠し申せよ」

と下知する。ケールス姫は何とも云はず、首を垂れて、サガレン王に顔を見せぬやうに努めてゐる。

其間に憐れや王は龍雲の腹心の部下の爲に、發狂ならざる身を發狂者として一室に監禁さる事となつて了つたのである。

（大正一一・九・二一 舊八・一 松村眞澄録）

此日風強く雨さへ降り來り頗る冷氣を覺ゆ

第五章 バリーの館（九九三）

龍雲は、サガレン王を發狂者として幽閉し、左守神のタールチン夫婦を初め、右守神のエームス、ゼム、エール、シルレング、ユーズ等のバラモン教信者にして王に誠忠なる人物を残らず獄に投じたれば、今は誰憚る者もなく、ケールス姫と共に國王氣取りになつて、益々傍若無人の行動をなし、惡逆日に増長して、怨

嗟さの聲こゑは國內こくないに轟とどろき渡る事こととなつた。龍雲りゅううんも遠さすは人心じんしんの向背かうはい如何いかんを顧かへみ、公然こうぜん王わうと名乗な乗りる事ことをなさず、ケールス姫ひめを表おもてに立たて、自分じぶんは黒幕くろまくとなつて國政こくせいを掌握しやうあくし、ケリヤを左守神さもりのかみとし、ハルマを右守神うもりのかみとなし、ベール、メール、ヨールの三人さんにんを拔擢ばつてきして重要ぢゆうえつなる位置ゐちに据すゑ、日夜にちや、茗宴めいえんに耽ふけり、放埒不羈ほうらつつぶきの生活せいくわつを送おくりつつあつた。

さうしてサール、アナン、セール、ウインチなぞの正義派せいぎはを盡ことごとく捕とへて獄ごくに投とうぜむと、部下ぶかを四方しほうに派はして搜索そうさくし初めはじめた。されど四人よにんは、早くも姿すがたをかくし、バリーの山中さんちゆうに隠かくれ、數多あまたの正ただしき王わうの部下ぶかを集あつめて、龍雲りゅううんを滅ほろぼし、王わうをして再びふたたび元の地位ちゐに立たたせむと企劃きくわくしつつあつた。さうして、タールチン以下いかの冥窓めいそうに苦くるむ人々ひとびとを一日いちにちも早はやく救すくひ出ださむと、晝夜ちうや肝膽かんたんを碎くだきつつあつたのである。龍雲りゅううんは秘藏ひざうの弟子でしと頼たのみたるテーリスをして牢獄らうごくの番人頭ばんにんがしらとなし、一同いちどうの動靜どうせいを監視かんしせしめつつあつた。されど此このテーリスは最もつとも思慮しりよふか深じんぶつき人物じんぶつにして、サガレン王わうの今日こんにちの境遇ききやうを豫知よちし居あれば、初めはじよりケールス姫ひめ、龍雲りゅううんに取り入とり入り、絶ぜつ對的たいてきの信任しんにんを受け居あつた。それ故ゆゑに龍雲りゅううんはテーリスを拔擢ばつてきして牢獄らうごくを守まもらしめ、

これにて大丈夫と安堵の胸を撫で卸しつつあつたのである。
バリーの山奥には巨大なる岩窟があつて、中は天然の住家となつて居る。此處にサガレン王に忠實なる人々は暫し姿を隠し、龍雲誅伐の計畫を廻らしつつあつた。

サールは一同に向ひ、

「最早今日となつては、龍雲も稍安心の胸を撫で卸し氣を許し居るならむ。何とか致して夜襲を試み彼を引き捕へ、目に物見せてやらずば、王様を初め忠實なる人々の身邊は刻々に危険迫り、吞臍の悔を残す事あるべし。如何にすれば宜敷からむや」

と一同に計れば、アナンは進み出で、

「先づ第一にタールチン以下を救ひ出し、短兵急に攻め寄せて龍雲を奪ひとり、徐にケールス姫の御改心を願ふをもつて穩健なるやり方と考へます。漫りに人を殺すは天の許さざる處、止むを得ざれば彼を誅伐するも詮なけれど、成らう事なら一旦彼を捕縛して改心をせまり、どうしても聞かざれば其時の手段に致さうで

は御座らぬか」

ウインチ「この期に及んで、そんな手緩き事はして居られません。斯の如く忠臣義士の集まりし上からは、一擧に攻めよせ龍雲を滅し、國家の爲め害をのぞくに如くはありますまい」

セール「先ず第一に、タールチン、エームス以下を救ひ出すのが肝腎で御座らう。併し乍らこれは容易の業では御座らぬ。皆さまは何か確信が御座いますかな」

アナン「確にあります。テリスと内外相應じ、先づ彼をして時を窺ひタールチン以下を救ひ出さしめ、それを機會に攻め寄せなば易々たる業で御座らう」

ウインチ「何を云うても名利に走る世の中、惡に従ふものは大多数、吾等は寡をもつて衆に當る事なれば、餘り樂觀は出來申さぬ。又テリスは龍雲の股肱と頼む大の味方、さう註文通り彼が返り忠を致す氣遣ひもありますまい」

アナン「決して決して御心配は無用で御座る。テリスは今日ある事を豫知し、わざと龍雲の喉下に這入り、甘く彼が股肱となつた者故、牢獄の監督を命じたので御座います。きつとテリスは吾々の至るを待つて居るでせう」

ウインチ「果して夫れが眞なりとすれば、實に此上なき好都合で御座る。何とか彼に面會する機會は御座るまいかなア」

アナンはニツコと笑ひ、

「澤山に手段は御座る。先づ御一同が夜討の計畫を整へられた上、私は神地城近く進み入り、態と龍雲の部下に捕へられ、入牢してテリスに遇ひ、この計畫を竊に示し合せ、事を計るで御座らう。先ず私は是より神地の都近くに進ませう。こちらの方に準備が整へば牢獄の近邊に夜竊に現はれて、爆竹の合圖をして下さい。さすれば私はテリスと共に、内部の人々を牢獄より放ちし上、爆竹をもつて合圖を致しませう。その音を聞くと共に表門に殺到されたし。必ず内より門を開き、共に共に大活動を致しませう。これより外に計略はありませぬ」

サール「なる程結構な謀ではありませんが、龍雲も亦、神變不思議の妖術を使ふ奴なれば、吾々の計略を前知し却て敵に計られ、反對に滅さるるやうな事はありませんまいかなア」

アナン「決して左様な心配は入りませぬ。龍雲は些しも神通力はもつて居ませぬ。

もし、果して彼に神通力がありとすれば、テーリスの心を看破せずには居りませぬ
まい

ウインチ、サール、セールは『成程』と打ち諾き、思はず知らず『アハ、ハ、ハ』
と打ち笑ふ。

アナンは門出の祝として歌を謡ふ。

『あゝ面白し面白し 不倶戴天の仇を討ち

君を助くる時は来ぬ ウラルの教の龍雲が

いつの間にやら錫蘭の島 神地の都に現はれて

種々雑多と計畫し ケールス姫の傍近く

侍りて姫を誑惑し 日に日につのる悪逆無道

左守神のタールチン キングス姫を初めとし

エームス、ユーズ、ゼム、エール シルレング迄も無残にも

牢獄の中に投げ込みて 自己に従ふ悪者を

近ちかづけ遂つひに野やしん心をば

遂すめかう行かうせむと朝あさ夕ゆふに

よからぬ事ことを企たくみつつ

サガレン王わうを幽いう閉へいし

飛とぶ鳥とりさへも落おとすよな

その勢いきほひのすさまじく

侮あなどり難がたく見みえにけり

さはさりながら天あめ地つちの

皇すめ大神おほかみはいかにして

此この狂きやう暴ぼうを許ゆるすべき

天てん地ちの道だう理りに背そむきたる

曲まがの司つかさの龍りう雲うんを

滅ほろぼしたまふ時ときは來きぬ

あゝ面おも白しろし面おも白しろし

精せい忠ちう無む比ひの人ひと々びとは

この隱かく家れやに集あつまりて

君きみの御おん爲ため國くにの爲ため

軍いくさを整ととのへ神かう地ぢ城やう

さして堂だう々だう進すすみ行ゆく

天てん地ちの神かみも吾われ々われが

誠まことを諾うべなひたまひつつ

太ふとき功いさをを永とこ久しへに

立たてさせたまはむ逸いち早はやく

準じゆん備びを整ととのへ曲まが神かみを

打うち平たひらげて天あめヶ下がした

四よ方もの民たみ草くさ安やすらけく

いと平たひらけく治をさむべし

吾われはこれより一ひと走はしり

神地の都に立ち向ひ

彼の龍雲が手下等に

甘く捕はれ入獄し

テリスさまに廻り遇ひ

すべての計畫打ち合せ

サール、セールやウインチの

神軍攻めて来る迄

總ての準備を整へむ

あゝ惟神々々

御靈幸はひまませよ

忠義に逸る吾々が

願ひを漏らさず聞し召せ

神地の城は高くとも

周囲の堀は深くとも

忠義一途の眞心に

刃向ふ敵はよもあらし

あゝ勇ましや勇ましや

君を助くる時は來ぬ

あゝ惟神々々

數多の正しき人々よ

後より用意を整へて

進んで來れ逸早く

吾は一先づ立ち出でむ

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

誠の力は世を救ふ

神が表に現はれて

善ぜんと悪あくとを立てたてわける
三五あななひけう教けうではなけれども

此この世よを造つくりし神かむ直なほ日ひ
心こころも廣ひろき大おほ直なほ日ひ

唯ただ何なに事ごとも人ひとの世よは
直なほ日ひに見み直なほせ聞き直なほせ

身みの過あやまは宣のり直なほす
神かみの心こころに顧かへりみて

惡あく逆ぎやく無む道だうの龍りゆう雲うんも
心こころを改あらためまつるへば

必かならず命いのちは助たすくべし
いざいざさらばいざさらば

いづれも無ぶ事じで神しん軍ぐんを
指し揮きして後あとより來きたりませ

と足あし早はやに旅たび装しやう束ぞくを調ととのへ、神かう地ぢの都みやこを指さして進すすみ行ゆく。

(大正一一・九・二一 舊八・一 加藤明子録)

第六章 意外いぐわいな答こたへ (九九四)

アナンはサール、セール、ウインチの同志に別れを告げ、テールリスに會つて内
外相呼應し、一擧に龍雲を捕へむと計畫を定め、ブラリブラリと神地城近く現は
れた。メール、ヨールの兩人は忽ちアナンを捕へ獄に投じた。

アナンはテールリスが依然として牢獄の監督たるべしと確信して居たが、豈圖ら
むやべールの悪人が何時の間にか代つて居る。龍雲もテールリスを固く信じ吾股肱
と頼み、大切なる牢獄の監督を命じて居たが、彼も悪者、萬一正義派に款を通じ
如何なる事を仕出かすやも計り難しと、奸智に長けた龍雲は、ベールをして之に
代らしめたのである。アナンは斯うなつては恰も飛んで火に入る夏の蟲も同様で
あつた。凡ての計畫はこれにてサツパリ齟齬して了ふ事を非常に恐れざるを得な
かつた。アナンは獄中にて私かに謠ふ、其歌、

天と地とを造らしし 誠の神のいます世は
如何なる事か恐るべき 天に煌めく星の影
地は青々と生茂り 山河清く美はしく

蓮はちすの花はなは遠をち近こちに
 咲さき匂にほひたる神かみの國くに
 吾われ等らは神かみの子こ神かみの宮みや
 いかでか曲まがのをかすべき
 如何いなる艱なやみに遇あふとても
 心こころも身みをも皇すめ神かみに
 任ませ奉まつりて信あな仰なひの
 誠まことを盡つくす吾われこそは
 神かみも照せう覽らん遊あそばさむ
 一いち度どは敵てきに惱なやまされ
 百もの責せめ苦くに遭あふとても
 一いつつしか開ひらく神かみの門もん
 此このシロ島しまはサガレン王わうの
 君きみの命みことの永とこ久しへに
 鎮しづまり居ゐまして國くに民たみを
 いと平たひらけく安やすらけく
 知しろし召めすべき神かみの國くに
 ウラルの道みちの神かみ司つかさ
 龍りゅう雲うんいかに暴はつ力りよくを
 揮ふるふといへど曲まが神かみの
 籠かごに飼かはれし鳥とりさへも
 いかでか正せい義ぎに敵てきし得えむ
 籠かごに飼かはれし鳥とりさへも
 一いつつしか破やぶれて天あめ地つちの
 廣ひろき御み園そのに悠いっ々うと
 春はるをば謠うたふ時ときあらむ
 あゝ惟かむ神かみ々ながら々ながら
 神かみの靈たまの幸さちはひて
 サガレン王わうを始はじめとし

忠義に厚きタールチン キングス姫やゼム、エール
 エームス、ユーズ、シルレング 尊き正しき人々の
 身魂を安く守りませ アナンは敵に捕へられ
 苦しき月日を送るとも 君の御爲め國の爲め
 世人の爲めとなるならば 如何でか命を惜まむや
 いかなる敵の現はれて 水責め火責めはまだ愚か
 劍の責苦に遭ふとても 君に捧げし此生命
 心も廣きシ口の島 神地の獄舎に囚はれて
 身は儘ならぬ籠の鳥 なれども心は清々と
 天地四方の國原を 自由自在に逍遙し
 皇大神の御光は 吾身の上を照しまし
 歡喜は胸に湧き滿ちぬ 朝日は照るとも曇るとも
 月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも
 八岐大蛇の憑りたる 醜の司を言向けて

此神國を永久に 守らにやおかぬ吾心
生きては御國の楯となり 死しては護國の鬼となり
誠一つを天地に 貫き通す樂しさよ
ベールの眼は光るとも 夜は見えない人の身の
いかでかわれ等の心根を 探りあてむや惟神
神の教に背きつつ 一時の榮華に憧れて
魔神に媚びつ諂ひつ 吾身一つの榮達を
計らむとする卑劣さよ 思へば思へばべールこそ
實にも憐れな者ぞかし あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ

エームスは又獄中にありて、私に述懐を述べて居る、其歌。

天地を造り固めたる

國治立大御神

大地の力と現れませる

神素盞鳴大御神

大地の靈と現はれし

金勝要大神の

守らせ給ふ瑞穂國

中にも尊きシ口の島

此神國は天地の

殊更深き御恵に

榮えて進む珍の國

此神國を知ろしめす

サガレン王は民草の

主と居まし師と居まし

親とまします嚴の神

高き御稜威はヒマラヤの

山も物かは行く雲も

伊行き憚る珍の王

ウラルの道の龍雲が

非望の企みに乗せられて

今は苦しみ給へども

如何でか神は許さむや

ケールス姫や龍雲の

惡逆無道の振舞は

天地容れざる逆罪ぞ

あゝ惟神々々

神が表に現れまして

善惡正邪を分ちまし

魔神を亡ぼし善神を

救はせ給ふは目の當り

吾等は獄舎に投げ込まれ 無限の苦痛に遭ふとて

心は廣き天の原 空行く鳥の如くなり

如何に無道の龍雲も 吾等が清き魂を

縛り苦しむ枉業は 如何に心を盡すとも

到底行ひ得ざらまし 心の空に日月の

輝き渡る正義の士 如何でか獄舎を恐れむや

神は吾等と俱に坐す バラモン教の自在天

大國彦の御前に 心を清め身を淨め

一日も早く吾王の 心を安んじ苦しみを

救はせ給へ惟神 神の御水火に生れたる

サガレン王の側近く 右守神と仕へたる

道の司のエアルスが ひそかにひそかに祈ぎ奉る

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

と謠ふ折しも、ベールは足音高く此場に現はれ來り、獄舎の外より、

「エームスさま、只今龍雲殿より、貴方に對する疑ひは全く晴れたから、許して

やれとの御言葉で御座います。貴方は龍雲様の危難を救うた殊勲者だから、何卒

早く此處を出て下さい」

と聲を和げて、慇懃に打つて變つた態度で言ひ渡すにぞ、エームスは頭を左右に

振り、

「それは誠に以て有難う御座います。然し乍ら私は最早社會へ出て働かうとは思

ひませぬ。それ故此別莊が殊の外氣樂で御座いますれば、何卒永く獄において下

さる様龍雲殿にお願ひをして下さい。折角居馴ずんだ處で御座いますから、出る

のが惜しくなりました。アハ、ハ、ハ、」

「これはしたり、エームスさま、獄舎の中が結構だとは、そりや本心でおつしや

るのですか」

「私は此處で一生を送り度く希望して居ります。到底龍雲さまに許され、或はお

役に使はれましても、不運な者は何處迄も不運、又候、人を助けて牢獄に打ち込

まれる様な事が出来致しても詰りませぬから、此處に斯うして居れば、罪を作らず心を悩まさず結構で御座います。何卒私を解放して此上苦勞をさせぬやうに許して下さいませ。どうも私の性質として、悪い事は出来ませぬ。悪い事を平氣で巧くやつて除ける人間は龍雲様の御引立によりましてズンズンと御出世遊ばすなり、命をお助け申して善事をなしたる私は獄に投ぜらるると云ふ様な逆様の世の中ですから、到底社會へ出て活動する場所が御座いませぬ。何時までも此處に置いて貰ひ度いと申すのは左様の次第でありますから、惡からず龍雲殿に此由をお傳へ下さいませ」

「これは又變つた御意見、べールも一向合點が参りませぬ。何は免もあれ、一應龍雲様にお伺ひ致して参りませう」と云ひ乍ら、スタスタと此場を立ち去る。

(大正一一・九・二一 舊八・一 北村隆光録)

第七章 蒙塵（九九五）

サガレン王は一室に取込められ、發狂者と誣いられ、嚴重なる監視人付きにて晝夜の別なく見張られてゐた。サガレン王は一絃琴を取出し、聲も靜かに歌ふ。

父は大國別の神
イホの都に現れまして

教を開き玉ひしが
三五教の神司

夏山彦や祝姫
其他百の神人に

追ひ拂はれて顯恩の
郷に鬼雲彦を伴れ

教を開き玉ひしが
間もなく父は世を去りて

鬼雲彦はバラモンの
教司となり終ほせ

われを見すてて顧みず
やむなく吾はシロの島

神地の都に現はれて
漸く教を四方の國

布き擴めつつ國民を
教へ導き王となり

これの國地は穩かに

治まりみたる折もあれ

ウラルの道の龍雲が

何處ともなく現はれて

ケールス姫を籠絡し

日に日に勢力扶植して

傍若無人の彼が業

此神城を奪はむと

善からぬことを企てつ

心の狂ひしわれなりと

今は無残に籠の鳥

詮術なさに泣く涙

止むる由も荒浪の

海に漂ふ如くなり

危険刻々身に迫り

明日をも知れぬ吾生命

誠の神のましまさば

一日も早く曲神を

きたため玉ひて元の如

われをば再び王となし

忠誠無比のタールチン

キングス姫やエームスや

ユーズ、サールにゼム、エール シルレングをば救ひませ

名利に狂ふ曲神の

われの恩顧を打忘れ

心汚き龍雲が

前に腰をば屈めつつ

髭ひげの塵ちりをば拂はらふ奴やつ

館やかたの内うち外とに充じう満まんし

正義せいぎは亡ほろび邪じやは榮さかえ

世よは常とこ闇やみと成なり果はてて

心こころの空そらは村むら雲くもに

包つつまれ了をへぬ十と重へ二十は重たへ

晴はらさむ由よしも泣なく計ばかり

あゝ惟かむ神ながら々々かむ

神かみの御み靈たまの幸さちはひて

一ひと日ひも早はやく片かた時ときも

此この苦くるみを除のぞかせよ

神かみは吾われ等らと俱ともにます

神かみの心こころに叶かなひなば

いかなることか成ならざらむ

善ぜんをば助たすけ曲まが神かみを

亡ほろし給たまふ神かみの道みち

一ひと日ひも早はやく吾わが胸むねに

照てらさせ玉たまへ自じ在ざい天てん

大おほ國くに彦ひこの御おん前まへに

謹つしみ敬あやまひ願ねぎまつる

旭あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

魔ま神がみは如い何かに荒すさぶとも

誠まことの神かみのある限かぎり

誠まことの道みちをひたすらに

守まもる眞ま人まひとを如い何かにして

守まもらで居ゐます事ことあらむ

あゝ惟かむ神ながら々々かむ

神よ吾等を憐みて 一日も早く救ひませ
吾身一つの爲ならず シロの島根に生ひ立てる
靑人草を救う爲 守らせ玉へと願ぎまつる
あゝ惟神々々 御靈幸はひまませよ

と心靜かに、琴の音に合せて、述懷を歌ひつつありぬ。

テーリスは此處に現はれ來り、あたりに人無きを幸ひ、室の外より聲も靜に歌ひてサガレン王に、アナンの一派が君を救ひ出すべく計畫しつつありとの事を、歌に装ひて述べ立てたり。其歌。

シロの島根の眞秀良場や 靑垣山の頂きに
そそり立ちたる常磐木の 色も靑々若緑
枝葉も茂る勢に 醜の魔風の吹きすさび
其大木を倒さむと 朝な夕なに計らひつ

心も猛き【龍】巻の 【雲】の勢強くして

一度は峰を包め共 神の御息に吹きうつる

科戸の風はいつまでも 吹かずにあるべき惟神

神に御心任せつつ 八重雲四方に吹き分くる

強き力の時津風 今吹かむとすサガレンの

君の命よ今暫し 待たせ玉へよ汝が上に

清き月日はテリスや アナン、サールを始めとし

セール、ウインチ、エームスの 清き身魂は雨となり

風ともなりて君の邊を 洗ひ清めむ待て暫し

神の御靈の幸はひて 八岐大蛇や醜狐

巣ぐふ身魂をサラサラに 拂ひ除くる喜びは

有明月の眞夜中頃 水も眠れる丑満の

時を伺ひ汝が命 救ひまつりて元の如

此神國にサヤサヤに 御稜威輝き國人の

大主師親だいしゆししんと仰あふがれて
月日つきひと共にとも其光そのひかり

競きそひ玉たまふも目まのあたり
心平こゝろあたひに安やすらかに

月日つきひを待またせ玉たまへかし
エームス、テールリスりやうにん兩人は

君きみの御側みそばを伺うかがひつ
如何いかなる曲まがの猛たけびをも

一指ひとゆびだにもさえさせず
心こゝろの限かぎり身みの限かぎり

守まもりまつらむ心安こゝろやすく
思召おぼしめされよテールリスが

ひそかにひそかに村肝むらきもの
心こゝろを明あかし奉たてまつる

あゝ惟かむながらかむながら神々々
御靈みたま幸さちはひましまして

わが大君おほきみはすこやかに
日ひに夜よに身魂みたまきよ清きよらけく

すごさせ玉たまへ大國彦おほくにひこの
神かみの命みことの御前おんまへに

謹つつしみ敬あやまひ願ねぎまつる
』

サガレン王わうはテールリスの歌うたを聞きいて、アナン以下いか忠誠ちうせいの臣しんが、
出だすべき時ときの來きたる事ことを悟さとり、大おほいに心こゝろを強つよくし其日そのひを待まてり。
やがて吾われを救すくひ

龍雲はケールス姫を伴ひ、王を監禁せる居間の前に儼然として現はれ來り、窓よりソツと室内を眺め聲高々と歌ふ。

サガレン王よ聞こし召せ　ウラルの神の司なる

神徳強き龍雲が　汝に一言宣り傳ふ

此シロ島はサガレン王の　君の治らする國ならず

常世神王の末裔と　名乗りて世人を迷はせし

其天罰は目のあたり　神より受けし生靈は

今や狂ひて憐れにも　前後不覺の發狂者

さはさり乍ら汝も亦　天地の神の御水火より

生れ出でたる者なれば　如何に暴惡無道とて

殺しすつるに忍びむや　これより汝は村肝の

心を清め眞心に　省み直して一日も

とく速やけく汝が位　退き吾れに譲れかし

さすれば吾れは汝をして 安く樂しく永久に

生命を保たせ參らせむ 盤古神王の靈の裔

ウラルの彦の系統と 其名も高き龍雲が

ケールス姫と諸共に 神地の城に現はれて

數多の國民悉く いと平けく安らげく

神代の姿に導きて 世を永久に守るべし

もしも否ませ玉ひなば われにも深き仕組あり

汝が命の御命は 嵐の前の燈火と

消えて失せむは目のあたり あゝ惟神々々

神の御靈に省みて わが言靈を神直日

心も廣く大直日 よく見直せよ聞直せ

最早運命つきし汝 いかにか心を碎くとも

此大勢を如何にして 挽回すべき時あらむ

人は心が第一よ 心一つの持様で

今日より氣樂に暮さうと 苦み悶え玉の緒の

命を捨てて根の國や 底の國なる苦しみを

なめ味はふも汝が心 たつた一つの使ひ方

否か應かの返り言 早く聞かせせ玉へかし

ケールス姫と諸共に 汝が命の決心を

促しまつる龍雲が 慈愛の心を諒解し

今目の前で御位を われに譲ると一言の

玉の御聲を賜へかし あゝ惟神々々

神に誓ひて龍雲が 汝が命に打向ひ

答へを糺し奉る あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と勝手な理屈を竝べ立て、サガレン王を密室に監禁し、自由を束縛し、無理往生に讓位せしめむと、惡逆無道の言靈を臆面もなく發射してゐる。王は餘りの龍雲

の暴言ぼうげんに呆れ返りあきかへ、默然もくねんとして俯うつむいたまま、何なんの應いらへもなく龍雲りゅうんの聲こゑする方ほうを見つめたり。

斯かかる所ところへ城しろの外そと面に爆竹ばくちくの聲響こゑひびくと共にとも、『ワアワア』と數百人すつひやくにんの人の叫聲さけびこゑ、只事ただごとならじと龍雲りゅうんを始めケールス姫ひめは、蒼皇さうくわうとして此場このばを立出たちいで、龍雲りゅうん『正まさしく、アナン一派いっばの敵てきの襲來しふらいならむ、早はやく防戦ぼうせんの用意よういなせ』

とケリヤ、ハルマの臨時左守りんじさもり、右守うもりの神かみに向つて下知げちを下せくだば、兩人りやうにんは城内じやうないの人々ひとびとを集め俄あつに武裝ぶさうせしめ、上うへを下したへと周章しゅうしやう狼狽らうたいしながら、防戦ぼうせんの準備じゆんびにさしかかりたるに、早はやくもアナンの一軍いちぐんは表門おもてもんを打破うちやぶり、城内じやうない深く関ときを作つて亂入らんに入し來る。

エームス、テリスの兩人りやうにんは此聲このこゑに勢いきほひを得て勇み立ち、龍雲りゅうん、ケールス姫ひめ其他その他の一同いちどうが防戦ぼうせんの用意よういに精神せいしんを奪うばはれる隙すきを伺うかがひ、サガレン王わうを抱かかへ、裏門うらもんより人目ひとめを忍しのびて、いづくともなく逃にげ出だしにける。

(大正一一・九・二一 舊八・一 松村眞澄録)

第八章 悪現靈（九九六）

アナン、セールの一隊は館に向ひ、サール、ウインチはタールチン、キングス姫、ゼム、エール、シルレング、ユーズを救ひ出さむと、牢獄の方に猛進した。ベールは部下の獄卒と共に死力を竭して戦うたが、つひにコリヤ叶はぬと思ひしか雲を霞と姿を隠して了つた。

サール、ウインチは一同の忠臣を首尾よく救ひ出だし、次にアナン、セールの隊に合すべく王の館を指して進み行く。龍雲、ケールス姫は奥の間に顔の色を變へ、手鎗を小脇に抱へ、寄らば突かむと身構へしてゐる。

眞先に進んだアナン、セールを始め、シルレング、ユーズは不運にも、館の中の俄作りの深き陷穽におち込んで了つた。

サール、ウインチを始め、タールチン、キングス姫、ゼム、エールは、此上深入りするは如何なる羽目に陥るやも計り難しと、大事をふんで後へ引返し、表に出でて再び戦ひを繼續しつつあつた。

ケリヤ、ハルマは采配を打ふり打ふり、所在精銳の武器を揃へて、命限りに防ぎ戦ひ寄せ手の人数は殆ど三分以上瞬く間に斬り倒されて了つた。サール、ウインチは止むを得ず、タールチン、キングス姫、其他と共に一先づここを退却し、再び捲土重來の策を構ぜむと、バリーの館に軍を返した。

龍雲は見方の將卒を集め、今日の防戦の偉勳を口を極めて賞揚し、城の外部を念入りに警護せしめた。そしてサガレン王を始め、信用し切つたるエームス、テリスの姿の見えざるに驚き、再びケリヤ、ハルマに命じ、捕手を四方に遣はして、王、外二人の所在を厳しく搜索せしめた。併し乍ら、王の行方は到底分らなくなつて了つたのである。

龍雲は部下の將卒を勞ふべく、城の廣庭に草蓆を布き、四方を警戒し乍ら、大祝宴を開いた。其席上にて龍雲は聲高々と歌ふ。

此世の御祖とあれませる
鹽長彦大神の

御稜威は今や輝きて
ウラルの教の世となりぬ

大國彦の系統と 世に誇りたるサガレン王の

醜の魔神は龍雲が 廣大無邊の神徳に

吹き拂はれて影もなく 煙となつて消え失せぬ

われは是よりシロ島の 司となりて百司

百人達を悉く ウラルの神の御教に

まつろひ合せ御恵の 露を普くうるほさむ

あゝ惟神々々 鹽長彦の御威勢は

今に始めぬ事乍ら 四方の草木も悉く

片葉もとめず伏しなびく かかる尊き大神の

教にまつろふ龍雲は 天津神たち八百萬

國津神たち國魂の 神の力を身に受けて

月日の如く永久に 輝きわたるわが御稜威

稱へまつれよ百司 ケールス姫を始めとし

左守右守の神司 ケリヤ、ハルマは云ふも更

ベールやメール、ヨール迄 吾神徳にまつるひて

清く仕へよ吾前に われは此世を平けく

治むる救ひの神なるぞ 此シ口島に龍雲の

納まる限り鬼大蛇 いかなる曲津の攻め來共

恐るる事はなき程に 上と下とは睦び合ひ

心を合せ力をば 一つになしてわが治らす

此神國を守れかし あゝ惟神々々

神の御前に眞心を ささげて祈り奉る

と悪にも三分の理屈があるとやら、一かどよい氣になつて、臆面もなく大勢の前
に厚かましくも其千枚張りの面の皮をさらし、得々としてゐる。

ケールス姫は其尾に付けて機嫌よく自ら歌ひ、自ら舞ひ、龍雲の武運と其幸福
を祈りたる、其歌。

高天原たかあまはらに現あれませる

鹽長彦しおながひこの大神おほかみの

守り玉まもたまへるウラル教けう

神かみの司つかさの龍雲師りううんし

廣大無邊くわうだいむへんの御神德ごしんとく

現あらはれまして今いまここに

シロの島しまをば平たいけく

いと安やすらけく治をさめます

聖ひじりの世よとはなりにけり

喜よろこび勇いさめよ百司ももつかさ

國人くにびとたち達もろともも諸共もろともに

龍雲司りううんつかさの神德しんとくを

心こころの底そこより喜よろこびて

稱たたへまつれよ惟神かむながら

神かみの力ちからは目まのあたり

心こころの弱よわきサガレン王わうの

君きみの命みことは汚けがれたる

バラモン教けうを朝夕あさゆふに

命いのちの如ごとく崇あがめつつ

此世このよを紊みだし玉たまひけり

曲津まがつの神かみの猛たけびにて

神地かうぢの城しろは日ひに月つきに

衰おとろへ行きゆて刈かりごもの

亂みだれ果はてたる有様ありさまを

治をさむる由よしも泣なきね入り

苦くるしみ切きつたる折柄をりからに

ウラルの道みちの神司かむつかさ

神德しんとく高たかき龍雲りううんが

あまつみそら 天津御空の雲にのり
はるばる茲に下りまし

せんべんばんくわ 千變萬化の神力を
あら 現はし玉ひて吾々を

かみ おほぢ 神の大道に導きつ
たふと 尊き神の御國に

すく たま 救ひ玉ふぞ尊けれ
かむながらかむながら あゝ惟神々々

わらは 妾はいかなる仕合せか
いま 今まで曇りし胸のやみ

しなど 科戸の風に影もなく
ふ 吹き拂はれて村肝の

こころ 心の空に月は照り
ほし 星の光はキラキラと

かがや 輝きわたる身となりぬ
ケリヤ、ハルマを始めとし

そのた もも 其他の百の司たち
わがことたま 吾言靈を諾なひて

いま さき 今より先は真心の
かぎ 限りを盡し身を盡し

りつづんつかさ 龍雲司の御教を
こころ 心に放さずよく守り

あめがした 天ヶ下なる民草を
すく たす 救ひ助けて永久に

ゆるがぬ 朽ちざる御世となし
あまつまこと 天津誠の大道に

まつろひまつれよ 惟神
かむながら 鹽長彦の御前に

ケールス姫が真心の あらむ限りを打あけて

つつしみ敬ひねぎまつる あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と陽氣になつて歌ひ舞ひ納め、龍雲の手を曳いて、奥の間深く進み入る。
ケリヤは一同の司及び雑役等に向つて、鼻高々と歌を以て宣り傳へた、其歌。

げにも目出たき御世なるか 天の河原にさをさして

あもりましたる龍雲師 廣大無邊の神力を

發揮し玉ひて今ここに 神地の都の君となり

ケールス姫と諸共に 普く仁政を布かむとて

言あげ玉ひし尊さよ 尊き君に見出だされ

吾は左守神となり 此城内の一切は

わが身一つに責任を 負はせ玉ひて天ヶ下

四方よもの民草撫たみぐさなで玉たまふ
 われ等は尊たふとき御惠みめぐみの
 心の限かぎりを盡つくしつつ
 君きみの御前みまへにいそしみて
 右守神うもりのかみを始めはじとし
 青人草あをひとぐさに至いたる迄まで
 御稜威みいづを畏かしこみ敬うやまひて
 さはさり乍ながら腹黒はらくろき
 テーリス、ゼムやエール等らが
 攻め来きたらむも計はかられず
 怯おめず臆おくせず大神おほかみの
 世人よびとの爲ために玉たまの緒をの
 假令たとへ生命いのちはすつる共とも
 捨てし生命いのちは天國てんごくの
 げに有難ありがたき珍うづの御代みよ
 萬分まんぶん一いちに報むくいむと
 朝あさな夕ゆふなに大神おほかみと
 仕つかへまつらむ覺悟かくごなり
 其外そのほか百ももの司つかさたち
 天あめより降くだりし此君このきみの
 只ただ一ひとこと言ことも叛そむくなよ
 タールチンやエームスや
 其時そのとき汝等なんぢら一同いちどうは
 力ちからを楯たてに君きみの爲ため
 命いのちを惜をしまさず戦たたかへよ
 神かみの御爲おんため君きみの爲ため
 神かみの御前みまへに行ゆきし時とき

珍うづの寶座ほうざを與あたへられ

其魂そのたましひは永久とこしへに

安やすく樂たのしく喜よろこびの

園そのに樂たのしく救すくはれむ

あゝ惟かむながら神かむながら々々

神かみの御前みまへに眞心まごころを

捧ささげてケリヤが今いまここに

心こころの丈たけを誓ちかひおく

われと思おもはむ人々ひとびとは

一日ひとひも早はやく村肝むらぎもの

心こころを研みがき體たいを練ねり

此土このどを守まもるつはものと

なりて盡つくせよ惟神かむながら

神かみは汝なんぢを守まもりつつ

千代ちよに八千代やちよに亡ほろびなき

高たかきほまれを現あらはして

榮さかえの身魂みたまとなさしめむ

ケリヤが今いま宣のる言靈ことたまを

心こころに刻きざみて片時かたときも

決けつして忘わする事こと勿なれ

左守神さもりのかみが今茲いまここに

龍雲司りゅうんつかさに成なり代かはり

一同いちどうに向むかつて述のべておく

あゝ惟神かむながら々々

御靈幸みたまさちはひましませよ

」

と宣示し、悠々として座につく。
右守神のハルマを始め、其他の人々の脱線の歌は澤山あれ共、餘りくだくだしければ省略する事とする。

(大正一一・九・二一 舊八・一 松村眞澄録)

第二篇 松浦の岩窟

第九章 濃霧の途〔九九七〕

常世の國の自在天

大國別の珍の子と

生まれ出でたるサガレン王は 顯恩郷を後にして
ペルシヤの國を横斷し 印度の國を遠近と
さまよひ廻り漸くに シロの島へと安着し
バラモン教の御教を 朝な夕なに宣り傳へ
漸く茲に時を得て 神地の都のバンガロー
青垣山を三方に 清くめぐらす絶頂の
地點に館を立て竝べ シロ一國の主權者と
仰がれここにケールス姫を 娶りて御代を治めしが
漸次に惡魔のつけ狙ふ 其有様は味のよき
木の實に蟲のわく如く 八岐大蛇の醜靈
いろいろさまざま身を變じ 妖術使ふ龍雲と
現はれ來りてバンガロー 神地の館に侵入し
あらゆる手段をめぐらして ケールス姫の側近く
進み寄りたる凄じさ 蟻穴は遂に堤防を

崩すの比喩に漏れずして さしもに固き神館

サガレン王の居城をば 苦もなく茲に占領し

暴威を揮ふ憎らしさ 忠臣義士に助けられ

やうやく危難を免れて 九五の位に立ち乍ら

其身を以て逃れたる サガレン王は大野原

吹き來る風にも心魂を 痛めながらも河森の

河邊を傳ひてスタスタと テーリス、エームス兩人と

セムの里へと忍び來る 深き谷間に霧こめて

水音ばかり涼々と 響き渡れる川の邊に

進み來れる折もあれ 心汚き龍雲が

差まはしたる目附役 數人許りの若者は

一方口の谷路に 霧に紛れて身を隠し

手具脛ひいて待ちあたり かかる企みのあることは

夢にも知らぬ主従が 聲も靜かに宣傳歌

歌うたひながらにシトシトと 下くだり行くこそ危あやふけれ
あゝ惟かむながらかむながら神々々 御みたまさち靈幸はひましませよ。

テーリスは路みち々歌うたふ。

天津御空あまつみそらの雲くも分わけて あもりまししたる世よの元もとの

神かみの御祖みおやと現あれませる 常世とこよの國くにの自じ在天いてん

大國彦おほくにひこの其御裔そのみすゑ 國別彦くにわけひこの神司かむつかさ

サガレン王わうの吾君わがきみは 神地かうぢの都みやこ、バンガロー

珍うづの館やかたに現あれまして 天あめの下したなる人草ひとくさを

惠めぐみ守まもらせ玉たまひつつ 仁慈じんじ無限むげんの政事まつりごと

開ひらかせ玉たまふ折柄をりからに 此世このよを紊みだす曲津神まがつかみ

醜しこの大蛇をろちの現あらはれて ケールス姫ひめを誑きやう惑わくし

遂つひに進すすんで王位わうゐをば 占領せんりやうせむと村肝むらきもの

心を碎き朝夕に 名利にはやる曲人を

説きつ諭しつ知らぬ間に 同氣求むる悪黨の

團結強くつき固め 忠誠の士を悉く

無辜の罪名負はせつつ 一人も残らず牢獄に

投込みおきて龍雲は おのれが非望を達せむと

企み居たりし恐ろしさ 吾は始めて龍雲が

神地の都に來りしゆ 怪しき者と推量し

彼が心を探らむと 心にもなき阿諛を

會ふ度毎に竝べ立て 漸く彼に見出され

すべての計畫一々に それとはなしにあちこちと

探り得たりし嬉しさよ さはさり乍ら徒に

あばき立てなば悪神の 仕組の罠に陥らむ

心は千々に逸れども チツと胸をば抑へつつ

尚も進みて龍雲が 腹を叩けば案の定

レール、キングス、ベットする 其謀計はありありと

手に取る如く見えにける あゝ惟神々々

大國彦大御神 何卒彼が計略を

根本的に覆やし 心の底より曲神を

改めしめてバラモンの 誠の道に降服し

サガレン王の御前に 清き正しき眞心を

捧げまつりて誠忠の 臣となさしめ玉へよと

祈りし事も水の泡 悪心益々増長し

ケールス姫を踏臺に 種々の畫策日に月に

進みて茲にクーデターの 大慘劇を演じけり

さはさり乍ら天地に 正しき神のます限り

善を助けて悪神を くらさせ玉ふは目のあたり

只今日の身は是非もなし 暫く姿を山奥に

隠して時を松風の 尾の上を吹きて龍雲を

打ち拂ふべき神策を
心靜かにめぐらせつ

捲土重來バンガロー
再び王の都とし

吾等二人が忠誠を
現はし君の御心を

慰めまつらむ今暫し
忍ばせ玉へサガレン王

テーリス、エームス兩人が
心の限り身のきはみ

千變萬化の大秘術
盡して御身を始めとし

之の御國を泰山の
安きに救ひまつるべし

あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ

と霧込むる河森川の谷道を傳ひ傳ひて、セムの里を越え、松浦の里の小絲の館を
指して、忍び行かむと道を急ぎぬ。

エームスは又歌ふ。

☞ 渺茫千里の海原に
浮びて清きシロの島

神かみの司つかさや國くにの君きみ 二ふたつを兼かねて治ししめす

國くに別わけ彦ひこのサガレン王わう 其その仁じん徳とくは天あめケ下がした

四よ方もの草くさ木きに至いたるまで 惠めぐみの露つゆを垂たれ玉たまひ

君きみのほまれは大おほ空そらを 輝かがやきわたる天あま津つ日ひか

夜よるの守まもりとあれませる 月つきの如ごとくに輝かがやきて

きらめき渡わたる星ほしの如ごと まつろひ來きたる神かみ人びとも

數かずある中なかに黒くろ雲くもは 忽たちまち中ちう空くうに卷まき起おこり

雲くも入に道だうと現あらはれし 曲まがの變へん化げの龍りう雲うんが

月つき日ひを隠かくし諸もろ星ぼしの 光ひかりを包つつみて此この國くには

暫しばしは常とこ夜よの闇やみとなり 天あまの岩いは戸とは閉とざされて

八や岐また大を蛇ろちや醜しこ狐ぎつね 曲まが鬼おに探さぐ女め醜しこ女め等らは

五さ月ば蠅への如ごとく湧わきみちて 黒あや白めも分わかぬ世よとなりぬ

曲まがに組くみする惡あく神がみの ケリヤ、ハルマを始はじめとし

べールやメール、ヨール迄まで 名めい利りの欲よくに晦くらまされ

大恩深き吾君を 見棄つるのみか危害まで

加へて一味の欲望を 立てむとしたる愚さよ

御空は雲に包まれて 星さへ見えぬ世ありとも

神の伊吹の神風は 何時迄吹かであるべきぞ

天地は元より活物と 神の教を聞くからは

又もや吹かむ時津風 満天墨を流す如

包みし醜の黒雲も 拭ふが如く晴れわたり

光輝赫々萬物を 伊照らし玉ふ日月の

光を見むは目のあたり 神の司よ大君よ

必ず心を悩まして 身をば弱らせ玉ふまじ

テーリス、エームス始めとし サール、ウインチ、シルレンゲ

ユーズ、アナンやゼム、エール セールの司の眞心は

必ず天に貫徹し 誠の花の咲き出でて

再び君の御治世の 實りを結ぶは惟神

神の心にましまさむ

吾等は之より大君を

松浦の里のバラモンの

小絲の館に導きて

茲に神示を奉戴し

時節を待つて龍雲が

醜の望みを根底より

顛覆させむ待て暫し

神の御水火に現れませる

科戸の風の空高く

吹きすさぶまで日月の

再び此世に現はれて

悪魔の頭をてらすまで

あゝ惟神々々

神のまにまに村肝の

心を洗ひ身を清め

サガレン王の御爲に

假令生命はすつるとも

忠義に固き武夫の

誠を徹さでおくべきや

赤き心のいつ迄も

輝きわたらでおくべきか

あゝ惟神々々

大國彦大神の

御前に愼み願ぎまつる

御前に畏み願ぎまつる

と聲も靜かに祈りつつ、轟々たる激流の音を便りに川邊傳ひに霧の中を進み行く。
此谷川には常に濃霧立ちこめ、數多の大蛇、猛獸などの好適の棲息所と自然になつてゐた。山賊などの白晝出沒するも、大部分此道筋である。王の一行は龍雲の捕手の追及を恐れて、心ならずも此難路を選まれたのである。

（大正一一・九・二二 舊八・二 松村眞澄録）

第一〇章 岩隠れ（九九八）

サガレン王は路々歌ふ。

常世の國の自在天 大國彦の裔の子と
生れ出でたる吾こそは 國別彦の神司
イホの都をやらはれて メソポタミヤの顯恩郷

鬼雲彦と諸共に

教を傳ふる折柄に

三五教の神司

太玉神が現はれて

善言美辭の言靈を

放ちたまへばバラモンの

大棟梁と僭稱する

鬼雲彦はおぢ恐れ

其醜體を暴露して

いづくともなく逃げ失せぬ

大國別の子と現れし

幼き吾を奇貨となし

朝な夕なに虐げて

暴威を振ひし天罰の

誠めこそは畏ろしき

吾は夫より顯恩の

郷を逃れてフサの國

月の國をば逍遙し

あらゆる山河を跋渉し

千辛萬苦を忍びつつ

ボーナの海峽打ち渡り

錫蘭の島根に安着し

沐雨櫛風の難をへて

漸くここにバンガロー

神地の都に進み入り

御祖の神の開きてし

バラモン教を遠近と

布き擴めたる甲斐ありて

萬民悉悦服し 遂に推されて王となり

サガレン王と呼ばれつつ ケールス姫と諸共に

神の教や祭り事 朝な夕なに大神に

誓ひて仕ふる折もあれ 雲を起して下り来る

醜の曲津の龍雲が 劍の舌に屠られて

姫は全く捕虜となり 吾に向つてウラル教

信仰せよと責め来る あゝ惟神々々

大國彦大神の 御裔とあれし吾身魂

如何でかうラルの御教に 仕へまつらむ事を得む

神の怒りもおそろしと 心を極めて唯一人

教を守り居たりしが 魔神の勢ひ日に月に

榮え來りて今此處に 吾はつれなき草枕

寄る邊渚の捨小舟 頼む蔭とて立ちよれば

猶袖ぬらす常磐木の 松の下露冷たけれ

さはさりながら皇神の

恵の露は乾かずに

吾身を霑したまひつつ

Teams、エームス兩人が

誠忠無比の真心に

漸く危難を助けられ

此身一つはやすらかに

此處迄落のび来りけり

思へば思へば有難や

三五教を奉じたる

テリス、エームス兩人が

われに仕へし時よりも

バラモン教を奉じつつ

心の中は麻柱の

誠一つを立て通し

吾を助けて今此處に

誘ひ来りし真心は

天地の神も明かに

知るしめすらむ惟神

神の御前に真心を

捧げて感謝し奉る

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

魔神は如何に猛るとも

誠の力は世を救ふ

誠一つを立て通し

唯身を神に打任し

過去を憂へず將來を

案じ過さず今のみを やすく守りて神の道

この瞬間に善を云ひ 善を行ひ善思ふ

これぞ天地の神の子と 生れ出でたる人の身の

朝な夕なに慎みて 盡しまつらむ道ならめ

あゝ惟神々々 神の御靈の幸はひて

松浦の里に至るまで 如何なる曲もさはりなく

心平にやすらかに 進ませたまへ惟神

國治立大御神 大國彦大神の

御前にかしこみねぎまつる あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

一行は嶮岨な谷道を、夜を日についで逃れ來りしこととて、足も疲れ體も何となく倦怠の氣分になつて來た。もはや此處迄落ち延ぶれば一安心と、谷道の傍に土から生えたるが如く現れたる大巨岩の傍に休息して、一昨夜の騒動を追懐しな

がら、窺々と話に耽りつつあつた。

早くも龍雲の部下の捕吏は、ヨールに引率され、名自鋭利なる手槍を提げ、装束もいと軽々しく、草鞋、脚絆の扮装にて、黒頭巾を被り黒の衣を甲斐々々しく纏ひながら、サガレン王一行の落ち延び来るを今や遅しと待つて居た。此谷道は東西に嶮しき山、壁の如くに屹立し、其谷間を流る河森川の細道傳ひに霧籠む中を下り來たのである。濃霧のため、二三間先の人影はどうしても見る事は出来なかつた。

三人は漸くにして身體の疲れも回復し、又もや立つて谷道を下らうとする時、些しく下手に當つて怪しき人聲が聞えて來た。テーリスは其聲にどこともなく聞き覚えがあつた。テーリスは小聲になり、
「もし王様、あの聲は確に龍雲の部下ヨールの聲で御座います。惡に抜目のなき龍雲奴、王様を道にて捕へむと、すばしこくも此處に先廻りをして待たせて居ると見えます。コリヤうつかりしては居られますまい。先づ暫し聲を潜めて……
幸ひ霧の中、彼等が通過するのを待つ事に致しませうか？」

王「どこ迄も水も漏らさぬ彼等が計略、實に呆れたものだ。汝が云ふ如く、暫く此處に潜むで彼等が動靜を窺ふ事と致さう」

エームス「もし王様、アレあの通り四五人の聲がザワザワと近よつて参りました。早く此の岩の後に隠れませう」

王はうなづきながら、大岩石の後に二人と共に身を隠した。直徑四丈許りもあらうと思ふ大岩石である。三人は濃霧に包まれ、其岩の後に忍んで、ヨールの部下の通過するのを待つ事とした。

ヨールはサガレン王の一行が此岩の後に隠れ居るとは夢にも知らず、何事か小聲に囁きながら大岩の前に來り、

「サア皆の者、此處で暫く息をやすめ鋭氣を養ひ、サガレン王、テリス、エームスの悪人共が落ちのびて來るのを待つ事にしよう。此地點は實に絶好の場所だ。東西に岩山は屹立し、一方は細き喉首のやうな谷道、北は胸突く許りの急坂、此處へやつて來るに相違ない。さうすれば袋の鼠も同様だ。マア悠りと水でも飲んで鋭氣を養ひ、首尾克く三人を生擒り、龍雲様にお譽めの言葉を頂かうぢやない

か。今いまが出世しゅつせのしどきだ。この期きを失しつしては、いつの日ひか拔群ばつぐんの巧妙かうめうを現あらはす事ことが出来できよう。思おもへば思おもへば實じつに幸運かううんが向むいて來きたものだワイ」

レツト「ヨールさま、萬々まんまん一いちサガレン王わうが此道このみちへ來こなかつたらどうしませう。それこそ薩張駄目さつぱりだめですなア。屹度きつと南下なんかして來くるには限かぎつて居をりますまい。もしも王わうが道みちを北きたに採とり、遠とほくボー力灣わんを越こえて、印度いんどのデカタン高原かうげんの方ほうへでも逃にげて居あいたら、それこそ骨折損ほねをりぞんの疲勞くたびれまうけ、どうする事ことも出來できないぢやありませんか」

ヨール「そこが運否天賦うんぶてんぶだ。吾々われわれに幸福かうふくの神かみが守まもつて居をれば、キツと王わうの一行いっかうは此道このみちを採とるに違ちがひない。もしも又またカールの一行いっかうに幸福かうふくの神かみが宿やどつて居あるならば、キツと王わうの一行いっかうは、ボー力海峽かいけふを渡わたつて印度いんどに走はしる道みちを採とるに違ちがひない。それだと云いつて、一ひとつの體からだで兩方りやうほうへ行ゆく譯わけにも往ゆかず、諺ことわざに……二兔にとを追おふものは一兔いっつとをも得えず……と云いふ事ことがある。吾々われわれは神かみの思召おほしめのまにまに遵奉じゆんほうするに若しくはない。さすれば神様かみさまは吾々われわれの至誠しせいを御照覽遊ごせうらんあそばして、キツと手柄てがらをさして下くださるに違ちがひないわ。それよりも計略はかりごとが漏もれては一大事いちだいじだ。ここ暫しばらく沈黙ちんもくを守まもつて、王わうの一隊いったいの近ちかづくのを待まち受うける事ことにしよう。今迄いままでは隨分ずぶん各自めいめいに發言機關はつげんきくわんを虐待ぎやくたいして

来たが、もはや戦場に向つたも同様だから、言靈の停電を嚴命する。皆の奴、靜にものを云へ。イヤ、だまつてものを云ひたければ云つたがよい」

ビット「もはや膝栗毛も疲れ果て、言靈も亦原料が缺乏し、止むを得ず口脚共に停電の餘儀なき羽目に陥つて了つた。どうでせう皆さま、胃の腑の倉庫が、餘程空虚になつたと見え、喉が汽笛を吹き出しました。一つ此處で辨當を胃の腑へ格納して銳氣を養ひ、時期を待つ事にしませうか」

ヨール「それもよからう。サア早く掻き込め掻き込め」と各自に、握飯を出して甘さうに頬張つて居る。

王の一行は息を凝らして、此話を一言も漏らさじと聞き耳立てて居た。

レット「もう是れで腹は出來た。腹の蟲奴が頻りに催促の矢を放射し居つたが格納庫の所有者たる吾々も、もはや是で責任が果せたと云ふものだ。悠悠自適、國家の興亡われ關せず焉と云つたやうな氣分になつて來た。おいビット、其瓢箪をこちらへ借せ。何と云つても神徳の高きサガレン王に向ふのだから、一杯機嫌でなくては到底刃向ふ事は出來ないからなア」

ヨール「おいビツト、一つ此處で元氣をつけて敵を待つ事にしよう。其酒をここへ出せ。併し乍ら、こいつは餘程酒精がきついから澤山飲んではいけない。第一足を先に取られるから用心して飲め。決して度を過ぎてはいけないぞ」と、先づ自分から五升許り入る瓢の口から、グウグウとラツパ呑みを始め、瓢をレットに渡し終り、兩方の手で自分の額をピシヤツと叩き、

「ア、何と云ふ酒だ。こんな甘い酒は生れてから飲んだことはない。どうしてまあこれ程甘くなつたのだらう」

ビツト「そりやさうでせうとも。瓢箪酒と云つて、特別酒の味がよくなるものです。さうして今日で三日間も、ドブドブと揺つて來たのだから、本當に呑み加減になつて居ます。そこへ體がどことはなしにホツとして居ますから、一入味がよくなつたやうに見えるのですよ。……喉のかわいた時や泥田の水も、飲めば甘露の味がする……と、都々逸にもあるぢやありませんか」

ヨール「おいレット、貴様計り獨占して居らずに早く俺の方へも廻さぬか」

ビツト「もしもしヨールの大將、そりやちつと御無理です。あなたは先に一口お

飲あがりになつたぢやありませんか。今いまレットが飲のんだのだから次つぎが私わたしの番ばんだ。それからランチ、ルーズの兩人りやうにんにも分配ぶんぱいしてやらねばなりません。一順いちじゆんまでは迄までつて下さい。最前さいぜんから喉のどの蟲むしがゴロゴロ云いつて催促さいそくをして居ゐますから……」

レット「そんなら早はやく吞のめ。さうして早はやく一順いちじゆんすまして、ヨールさまに渡わたすのだぞ」

ビット「承知しやうち致いたしました」

と云いふより早はやく、逢あうた時ときに笠かさぬげ主義しゆぎで、ガブガブと瓢箪へうたんの口くちから口吞くちのみをはじめた。それからクルリクルリと廻まり吞のみにして、いつしか自分じぶんの使命しめいも忘わすれてしまひ、瓢ひさいの酒さけをすつぱりと空そらにしてしまった。五人ごにんは漸やうやく酒さけが廻まり足あしを取とられ、互たがひに大おほきな聲こゑで管くだをまき始はじめた。

(大正一一・九・二二 舊八・二 加藤明子録)

第一章 泥醉でいすゐ (九九九)

ヨール、レット、ビット、ランチ、ルーズの一行は瓢の酒に酔ひ潰れ、足をとられて其場に倒れたまま、廻らぬ舌の根からソロソロと下らぬ熱を吹き立てる。酒を飲めば腰を抜かす、愚圖をこねる、飲まねば悪事をする、博奕を打つ、女を追ひ掛ける、如何にも斯うにも始末にをへぬ代物ばかりである。

レット、「オイ、兄弟、何といい気分になつて来たぢやないか。舌は適度に纏れて来る、足は舟に乗つた様に地の上に浮いて来た。もう斯うなつては此急坂をセツセと汗を流して、【テク】の繼續事業をやる必要もなくなつたぢやないか……乱雑骨灰落花微塵、煙塵空を捲いて風に散る……と云ふ様な大騒動が起つて来てもビクとも致さぬ某だ。かう巧く酒の神の御守護が幸はひ給ふと、何とはなしに此間の晩のサガレン王の身の上に、一掬同情の涙を濺ぎたくなつたぢやないか。大に多恨の才士をして懷舊の情を起さしむるに足るだ。何と胃の腑の格納庫は充實し、腹中の酒樽は恰も祝詞の文句ぢやないが……甕瓶高知り、甕の腹満竝べて赤丹の穂に聞き召せと、畏み畏みも申す……と云つた鹽梅式だ。なあヨールの大將、もう斯んな良い気分になつて来ればヨールもヒールもあつたものぢやない。一つ

此處でゴロンと木の根に薬罐を載せて一眠りする事にしようかい。枕と云ふ字は木扁に尤と書くのだからな。エー、エプツ、ガラガラガラ……八月の大風ぢやビツト「あゝ臭い臭い、チツと心得ぬか、風上に廻りよつて……」
ないが蕎麥の迷惑だぞ。如何やら心の土臺がグラつき出して、俺やもうサガレン王様の心がおいとしようなつて来た。何程出世さして呉れると云つても、猫の目の玉ほどクレクレと變る龍雲の親方では、チツと心細いぢやないか
ヨール「コラコラ、宜い加減に心得ぬかい。それだから餘り酒を飲むなと云ふのだ。困つた代物だなア。大事な用を持ち乍ら肝腎の時に酔ひ潰れよつて、何故腹の中と相談して飲まないのだ。身知らず奴が！」
ビツト「エー、八釜しう云ふない。何れ腰が抜けるのだ。サガレン王の御威勢に恐れて腰を抜かすか、酒に酔うて腰を抜かすか、何れ腰を抜かす十分の可能性を具備してるのだよ。人の頭に立つ者は、さう何でもない事を捉まへてコセコセ云ふものぢやないわ。チツと腹を廣う持ち、肝玉を太くし、心を大きくしたら如何だ。頭が廻らにや尾が廻らぬと云ふぢやないか。一體ヨールの大將は偉さうに云

つてるが腰が立つのかい」

ヨール「事にヨールと立つ事もあり、立たぬ事もあるわ。兔も角大將たるものは自ら働くを要せず、克く人に任じ、大局に當り小事に焦慮らず拘泥せず、部下の賢愚良否を推知して、各其能力を揮はしむるものだよ。人の將たるべき者將に務むべき事は大將の襟度だ。俺あアル中で腰が立たなくても、貴様達を指揮する權能があるのだから、そんな心配をして呉れるな。ただ貴様達は此のヨールの命令に従つて、犬馬の勞を執りさへすれば宜いのだ。エーエー、貴様達の面は何だ。四角になるかと思へば三角になり、目玉を七つも八つも十も顔にひつ付けよつて、醜面の包圍攻撃は如何に英雄豪傑のヨールさまだつて、あまりいい氣持はせぬワ。チツと配下の奴どもシツカリ致さぬかい。何だ千騎一騎の場合になつて、腰が抜けたの、サガレン王が恐ろしいのと亡國的の哀音を吐き、絶望的の悲哀を帯びた其弱い言靈、實に吾々も斯様な卑怯未練な部下を引ずり出して來たかと思へば、豈絶望の淵に沈まざるを得むやだ……ゲー、ウツ、プ、ガラガラガラ、ア、苦し

い、酒の奴まで大腹川を逆流しだしたワ」

レット「ヤイ、ヨールの大將、もう徐々と現はれる刻限ですぜ。今にエームスや
テリスの謀反人が出て來たら如何處置する考へだ。それを一つ今の中に決定し
て置かねば、さあ今となつて、盗人を捕へてソロソロ繩を緋ふ様な「へま」な事
も出來ますまいぜ」

ヨール「何、心配するな。此ヨールさまには一つの考案があるのだ。君子的否紳
士的文明的のやり方を以て、一杯舌の推進機を廻轉し、戦はずして敵をプロペ
ラペラと言向和す成算があるのだ。ジャンジャヘールの胸中が、貴様達の様なガ
ラクタに分つて堪るかい。何といつても其處はヨールさまだよ」

斯く話す折しも大岩の後の方から聲も涼しく謠ふ者がある。五人の奴は餘りの
泥酔に目も碌に見えず、耳はガンガンと警鐘を亂打した様に、物の音色も辨別が
つかない處まで聴音機が狂うて居る。

ヨール「そら如何だ。天は正義に與すると云つてな、俺達の誠忠を憐れみ給ひ、
天の一方より妙音菩薩が、此千引の岩の後より天の八重雲を掻き分けて現はれ給
ひ、鈴蟲か松蟲かと云ふ様な美音を放つて酒の興を添へ、疲れきつた精神に新生

命を授けて下さるぢやないか。斯うなるとヨールさまも餘り馬鹿にならないぞ。

アーン

レツト「何だか知らぬが、俺達には如何も苛性曹達を耳の穴へ突つ込んだ様な気分になつて來たワイ。オイ皆の奴、シツカリせぬか。どうやら怪しいぞ。雨が、風か、はた雷鳴か、地震か、親爺か、火事か、何んだか知らぬが、餘りよい氣分がせぬぢやないか」

ヨール「八釜しう云ふな。心一つの持ち様で、善言美詞の言靈も惡言暴語に聞えたり、又甘露も泥水の味がしたりするのだ。貴様は餘り向ふ見ずに酒を喰ひよつたものだから、聽聲器に異状をきたし、こんな妙音菩薩の御託宣が鬼哭愁々然として響くのだ。それよりも胸を据ゑてモ一杯やれ」

レツト「やれと云つたつて瓢箪の奴、早くも賣切れ品切れの札を出しよつたぢやないか。何程尻を叩いて見た處で、もう此上は一滴の酒だつて出るものぢやない。百姓と糠袋は絞れば絞る程出ると云ふけれど、是は又如何した拍子の瓢箪やら、蚊の涙程も出て來ぬぢやないか。アアもう何もかも嫌になつてしまつた。俺は

もうサツパリ改心かいしんしたよ。萬々まんまん一王様いちわうさまが此處ここへお越こしになつたら、低頭ていとう平身へいしん七重ななへの膝ひざを八重やへ九重ここのへ十重とへ二十重はたへに折をつてお詫わびをして、それでも許ゆるさぬと仰おつしや有あつたら首くびでも刎はねて貰もらふ積つもりだ。乍しか然なが俺おれの首くびはチツとばかり必要ひつえうがあるから尙早論しやうさくろんを主張しゆちやうし、ヨールの素首そつくびを代表だいへう的てきぎ犠牲物せいぶつとして刎はねて貰もらふのだな。大將たいしやうとなれば、それだけの覺悟かくごがなくては部下ぶかを用もちふる事は到底たうてい不ふ可能かのうだ。なあヨールの大將たいしやう、吾輩わがはいの云いふことがチツとは肯綮こうけいに嵌はまりますかな、否いな肯定こうていするでせうなア」

ヨール「ハ釜やかましいわい。何なんと冴さえきつた音色ねいろぢやないか。サガレン王わうとか何なんとか聞きえて來くる。ヤイモウ宜いい加減かげんにシツカリして腰こしを上げぬかい」

ビツト「何程なにほど上げと云いつても、此方このほうは萬劫末代まんごふまつだいビツトも動うごかぬのだから實じつに大たいしたものだ。アツハ、のオツホ、のオツホ、のオツホ、だ」

歌うたの聲こゑは益々ますます冴さえ來きたる。

「神かみが表おもてに現あらはれて
善ぜんと惡あくとを立たて別わかける
此世このよを造つくりし神直日かむなほひ
心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

只何事も人の世は
直日に見直し聞き直し

身の過ちは宣り直す
尊き神の御教

曲津の神に迷はされ
神地の都に現れませる

サガレン王に刃向ひて
悪逆無道の罪科を

重ね來りし人々も
その源を尋ぬれば

高皇産靈や神皇産靈
陰と陽との神々の

水火より生れし者なれば
何れも尊き神の御子

時世時節の力にて
醜の魔風に吹かれつつ

知らず知らずに罪の淵
陥る者も最多し

皇大神も憐れみて
罪や穢に染まりたる

其曲人を助けむと
朝な夕なに御心を

配らせ給ひ三五の
神の教やバラモンの

珍の教を開きまし
此シ口島に現れまして

四方を包みし村雲を
科戸の風に吹き散らし

闇に迷へる國人を
明きに救ひ上げ給ふ

あゝ惟神々々
神は吾等と俱にあり

心穢き龍雲に
媚び諂ひて諸々の

曲を盡せし人々を
誠の道の教にて

言向け和し天國の
榮えの園に導きて

救ひ奉らむサガレン王の
神の命の御心

仰げば高し久方の
天津御空に聳り立つ

地教の山も畜ならず
天教山に嚴高く

鎮まりいます皇神の
恵の露は四方の國

青人草は云ふも更
鳥獸や草木まで

清き生命を與へつつ
神世を永遠に開きます

其功績ぞ畏けれ
あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして
ビット、レットやヨール外

二人の御子を憎まずに
救はせ給へ惟神

神の御前に願ぎ奉る 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

助けにや措かぬ岩の前 酒の力に倒れたる

五つの身魂に日月の 清き光りを與へつつ

誠の道に歸順させ 救ひ與へむサガレン王

テーリス、エームス三人連 五人の男に打ち向ひ

悟りの道を説き聞かす あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

ヨール、オイ皆の奴等、もう斯うなつちや悪の身魂の年の明きだよ。今の歌を聞
いたか。あれを聞いた以上は俺達の耳は爽かになり、心の眼は開き、腹の中は清
まり、胸の雲は晴れ、抜かした腰は立上り、手は舞ひ足は踊り、何ともかとも云
へぬ天地開明の氣分が漂ひ、生れ變つた様になつて来たぢやないか。サア貴様等
は何事も俺の云ふ様にすると云つたのだから、今日限り改心をして今迄の悪心を

翻し、サガレン王に忠義を盡すのだよ。ヨモヤ俺の言葉に違背する奴はあるまいな」

と廻らぬ舌から、四人の部下に臆氣に説き諭して居る。

レット「誰だつて、悪を好んでする様な大馬鹿者が何處にあるものかい。お前はサガレン王が悪だ、あれをベツトして了はなくちや善の道がたたぬ。龍雲様が誠の善の神様だと、耳が蛸になる程お説教を聞かしたぢやないか。俺アもうかうなつて來ると何方が善だか悪だかサツパリ見當がとれなくなつて來た。一體本當のことはサガレン王が善か、龍雲が善か、と云ふ事をハツキリ聞かして呉れ。善と悪との衝突がなければ、元よりこんな騒動がオツ始まる道理がないのだからなア」

レット「レット、そんな劣等な事を云ふな。もとより王様に反抗すると云ふのは悪に決つてるぢやないか」

レット「それでも貴様、龍雲さまが斯う云つて居たよ。エー、君、君たらずんば臣、臣たるべからず、父、父たらずんば子、子たるべからず、と云はれたぢやないか。それだから俺は龍雲様は本當に偉い神様だと信じて居るのだ。天下國家の

救主だから、龍雲様のために働くのは即ち神様の爲に働くのだ、國民一般の爲に働く善行だと確信して居るから、夜も碌に眠らず捨身的の活動をして居るのだ。誰でも龍雲を悪だと知つたら、其意志に従つて活動する奴があるものかい」

ビット「君、君たらずとも臣は以て臣たるべし、父、父たらずとも子は以て子たるべしと云ふのが、天津誠の麻柱の大道だよ。如何なる無理難題も甘んじて受けるのが、忠ともなり孝ともなるのだ。そんな貴様の様な小理屈を云つて居ては、何時迄も世の中は無事太平に治まるものぢやないよ」

ヨール「兔も角も、此ヨールさまの命令に服従するのだ。サアこれからサガレン王様にお詫だよ」

一同「はい、仕方がないなア」

（大正一一・九・二二 舊八・二 北村隆光録）

松浦の谷間小絲の里は、一方は千丈の深き谷間、南北に流れ、岩山の斜面に天然の大岩窟が穿たれてゐる。此岩窟に達せむとするには、細き岩の路を右左に飛び越え漸くにして渡り得る實に危険極まる場所である。一卒これを守れば萬卒越ゆる能はずと云ふ天然的要害の地点である。かつてバラモン教の友彦が小絲姫と共に草庵を結び、教を開きたる場所は、此岩窟より四五丁手前の、極平坦な地点であつて、そこには細谷川が流れてゐる。

サガレン王は此平地に俄作りの館を結び、テリス、エームスなどに守らしめ、自らは岩窟内深く入りて、回天の謀をめぐらしてゐた。谷路の大岩の傍に王の一行を捉へむと手具脛引いて待つてゐた龍雲の部下、ヨール、ビット、レット、ルーズの改心組を初め、サール、ウインチ、ゼム、エール、タールチン、キングス姫は此館と岩窟の間を往復して、暫し此處に足を止め、王の爲に心身を悩ましつた。

テリス、エームスの兩人は平地の館に於て、數多の部下を集め、武術を練り、龍雲討伐の準備にかかつてゐる。其處へ白髪異様の老人只一人、コツコツと杖の

音をさせながら岩路を登り来り、館の前に立つてバラモン教の神文を一生懸命に稱へてゐる。エームスは一目見るより慇懃に其老翁を館に引入れ、湯を與へ食を供し、四方山の話に夜を更かしながら、遂には其老翁が來歴を尋ぬる事となつた。エームス「モシ、あなたの様な御老體として、此山路を登り来り、且又道伴れもなく行脚をなされるのは、何か深き御様子のある事でせう。どうぞ差支へなくば、概略御物語りを願ひたう御座います」

「私は無住居士といつて、生れた所も知らねば、親も知らず、子もなし、つまり言へば天下の浮浪人だ。途中にて承はれば、此お館にはバラモン教の立派な方々があつまりになり、武術の稽古をなさると云ふ事、私も斯う年は老つて居れども、武術が大の好物、一つ其お稽古場を拜見したいもので御座る」

「無住さま、あなたは遙々と此處へお越しになつたのは、只單に武術の稽古を見たい爲ではありますまい」

「武術の稽古を見せて貰ひたいと云ふのは、ホンのお前達に對する體好き挨拶だ。實の所はサガレン王様の御危難と承はり、此館にお隠れ遊ばすと聞き、はるばる

と尋ねて来たのだ」

「其王様を尋ねて何となさる御所存か、それが承はりたい！」

と稍氣色ばんで、聲を知らず知らずに高め問ひかける。

「アハ、ハ、ハ、龍雲如き惡神に蹂躪され、金城鐵壁とも云ふべき牙城を捨てて、

女々しくも二人の部下と共に斯様な所まで生命惜しさに逃げ來り、岩蜂か何ぞの

様に岩窟の中に身を潛め、捲土重來の準備をなすとは、甚以て迂愚千萬なやり方

では御座らぬか。此方に準備が整へば、向方にも亦それ相當の準備が出来るはず

だ。目的を達せむとすれば、先づ第一に間髪を容れざる底の早業を以て、短兵急

に攻めよせねば、到底勝算の見込みはない。今や龍雲は勝ちに乘じ、心おごり、

殆ど常識を失つてゐる場合だから、此際に事を擧げねば、曠日瀰久、無勢力なる

味方を集め居る内には向方も亦漸く目が醒め、一層嚴重な警備もし、防禦力も蓄

へ、まさか違へば雲霞の如き大軍を以て、一擧に攻め來るやも計り難い。何程要

害堅固の絶處なればとて、敵に長年月包圍されようものなら、水道は斷たれ、糧

食は缺乏し、居乍らにして降服せなくてはなるまい。これ位な考へなくして、如

何して奸智に長けたる龍雲を討伐する事が出来ようぞ。又味方の中にも敵がある

世の中、能く氣をつけたがよからうぞや

如何にも御説御尤も、併し乍ら吾々同志は王に對しては、誠忠無比の義士ばかりの集團なれば、外は知らず、決して左様な醜類は混入してゐない筈で御座ります。あなたのお目にはさう映りますかな

アハ、ハ、ハ、若い若い、現に此中には間者が交つて居る。それが氣もつかぬやうな事では、如何なる目的を立つるとも九分九厘にて、顛覆させられて了ふであらう

其間者といふのは誰々で御座いますか

それは今茲では申しますまい。其間者を看破する丈の眼識がなくては到底駄目だ。此館に出入する人々の目の使ひ方、足の歩き方、體の動かし方などを、トツクと御考へなされ！ 一目にして正邪が分るであらう

エームスは歎息の色を表はし、雙手を組み、さし俯むいて思案にくれてゐる。テーリスは始めて口を開き、

「無住さま、今回の吾々の計畫は完全に成功するでせうか。何卒御神策があらば御教授を願ひたい」

「アハ、、、成功するかせないか、知らしてくれと云ふのかな。左様な確信のないアヤフヤな事で、如何して大事が遂げられるか。第一お前達は心の置き所が違つてゐる。サガレン王に忠義の爲に心身を用ゐるは、實に臣下として感ずるの至りである。が、併し乍ら、サガレン王以上の尊き方のある事は知つて御座るか。それが分らねば今度の目的は、氣の毒乍ら全然晝餅に歸すだらう。否却て大災害を招く因となるにきまつてゐる。それよりも今の内に甲をぬぎ、龍雲の膝下に茨の鞭を負ひ、降伏を申し込む方が近道だ。アハ、、、」

と肩をゆすつて、大きく笑ふ。テーリスは少しも無住の言が腑におちず、たたみかけて息もせはしく問ひかける。

「吾々は此シロの國に於て、サガレン王よりも尊い者はないと心得て居ります。王以上の尊き者とは如何なる方で御座いますか。どうぞ御教諭を願ひます」

「其方はバラモン教の神司、兼、王の臣下であらう。三五教に信従し乍ら、時の

天下てんかに從したがへと言いつたやうな柔弱にうじやくな考かんがへより、吾身わがみの榮達えいたつを計はかる爲ため、サガレン王わうの奉ほうずるバラモン教けうに入信はいつたのであらうがな。どうぢや、此無住このむぢゆうの申まをす事ことに間違まちがひがあるか」

「ハイ、仰あふせの通りとほです。併しかし乍ながら決けつして決けつして心こころの底そこより三五教あななひけうを捨すてては居をりませぬ。何いづれの神かみの道みちも元もとは一ひと株かぶだから吾々われわれの行かう動どうに付ついては神かみさまに對たいし、少しも矛盾むじゆんはないと心得こころえますが……」

「何いづれの道みちに入いるも誠まことの道みちに變かはりはない。其事そのことは別べつに咎とがめもありませぬ。さり乍ながらそこ迄まで眞心まごころを盡つくして王わうの爲ために努つとめむとするならば、至上至尊しじやうしそんの神かみさまの爲ために、なぜ眞心まごころを盡つくさないのか。神かみ第一だいいちといふ教をしへの眞諦しんたいを忘わすれたのか。左様さやうな心掛こころがけでは何程なにほど千慮萬苦せんりよばんくをなすとも到底たうてい駄目だめだ。神かみの御力おちからにすがり奉まつりて、サガレン王わうを助たすけむとする心こころにならば、彼かの龍雲如りううんごとき曲者くせものは、物ものの數かずでもあるまい。誠まことの神力しんりきさへ備そなはらば、龍雲如りううんごときは日向ひなたに氷こほりをさらした如ごとく、自然しぜんの力ちからに依よりて自滅じめつするは當然たうぜんの歸結きけつである。何なにを苦くるしんで、數多あまたの同志どうしを集あつめ、殺伐さつぱつなる武術ぶじゆつを練れん習しふするか。武ぶは如何いかに熟練じゆくれんすればとて一人ひとりを以もつて一人ひとりに對たいするのみの働はたらきより出來できまい。

無限絶對の神の力に依り、汝が靈魂の上に眞の神力備はらば、一人の靈を以て一國の靈に對し又は億兆無數の靈に對しても恐るる事はなき筈、又靈力さへ完全に備はらば、汝一人の力を以て億兆無數の力に對し、又汝一人の體を以て億兆無數の體に對抗し、よく其目的を貫徹する事を得るであらう」

テリス「重ね重ねの御教訓、身にしみ渡つて有難う存じます。就いては奥の岩窟にサガレン王が居られますから、御案内致します。どうぞ一度御面會を願ひます」

「別に王に面會する必要も認めぬ。王に於てわれに面會を望むとあらば、暫時の間タイムをさいてやらう」

エームス「何れの御方かは知りませぬが、さう固く仰有らずに、どうぞ王さまの前までお越し下さいませ。王は定めてお喜び遊ばす事でせうから……」

「アハ、ハ、ハ、そこが矛盾してゐるといふのだ。われは天下の宣傳使、五大洲を股にかけて萬民の不朽不滅の魂に永遠無窮の命を與ふる神の使の宣傳使だ。僅にかかると小國を治めかぬる如きサガレン王に對して、われより訪問するとは、天地

轉倒も甚しきものだ。サガレン王は單に此島國の人間の肉體の短き生命を保護し監督するだけの役目だ。靈魂上の支配權は絶無だ。かかる體主靈從的精神の除れざる内は、いかに神軍を起すとも、惡魔の龍雲を言向和す事は思ひも寄らぬ事である。最早われは此場に用なし、さらば……」

と云ふより早く、いそいそとして立去らむとするを、テーリス、エームス兩人はあわてて袖を引とめ、

「もしも無住居士さま、暫くお待ち下さいませ。只今承はれば、あなたは天下の宣傳使と仰有いましたが、宣傳使ならば、何卒吾等が誠忠を憐み、最善の方法を教へ下さいませ。そして貴方は何教の宣傳使で御座いますか。それが一言承はりたう御座います」

「別に龍雲の如き惡魔を言向和すに就いては議論もへちまもあつたものでない。只汝が心にひそむ執着心と驕慢心と自負心を脱却し、只々惟神の正道に立返りなばそれで十分だ。一つの計畫も何も要つたものでない。アハ、ハ、ハ、」
と言ひ棄て、又もや袖ふり切つて立去らむとする。テーリスは泣かぬ許りに跪き、

無住の杖をグツト握りながら、

「エームスよ、早く王さまをここへお迎へ申して来よ。無住居士に今歸られては、吾々は暗夜に航海する舟の艦權を失うたやうなものだ。サア早く早く……」

と急ぎ立つれば、エームスは打額きながら、急いで危き岩の壁を傳ひ岩窟さして急ぎ行く。

無住「貴重なタイムを、假令一息の間も空費するは、天地の神さまに對して、誠にすまない。最早無住の用はなき筈、よく本心に立歸り、直日に見直し聞直し、自分の心と相談をなされ」

テーリス「ハイ、重ね重ねの御教訓、誠に有難う御座います。就いては今暫くの間御待ちを願ひます。王さまの此處へお出でになる迄……」

「サガレン王が今の如き精神にてわれに面會が叶ふと思つてゐるか。取違するにも程があるぞよ。われの正體を感知する事が出来るか」

テーリス「ハイ神様とも宣傳使とも見分けがつかませぬ。何卒々々暫くの御猶豫を御願申します」

と合掌し、熱涙を頬に流し乍ら頼み入る。

無住居士は聲爽かに、老人にも似ず、勇ましき聲音にて歌ひ出したり。

あゝ惟神々々 神が表に現はれて

善と悪とを立別ける とは云ふものの世の中は

顯幽一致善悪不二 善もなければ悪もない

心一つの持ちやうぞ サガレン王に仕へたる

テーリス、エームス兩人よ 神を力に誠を杖に

朝な夕なに眞心を 洗ひ浄めてサガレン王の

君の命は云ふも更 此世の祖と現れませる

皇大神の御前に 天地自然の飾りなき

誠の心を捧げつつ 祈れよ祈れ國の爲

天地の間に生ひ立てる すべての物になり代り

罪を贖ひ千萬の 悩みをわが身に甘受して

神かみのおほ道ぢにまつるひし
 其そのまごころ眞まごころ心を現あらはせよ
 神かみはなんじ汝なんじととも俱ともにあり
 とは云いふものの汝なが心こころ
 いかでか神かみの守まもらむや
 神かみの守まもらす身み魂たまには
 塵ちりもなければ曇くもりなし
 心こころの空そらは日ひ月げつの
 光ひかりさやけく照てりわたり
 平へい和わの風かぜは永と遠はに吹ふき
 花はなは匂におひ鳥とり歌うたひ
 實みのりゆたけき神かみの國くにを
 心こころの世界せかいに建けん設せつし
 宇うちう宙ちうの外そとに身みを置おいて
 森しん羅ら萬ばん象しやう睥はい睨げいし
 元もとの心こころに歸かへりなば
 汝なんぢは最も早はや神かみの宮みや
 神かみの身み魂たまとなりぬべし
 あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々
 神かみのおほ道ぢをつつしみて
 進すすめよ進すすめすすバラモンの
 教をしへを奉ほうずる神かむづかさ司し
 それに從したがふ人ひと々びとよ
 此このらうをう老らう翁をうが一言ひとことを
 別わかれに臨のぞみてのこしおく
 あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々
 われの姿すがたを村むら肝きもの
 心こころを定さだめてよく悟さとれ

サガレン王の來る迄 待ちてやりたく思へども
タイムの力は何時迄も 元へ返さむ由もなし
いざいざさらば いざさらば 二人の誠の神司
ここに袂を別つべし

といふかと思れば、飛鳥の如く老軀を物の苦にもせず、足を速めて、早くも濃霧の中に消えて了つた。此老人は果して何神の化身であらうか？

(大正一一・九・二二 舊八・二 松村眞澄録)

第一三章 惠の花(一〇〇一)

無住居士と自稱する白髮の老人が蒼惶として立去りたる後に、テーリスは腕を組み、さし俯向いて何事か考へ込んで居る。今の今まで勇壯活潑にして孤骸胡羯

を呑む的武勇の氣に満たされたるテリスの耳にも「ヤー、エー、トー」と打ち合ふ竹刀の音、何となく物憂げに響くやうになつて來た。廣大無邊の神の力に比べれば、一人對一人の擊劍術に對し何となく力なく、自ら輕侮の念の漂はざるを得なかつた。テリスは四邊を見廻し人無きを見て獨言。

「ア、今此處に飄然として現はれたまひし宣傳使と稱する白髮の老人は、果して何神の化身であつたか。但は何教の有力なる宣傳使であつたか。實に其教訓は大神の示現の如くに感じられた……思へば思へば吾は今まで、何と云ふ誤解をして居たのであらう。幼年の頃より無抵抗主義の三五教の道を聞きながら、神の大御心を忘却し、暴に對するに暴をもつてし、惡魔の憑依せる龍雲を討伐せむとしたる吾心の愚さよ、否無殘さや。兵は所謂凶器である。先頃も一擧にして彼龍雲を討伐せむとし、數多の部下に武装を凝らさせ、神地域の表門より闖入し、敵を打ち惱まさむとして却て味方を傷つけ殺したる事、返す返すも迂愚の骨頂、拙の拙なるもの、悔いても及ばぬ殺生をしたものだ。如斯部下の人命を損し、天地の神の愛兒を殺したる大罪人、如何でか彼龍雲を討伐する事を得む。龍雲如何に無道

なればとてタールチン、キングス姫其他の人々を牢獄に投じ苦しめたれども、相
當の飲食を與へ、且つ身體に危害を及ぼさざりしは實に見上げたやり方である。
吾は彼に勝りて豺狼の心深く、王を思ひ、彼を憎むの餘り、龍雲に従ふ惡人ども
を片端より塵殺し國家の禍を絶たむとして、却つて敵の一人をも傷つくる事を得
ず、味方の三分迄死傷を生じたるは全く天の誠めならむ。神が表に現はれて善と
惡とを立て別けたまふとは此事であらう。龍雲も亦天地容れざる大罪人なれども
吾も亦彼に劣らざる大罪人なり。然るに忠臣義士と自任して討伐を企てたる吾心
の淺はかさよ。彼老人の言葉の中に自負心を脱却せよ！と力を込め教へられた
のは此事であらう。神は一片の依怙鬚眉もない。總て世界の人類を初め、森羅萬
象を平等的に愛したまふ、斯かる仁慈の大御心を悟らず、自分免許の誠を楯に、
龍雲にも劣る罪惡を行はむとし、得々として兵を養ひ武を練り居たる此恥かしさ。
サガレン王を初め、吾等にして眞に神の大御心を悟り、神に叶へる誠を盡さば、
無限絶對力の神は如何でか是を助けたまはざらむや。ア、誤れり誤れり……國の
大御祖國治立大神、豊國姫大神、神素盞鳴大神、許させたまへ！ 惟神靈幸はへ

ませ……」

と涙にかき暮れながら祈願に時を移す。

斯かる處へエームスは危険極まる岩壁を傳ひ、サガレン王に従ひ、此館の前にいそいそとして入り来り、四邊をキヨロキヨロ見廻し、以前の老人の姿の見えざるに不審を抱きながらテーリスに向ひ、

「オー、テーリス殿、王様をお迎へ申して參つた。彼の老人はどこに居られますかな」

テーリスは今迄萬感交々胸に浮んで悔悟の涙にくれ、吾身の此處にあるをも殆ど忘れて居たが、エームスの此聲に、「ハツ」と氣が付いたやうに四邊を見廻し、サガレン王を見て恭しく頭を下げ一禮し終つて、

「サガレン王様、アーよくこそ御光臨下さいました。異様の老人飄然として此處に現はれ、種々と尊き教訓を垂れさせられ、テーリスも今迄の愚を今更の如く悔悟致しました……唯今王様が御出臨になるから、しばらく待つて下さい……と百方禮を盡してお願ひ致しましたが、無住居士と名乗る老人は……吾は天下の宣傳

使だから、一刻のタイムも空費する譯には往かない……と云つて、何程お止め申してもお聞き入れなく、袖を拂つて電光石火の如く立ち歸つて仕舞はれました。折角此處迄お越し下さいまして、誠に申上げやうもなき不都合なれども、何卒お許しを願ひ上げまする」

サガレン王「老人の言葉に汝は得る處があつたか、参考のためわれに詳細を傳へて呉れないか」

テリス「お言葉迄も御座いませぬ」

と、以前の老人の教を諄々として、一言も漏らさず王の前に上申するに、王は頭を傾け腕を組み、しばし思案に暮れけるが、漸くにして頭を上下に幾度となくふり、

「成る程！ 成る程！」

と云ひながら、落涙滂沱として腮邊に傳ふ。

エームス「吾等は老人の教を聞いて、心の底より悔悟せし上は、もはや物々しき
武術の修練も必要なし。唯天地惟神の大道に則り、皇神の仁慈無限なる大御心に

神かむ傲ならひ、愛あいと誠まこととを第一だいいちの武器ぶきとして戦たたかはむ。テリス殿どの、如何いかに思召おぼしめさるるや」

王様わうさまにして御同意ごどうい下さらば、唯今ただいま限り武術ぶじゆつの練習れんしふを廢止はいしし、先まず第一だいいち着手ちやくしゆとして御魂磨みたまみがきにかかりませう」

と懨然ぶぜんとして語る。サガレン王わうは莞爾くわんじとしてエームスを伴ともなひ、再ふたび元もとの岩窟がんくつの間に歸かへり往ゆく。

後あとにテリスは、武術修練場ぶじゆつしうれんばに立たち現あらはれ、稍高ややかき處ところに直立ちよくりつして一同いちどうに向むかひ、今日けふ唯今ただいまより武術ぶじゆつの修練しうれんを全廢ぜんばいすべし。汝等なんぢらは王わうの命めいに従したがひ、今日けふ唯今ただいまより心こころを清きよめ、身みを清きよめ、仁慈じんじ無限むげんの大御心おほみこころを拜戴はいたいし、誠まこと一つの修業しうげふをなせ！
と嚴然げんぜんとして云いひ渡わたしたるに、一同いちどうの中なかより最もつとも擊劍げきけんに上達じやうたつしたる、チールと云いふ男をとこ、テリスの前に現あらはれ來きたり、

「これはこれは、お師匠様ししやうさまのお言葉ことばとも覺おぼえず、大敵たいてきを前まへに控ひかへながら、肝腎要かんじんかなめの武術ぶじゆつを廢止はいししたまふは何故なにゆゑぞ。武術ぶじゆつはもつて國くにを守るもの、國家こくかの實力じつりよくは武術ぶじゆつをもつて第一だいいちとす。然しかるに何なにを血迷ちまよつてか、斯かくの如ごとき命令めいれいを發はつせらるるや」
と、息いきを喘はづませ、些すこしく怒氣どきを帶おびて言葉ことばせはしく詰つめ寄よつた。テリスは冷然れいぜん

として答ふるやう、

「つらつら考ふれば、天の下には敵もなければ味方もなし。總ての敵は皆吾々の心より発生し、次第に成長して遂には吾身を亡ぼすに至るものである。心に慈悲の日月輝き渡る時は、天地清明にして一點の暗雲もなければ混濁もない。凡て敵と云ひ味方と云ふも、心の迷ひから生ずるのだ」

と事も無げに云ひ放つを、チールは、

「仰せの如く個人としての敵は、心の持ちやう一つに依つて自然と消滅するでせう。さりながら、恐れ多くも神地の都の神司、サガレン王に向つて反逆を企てる大悪人龍雲なるものは、王の敵ではありませぬか。吾々は王の忠良なる臣下として、どうして是を看過する事が出来ませうか。何卒御再考をお願い致します」

「成る程汝の云ふ如く、龍雲は實に惡逆無道の曲者にして、主君の爲には大の仇敵だ。臣下の分際として之を看過するは所謂臣の道に背くものである。とは云へ、如何に龍雲暴惡非道なりとは雖も、此方より大慈大悲の至誠をもつて彼に當らむか、必ずやその仁慈の鞭に打たれて、心の底より王に服ひまつり、今迄の罪を謝

し忠實なる臣下となりて仕ふるは決して難事ではない。吾々にして彼龍雲如き悪人を言向け和し、悔悟せしむる事を得ずとすれば、これ全く誠の足らざるものである。如何なる悪魔といへども、大慈大悲の大神の御心を奉戴し、至誠至實を旨とし打ち向ふ時は、必ずや喜び勇んで、感謝とともに従ひまつるは、火を睹るよりも明かならむ。先づ先づ武術を思ひ止まり、一刻も早く魂を磨けよ』
と再び宣示した。

チール「何は免もあれ、知識に暗き吾々、長者の言に従ふより道はありませぬ。何卒十二分の御注意をもつて、王の爲に盡されむ事を希望致します」

テール「然らばいよいよ唯今限り、此道場は稽古を廢止して、御魂磨きの神聖なる道場と致します。ついでには、今此列座の中に龍雲の密使として、王其他の有志を捕縛せむと表面歸順を装ひ來れるヨール、ビット外三人に對し、今夜の子の刻を期して誅戮を加へむ計劃なりしも、至仁至愛の大神の大御心に神倣ひ、唯今限り其罪を許すべし。ヨール、ビット以下三人、早く此場を立ち去つて神地の館に立歸れ』

と宣示するや、ヨール外四人はテーリスの前に恐る恐る現れ來り、大地に平伏し、
唯今の無抵抗主義の御教、仁慈のお心に感じ、吾々はもはや龍雲に仕ふる事は
断念致しました。罪深き悪人なれども、何卒廣き心に見直し聞き直し下さいまし
て、貴方がたの弟子の中に御加へ下さらば、此上なき有難き仕合せに存じます。
嗚呼何として吾々は斯る悪人に媚び諂ひ、恩顧を受けし王様に刃向はむとせしや。
思へば思へば實に吾心の汚さが恥かしくなつて参りました。何卒今迄の御無禮は
お許し下さいまして、お引き立ての程を偏に希ひ上奉ります
と誠心を面に現して、涙ながらに懺悔する其しをらしさ。ヨールは立ち上り、一
同の中に立つて述懐を謠ふ。

□ 神が表に現はれて 善神邪神を委曲に
立て別けたまふ時は來ぬ 邪非道の龍雲が
お鬚の塵を拂ひつつ 身の榮達を一向に
急ぎし餘り畏くも 恩顧を受けし神司

サガレン王の御前に
汚き心を現して

罪さへ深き谷道に
行幸を待ちて捕へむと

勢ひこんで来りたる
曲の心の恐ろしさ

斯かる尊き仁愛の
神の司と知らずして

心汚き曲神に
媚び諂ひし淺はかさ

萬死に比すべき吾罪を
罰めたまはず惟神

誠の道を説き示し
許したまひし有難さ

かかる尊きバラモンの
神の司と現れませる

君をば捨てていづくんぞ
曲津のかかりし龍雲に

従ひまつる事を得む
神の司のテリスよ

吾等五人は心より
悔い改めてバラモンの

神の教に神倣ひ
サガレン王に真心の

限りを盡し身を盡し
骨を粉にし身を碎き

此御君の爲ならば
假令屍は風荒ぶ

荒野ヶ原に曝すとも 海の藻屑となるとても

などか厭はむ敷島の 誠の心を現して

清く正しく仕ふべし あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして 吾等に宿る曲神を

伊吹の狭霧に吹き拂ひ 救はせたまへ天津神

國津御神の御前に 謹み拜み奉る

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 皇大神の御道に

仁慈の君の御爲に 盡しまつらむ神の前

確に誓ひ奉る あゝ惟神々々

御靈幸はひましましてよ

と謠ひ終り、テリスに向つてわが改心の次第を述べ立てる。

テリスはさも愉快げに、ヨール外四人に向ひ慇懃に誠の道を説き諭し、一同

の部下に對しても一場の訓戒を垂れ、これより日夜魂磨きに浮身を窶し、神の救ひを求むる事となりぬ。

(大正一一・九・二二 舊八・二 加藤明子録)

第一四章 歎願〔一〇〇二〕

サガレン王は館をたつて、再び元の岩窟にエームスを従へ立歸り、奥の間に端坐し天津祝詞を奏上し、且神歌を謠ふ、其歌。

あゝ惟神々々 廣大無邊の天地の

神の慈愛に比ぶれば 吾は小さき者なりし

セイロン島の浮島に 神の司と現れて

バラモン教の御教を 世人に傳へ居たりしが

已むを得ずして王となり 顯幽一致の政治

朝な夕なに仕へつつ 天地の神に相對し

尊き清き神業を 心の底より仕へしと

思ひ居たりし愚さよ 廣大無邊の大宇宙

五十六億七千萬 宇宙の數はありと聞く

僅かに一つの小宇宙 照らさせ給ふ天津日や

月の光の照る限り 青人草や鳥獸

草木の生ひ立つ葦原の 瑞穂の國の片傍り

大海原に漂ひし 此神國は大海に

投げ捨てられし一粒の 粟より小さき物なりし

かかる天地に跼蹐し 善ぢや惡ぢやと争ひて

無限の欲に取りまかれ 仁慈無限の大神の

大御心も悟らずに 來りし吾は愚者

定めし天地の大神は 吾等が小さき心根を

嘸さぞや笑わらはせ給たまふらむ 假たとへ令う宇宙うちうを吾われ一人ひとり

知しろしめすべき世よありとも 廣くわう大だい無む邊へんの大だい宇宙うちう

其その現げん状じやうに比くらぶれば 例たとへにならぬ物ものぞかし

あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら 神かみは宇宙うちうを知しろしめす

其その神しん徳とくを省かへりみて 今いまより後のちは村むら肝きもの

心こころを改あらため信あな仰なの 誠まことの道みちに服まつろひて

此この身みの續つづかむ其その限かぎり 吾わが身みに及およぶ麻あな柱なひの

誠まことを捧ささげ大おほ神かみの 其その功いさ績をしの萬まん分ぶ一いちに

謹つつしみ報むくい奉まつるべし 左さ守もりの神かみと仕つかへたる

タールチンやキングスの 姫ひめの命みことよエームスよ

其その他たの百ももの司つかさ達たち 汝なれも今いまより魂たましひを

清きよく正ただしく宣のり直なほし 小ちひさき浮うき世よの執しふ着ちやくを

科し戸などの風かぜに拂ふつ拭しきし 仕つかへまつれよ惟かむ神ながら

神かみに誓ちかひてサガレン王わうの 神かみの司つかさは宣のり傳つたふ

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はひましませよみたまさち』

タールチンはサガレン王の歌を聞き嬉しく立ち上り、心欣々として謠ひ舞ふ。

あゝ惟神々々かむながらかむながら 神の恵みの深くして

無明の闇は開けにけり 水も眠れる丑満の

時刻はたちて寅の刻 卯の正刻となりぬれば

東の空を輝かし 豊榮昇る日の御影

尊き清き御姿を 現し給ひて葦原の

神の御國を照らしまし 青人草は云ふも更

鳥獸や蟲族や 草木の片葉に至る迄

守らせ給ふ珍の國 其海原の片隅に

彌永久に浮かみたる 七五三を張りたるシ口の島

其眞秀良場に現れまして 神の御代に大國彦の

君の命とあれませる

力もわけて自在天

神の御言を畏みて

世人の爲めにたてられし

バラモン教の神司

人子の王とあれまして

吾等を治め給ひたる

其功績は彌高く

天教山の如く也

空ゆく雲も憚りて

影さへかくす王の稜威

包ませ給ひて今此處に

珍の言靈宣り給ひ

謙譲ります尊さよ

人は神の子神宮と

昔の人は宣りつれど

八岐大蛇のはびこりて

青人草の身靈をば

千代の棲家と定めたる

今の世人は悉く

名ばかり清き神の宮

誠は曲の容器ぞ

小さき欲にからまれて

憎み争ひ泣き叫び

焦熱地獄や水地獄

修羅の巷はまだ愚か

根底の國に陥りて

阿鼻叫喚の呻き聲

聞えもせずきこに得々とくとくと

知らず知らずしに魔まの道みちを

迎たどる世よびと人の憐あはれさよ

吾等われらも神かみに朝夕あさゆふを

仕つかへ奉まつれる身みなれども

心こころの闇やみは晴はれやらず

身みたま魂まの穢けがれは何時いつ迄までも

洗あらひきれない罪人つみびとよ

されども神かみは御心みこころを

天てんより廣ひろく神直日かむなほひ

大直日おほなほひにと見直みなほして

許ゆるし給たまへる有難ありがたさ

罪つみや穢けがれになづみたる

卑いやしき人ひとの身みを以もつて

如何いかでか神かみの御心みこころに

かなひ奉まつらむ由よしもなし

只何事ただなにごとも吾々われわれは

神かみの心こころを心こころとし

大慈だいじ大悲だいいひの神かみの道みち

普あまねく世よびと人に宣のり傳つたへ

心こころを筑紫つくしの果はて迄までも

仕つかへ奉まつらむ惟神かむながら

神かみの御前みまへに謹つつしみて

畏かしこみ畏かしこみ祈ねぎ奉まつる

あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈みたま幸さちはひましませよ」

キングス姫は白扇を開き立ち上り、長袖しとやかに自ら謠ひ自ら舞ふ。

豐葦原の珍の島 神の御國と稱へたる

四方は海に包まれし 清き尊きシ口の島

神地の都に現れまして 恵みの露に四方の國

靑人草に隈もなく 注がせ給ひし大君は

如何なる枉の猛びにや 尊き九五の身を以て

痛々しくも松浦の 小絲の里に下りまし

天津日影も碌々に 通ひもはてぬ岩窟に

尊き御身を忍ばせて 國の御爲め人の爲め

心を盡し給ふこそ 實に有難き極みなり

何處の空より來りしか 心汚き龍雲が

聞くも尊き姫君を 醜の手振に誑らかせ

搔き亂したる悲しさよ 假令此身は海原の

藻屑もくづとなりて朽くつるとも 王きみに仇あだする曲くせ者を

誠まことの神かみの言こと靈たまに 言こと向むけ和やはし世よの中なかに

騒さわぎ渡わたれる黒くろ雲くもを 拂はらひ清きよめで置おくべきか

あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々 神かみの御み靈たまの幸さちはひて

吾われ等ら夫婦めをとが眞ま心こころを 大おほ御み心こころも平たひかに

聞きし召めされてシロの島しま 無ぶ事じ太たい平へいに風かせもなく

曇くもりも知しらぬ神かみ國くにと 守まもらせ給たまへ惟かむながら神かみ

神かみの御み前まへに祈ねぎ奉まつる 朝あさ日ひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも 惡あく魔まは如い何かに強つよくとも

誠まことの神かみの在ます限かぎり 彌いや永とこ遠とはに君きみヶ代がよは

安やすく穩おだひに治をさまりて 百ももの民たみ草くさ打うち揃そろひ

喜よろこび勇いさみて君きみヶ代がよを 群むらがり來きたる小こ雀すずめの

千ち代よ萬よろづ代よと稱たたへまし 上しやう下う和わ樂らくし神しん人じんの

睦むつび親したしむ御み代よとなり 國くにの榮さかえをミロクの世よ

嚴いづと瑞みづとの言靈ことたまに 救すくはせ給たまへと祈ねぎ奉まつる

あゝ惟かむながらかむながら神々々 御靈みたま幸さちはひましませよ

エールは立たつて謠うたふ。

人ひとは神かみの子神こかみの宮みや 誠まこと一つを立たて通とほし

道みちにかなひし行おこなひを 朝あさな夕ゆふなに勵はげみなば

天あめケ下がしたには恐おそるべき 仇あだも曲津まがつもあらざらめ

さはさり乍ながらバラモンの 王きみに仕つかへし神司かむつかさ

アナン、セールヤシルレング ユーズの友ともは龍雲りゅううんが

枉まがの企たくみに捕とらはれて 底そこひも知しらぬ陷おとし棄あな

陥おちこみたりと聞きき及およぶ かかる便たよりを聞きく吾等われら

此このまま袖手しうしゆ傍觀ぼうくわんし 朝あさな夕ゆふなに友垣ともがきの

艱なやみを眺ながめて過すこさむや 天則てんそく違反ゐはんか知しらねども

吾等は親しき友の爲め 生命を的に立ち向ひ

神地の都に蔓れる 心汚き龍雲や

枉人達を打ち鞫め 四人の友を逸早く

救ひ出さでおくべきか 一日も早く片時も

此目的を達成し 神の大道に仕へたる

信徒たるの誠をば 盡しまつらむ惟神

神の司のサガレン王 御心安く聞し召し

吾等が願を許しませ 神は吾等と俱にあり

悪を言向け善人を 救ひて神の御恵に

霽はせ給へ神司 わが大君の御前に

慎み敬ひ祈ぎ奉る あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と王に向つて四人の神司を救ふべく、神地の都に遣はされむ事を懇願する。サガ

レン王わうを始めはじめとし、タールチンやキングス姫ひめ、テーリス、エームスの上司じやうしは、エールの言靈ことたまに頭かづべを傾かたむけ、両手りやうてを組くんで、稍暫やしばし無念むねんの涙なみだに暮くれて居ゐた。
かかる處ところへ美うるはしき女の宣傳歌せんぜんか、谷たにに木靈こだまを響ひびかせつ音樂おんがくの如ごとく聞きこえ來くる。あゝ
果たして如何いかなる人ひとの宣傳歌せんぜんかであらうか。

(大正一一・九・二二 舊八・二 北村隆光録)

第三篇 神地かうぢの暗雲あんうん

第一五章 眩代思潮げんだいしやう〔一〇〇三〕

久方ひさかたの天津御空あまつみそらはドンヨリとして、暗雲あんうん低迷ていめいし、四方よもの山々やまやまは白雲しらくもの斷片だんぺんを胸きよつ

腹のあたりに纓め、何とはなしに蒸しあつく、風は殆ど其權威を失ひ、白楊樹の
デリケートな柔かな新芽さへビクとも動かぬ陰鬱の氣漂ふ。神地の城の別殿は、
幾十丈とも知れぬ岩石、地球の中心より根ざしたるかと思はる如く抜き出し、
其上面は殆ど西瓜を縦に切つたやうな平面を現はしてゐる、風景よき上津岩根に
建設されてある。

龍雲、ケールス姫の二人は、涼しさうな布を以て織上げたる白衣を身に着し、
窓を引あげ、展開せる山野の緑を眺めて酒酌みかはし、心地よげに雑談に耽つて
ゐる。さしもに暑き夏の空、何とはなしに、四肢五體より滲み出だす汗水に麻の
衣までアトラスの如き斑紋を描いてゐる。ふとケールス姫は龍雲の背を眺むれば、
何の制縛も受けないと云つた様に、恣に滲み出でたる汗は衣を少しくこげ茶色に
染め、輪廓正しく、不思議な斑紋が現はれてゐるので、近寄り見れば、人が立つ
てゐる様に見える。姫は何となく心掛り、龍雲の背に近寄つてよくよく覗き見れ
ば、頭部に角を生やした鬼の形であつた。「アツ」と驚き龍雲の前に廻つて泣き
伏しつゝ、

「龍雲様、龍雲様」

と連呼し、

「早く其衣を脱がせ玉へ。あなたには鬼が付け狙つて居ります。妾はそれを見るより、俄に貴方が怖くなつて参りました。否々サツパリ厭になりました。どうぞ其麻衣を脱ぎ捨てて下さいませ」

龍雲はカラカラと打笑ひ、

「アハ、ハ、ハ、どうせ鬼も居らうし、大蛇も居るであらう。何と云つても一國の主を放逐し、天下の覇權を握ると云ふ英雄にはすべて半面のあるものだ。神佛の心を以て如何して此大望が遂行されようか。そんな譯の分らぬ弱音を吹くものではない。そして自然的に滲み出た汗の斑痕を見て、驚くといふ者が何處にあらうか。其方も此龍雲と心を協せ、ここ迄大事をやつつけた位の悪人だから、モウ少し度胸を据ゑないと、到底生存競争の激烈なる現代に立つて、完全な生活を續くる事は出来なからうよ」

「何は免もあれ、俄に吾身が恐ろしくなつて参りました。どうぞお頼みですから

私にお暇を下さいます。不義不道の行爲を以て、神に對し忠實なる勤めをなしたとは如何しても考へられませぬ。私は第一にあなたに歸依し、次にウラルのお道に歸依し、次で盤古神王様の神徳に歸依した者で御座います。盤古神王様は決して惡神では御座いますまい。さすればあなたの行爲を決してお許し遊ばす筈はなからうと存じます。今に如何なる天罰が酬い來るやも知れますまい。あなたは飽く迄も初心を貫徹せなくては、後へは引かない御氣性だから、何程私がお諫め申しても、到底駄目でせう」

「これは又異なる事を云ふではないか。人の心は持方が肝腎だ。此龍雲だと今日地位に納まり返つて居られるやうになつたのは、八九分迄其方の内助に依つたからである。言はば其方は、龍雲に惡逆無道を勧めた張本人だ」

「エ、何と言はれます。私が惡の張本人とは聞き捨てならぬ其お言葉……」

龍雲は嘲笑ひ、

「何を云つても同じ穴に棲む貉だから、此責任は二人で分擔せなくてはならないのだ。併し乍ら今の世の中は、奸者佞人、惡逆無道を敢行する丈の器量ある者を

稱して、英雄豪傑、紳士紳商、國民の選良と持て囃すのだ。現代思潮の眞髓を極端に體驗したる吾々兩人は、實に現代に於ける勇者だ、覇者だ。善惡といふものは、時と所と地位とに依つて變るものである。人間も肉體のある限りは、何と云つても衣食住の完全を望まなければ、人生は嘘だ。下らぬ古き道德觀念に捉はれ、半死人的行爲をなすを以て至善の道と迷信してゐるやうな人物は、最早此世界に生存の價値もなければ、見識もない馬鹿の骨頂だ。それだからこの龍雲は無抵抗主義を標榜する人類愛善の教の三五教や、人間の階級を三段に分けて、上中下三流に對し社會的待遇を異にするやうな矛盾を、平氣でやつてゐるバラモン教は猶更嫌ひだ。すべて世界の人種は有色無色を問はず、一切平等に神の恩惠……語を換へて言へば、自然の天恵は偏頗なく均霑さるべきものだ。今日の矛盾不合理極まる社會の習慣を打破し、智者をして其智を振はしめ、勇者をして其勇を活躍せしめ、自由競争を以て社會の原則となさねばならない。さすれば力一杯の大活動もする事が出来、野に叫ぶ聖人は頭を擡げて、平素懷抱せる其妙智妙案を發揮する様になるのが所謂一切平等、偏頗なき自然の神慮に叶つたものである。さうだ

から姫も今迄の舊慣をスツカリ放擲し、日進月歩の今日だから、吾教に従つて、
世界第一の新しい女となつて、其驍名を龍雲と共に世界に輝かすだけの覺悟を持
つて貰はなくちやアならない。此夫にして此妻あり、諺にも鬼の夫に蛇の女房と
いふ事がある。これは取りも直さず此世界を造り玉うた盤古神王さまが、比喻を
作つて、世界萬民の口に知らず知らずの間に傳へさせ玉うたのである。これ程鬼
大蛇惡魔の蔓る世の中に處するには、それ以上の強壓力がなくては到底駄目だ。
鬼と蛇との夫婦が現はれて、世界を統一するといふ豫言を神さまがしておかれた
のだ。其豫言の體顯者は即ち吾等兩人だ。自由自在に行使すべき獨特の權能者だ。
假令根の國底の國が假りにありとしても、此現幽神の三界は残らず盤古神王様の
掌握し玉ふ所、盤古神王の御意に叶うた行動をなす者が如何して罪になるものか。
姫も少しは胸に手を當てて、よく考へて見たがよからう。善惡不二、正邪一如と
云ふではないか。人の體だつて前後ろがある。吾背中の鬼の斑紋は吾唯一の守護
神が顯現したのだ。前から見れば實に圓滿具足の好男子、眞善美の極致に達した
立派な龍雲王である。裏面より見れば即ち惡鬼羅刹の首魁である。床の間の掛物

を見てもさうではないか。あの通り美しい繪畫が描かれてあるが、彼の軸の裏面は實に粗末な紙計りの殺風景な品物ではないか。人間の同じ一つの體にも、清淨無垢にして日月にも比喩ふべき兩眼のあると共に汚穢極まる大小便の噴出口があるであらう。此噴出口が汚穢だと云つて取り去つて了ふものなら、到底全身の安靜を保つ事は出来ない、従つて何程美しい兩眼も忽ち其光明を失つてしまふであらう。葱の白根を見てもさうではないか。土にかくれた汚い臭氣のある所に却て無限の味がある。屍のある所には驚集り、濁れる水には數多の魚集まり来る。これ位な天地の道理が分らなくて、如何して神地の城の花形役者となつて、世に時めく事が出来るであらうか。チツと其方も改心をして貰はねば、此龍雲の社稷は到底保たれないぢやないか」

「そんなら盤古神王さまのお爲になる事、お心に叶ふことならば、人の認めて惡逆無道とする所も、敢へて神さまはお咎めなさらないのですか。そんなら一つ伺ひますが、それだけ智謀絶倫、神力無雙の龍雲さまの危き生命を助けたエームスは、なぜ牢獄へ投ぜられたのです。エームスは言つてゐただぢやありませんか……」

人の生命を助くるのは、人間として最善の行ひだと思ふ。然るに思はざりき、人を助けて罪人となり、暗き獄舎につながれて、日夜苦悶をつづけねばならぬならば、吾々は最早此社會に手も足も出す事は出来ない……と云つて居りましたでせう。それは如何いふ解釋になるのでせう。一向此點が合點が參りませぬ。盤古神王さまの御爲に働きながら、又もや盤古神王の爲に根底の國の牢獄に身魂を投入まれるやうな悲惨な事は出来はしますまいか

天に風雨の障りあり、人に病の惱みあり、心に雲のかかる事あり。假令日月晃々として下界を照らすと雖も、中空に今日の如く暗雲とざす時は、日月の光も地上に透徹せない如く、此龍雲だとしてヤハリ宇宙の模型、天地の斷片だから、心天の日月、黒雲に閉ざさるる事も偶にはあるであらう。されど疑の雲一度晴れなば、心天忽ち清明となり、眞如の日月は其光を放つやうになつて來る。それは一時の雲の障りだ。決して曇つた空は永遠に晴らさないと云ふ盤古神王さまは御約束はなさらない。そんな小問題に齷齪してゐて、此一國をどうして支へ保つて行く事が出来ようか。賢いやうでも流石は女の愚癡、イヤもう呆れて物が言はれないわ

い、アツハ、ハ、ハ、
と肩をゆすつて豪傑笑ひに紛らす。其狡猾さ加減、流石の盤古神王も呆れて三舎を避け玉ふであらう。

ケールス姫は默然として差し俯むき、暫くは善惡正邪の判断に苦しみ、或は鬼となり、或は神となり、獸となり、大蛇となり、時々刻々に吾心の變化を目撃して益々迷路にふみこみ、咫尺暗澹として壺中につめこめられたる如き心理状態となつて了つた。一方龍雲も空威張して、前の如く言ひ放つてみたものの、何となしに良心の嘯きは彼が論旨を一々否定せむと、勢猛くいき巻き来るやうであつた。二人は默然として暫く無言の幕をつづけてみた。

かかる所へあわただしく顔色變へて驅込み来る一人の男は、龍雲が常に懐刀として寵愛してあるテールといふ青年である。彼は自分の居間に閉ぢ籠り、ウラル教の經文を一心不亂に研究しつつあつた熱心なる龍雲崇拜者である。

「モシモシ御二方様、夕、大變な珍事が突發致しました。悠々閑々として御座る時ではありますまい。サア一時も早く繩梯子をかけ、此岩窟をお下り遊ばし、谷

川を越えて暫し御身を忍ばせ玉へ、危険刻々に迫り来る！

と顔色變へて、何となく落付かぬ體にて言ひ放つを龍雲、ケールス姫はテールの言に打驚き、龍雲は立膝しながら、

「一大事とは何事なるか」

と忽ち形を更め、言葉せはしく問ひつめるを、テールは其前に据ゑおかれたる瓶の水を二口三口グツと呑み、胸を撫で下し、

「されば候、テールの吾は書齋に閉ぢこもり、神書を研究する折しもあれ、俄に騒ぐ庭の群鳥、人馬の物音がまびすしく、風が持て来る攻め太鼓、はげしく追々近寄る金鼓の響、敵は間近く押寄せたり。何者の反逆なるかと、あたりを見れば廊下の勾欄、コレ幸ひと云ふより早く、猿の如くかけ登り、眼下の村手をキツと見渡し眺むれば、思ひ掛なき三つ葉葵の旗印、合點行かぬと見る内に、先に立つたるサガレン王を始めとしテールス、エームス其他の勇將、武備をととのへ、雲霞の如き大軍を引率し、單梯陣の構へを以て三方よりチクリチクリと攻め来る、其光景の物々しさ。こは一大事と、テールは味方の守兵を驅り集め、勇敢決死の

わかものすうじふにん、手鎗を揃へて寄せ来る敵に向つて、眞一文字に突進し、縦横無盡に
若者數十人、手鎗を揃へて寄せ来る敵に向つて、眞一文字に突進し、縦横無盡に
突き立て薙ぎ立て、斬りまくり、暴虎馮河の勢を以て詰め寄れば、流石の敵も辟
易し、雪崩を打つて三町許り、數多の死傷者を殘こしつつ退却したりと思ひきや、
左右の林の中より、俄に現れ来る數萬の軍勢、こは一大事、深入りしては却て敵
に謀られむ、無念ながらも、豫定の退却をなさむと、表門へと引返す數十の味方
は、或は討たれ或は遁走し、残るはテール只一人と脆くもなりにけり。ケリヤ、
ハルマの兩人は、見る見る内に敵の爲に捕へられ、其他の部下は卑怯にも甲をぬ
ぎ、白旗を掲げ、敵に降服したる其腑甲斐なさ。テール一人如何に切齒扼腕すれ
ばとて、大廈の將に覆へらむとする時、一木の支ふ能はざるの如く、無念乍らも
只一人、此危急を君に報ぜむが爲に、群がる敵を伐立て薙ぎ立て、此處まで無事に
立歸つて候。イザ早く此場を立退き玉へ。長居は恐れ、早く早く……」
と夢中になつて急ぎ立てる。其様子の決して虚偽とも思はれねば、二人は忽ち顔
色を變へ轟く胸を無理に鎮めむとすれども、俄の驚異にハートの鼓動は暴風雨の
吹き荒ぶが如く、大地震の如く鎮靜すべくも見えず、齒はガチガチと震ひ出し、

手足は戦き見るも憐れな光景なりけり。

斯かる所へ悠々として入り来る左守神のケリヤは、テールの様子と言ひ、龍雲、ケールス姫のそはそはしき行體を眺めて不審に堪へず、三人の顔を見比べ、テールはケリヤの此處に入り來りしを見て、言葉せはしく、
「貴殿は左守神のケリヤ殿では御座らぬか。かかる危急存亡の場合、何悠々として御座る。早く防戦の用意をなし、敵を千里に撃退し、君の御身邊をお守りなさ
らぬか」

といきり切つてまくし立てる。ケリヤは少しも合點往かず、

「今日の如き天地寂然として聲もなく、風もなき夏の日に、何をうるたへ召さるか。又龍雲さま、ケールス姫さまは、何としてかくもそはそはしく遊ばすや、合點が参りませぬ。何とか是には深き仔細が御座いませう。つぶさに仰せ付け下さいますれば、ケリヤはケリヤとしてのベストを盡し、君の御心を安んじ奉りませ
う」

龍雲は言せはしく、

「ケリヤ、其方は今日の敵の攻撃を何と心得居るか。一刻の猶豫もあるまい。早く防戦の用意を致せ！」

「コレは心得ぬ其言葉、敵なきに何を以て防戦の用意に及びませう。ナニ、是は大方何かの御考へ違では御座いますまいか」

「エー腑甲斐なき其方の言葉、斯くの如く押しよせ来るサガレン王の大軍を、其方は何と心得て居らるか。イヤ分つた、其方はサガレン王に内通し、王の神軍を甘く引入れ、妾を滅さむとする、憎き張本人であらう。モウ斯うなる上は容赦はせぬ、覺悟せよ！」

とケールス姫は、長押の薙刀取るより早く、ケリヤに向つて伐つてかかる。上を薙ぎ下を拂ひ一進一退、水車の如く薙刀を使ふ。其修練の早業、鬼神も近付く可らざる勢なり。

ケリヤは身に寸鐵も帯びず、又餘りの驚きに度を失ひ、逃場を求めて迷ひ居る。憐れやケールス姫の薙刀はケリヤの足をかすつた。「アツ」と悲鳴を上げ其場に打倒るるを姫は見向もなさず、

「龍雲どの、其鎗を以てわれに續かせ玉へ……」

と表をさして襷十字にあやどり、後鉢巻リンとしめ、女武者の凜々しき姿、阿修羅王の荒れたる如く驅出し見れば、人の影は何處にもなく、門番のシール、ベスの兩人は門館に胡坐かき、氣樂さうに鼻唄をうたひ乍ら、チビリチビリと酒を酌みかはしてゐた。ケールス姫は合點行かず、吾居間に引返せば、龍雲は奥の間に腰をぬかして身動きならぬまま、鈍栗眼をギロつかせてゐる。報告に出て來たテールは亦同じく肝玉を潰し、以前の場所につくばつた儘身動きもせず目をパチつかせてゐた。ケールス姫は言葉きびしく、

「テール、汝テール、虚偽の報告をなして、吾等の心を動かしたる不届きな奴、サア汝は何者に頼まれたか、一伍一什を白状致せ」

「ハイ、今になつて能く考へて見ますれば、あまり御兩人様の御身の上を案じ過して居つたもので御座いますから、知らず知らずに眠つた間に、あんな恐ろしい夢を見たので御座いませう」

龍雲は安心と怒りの混線した聲を張り上げて、

「不都合至極の卑怯者、否馬鹿者だなア。以後はキツと慎んだがよからうぞ」
「ハイ、誠に誠にソソウ致しました……」
「ホ、ホ、ホ、えらい夢の相伴をしたものだ」
(大正一一・九・二三 舊八・三 松村眞澄録)

第一六章 門雀(一〇〇四)

神地の城の表門には、門番のシール、ベスの兩人が、あまりの無聊と暑さを忘れむため、チビリチビリと胡坐をかいて酒を汲み交し雑談に耽つて居る。

「オイ、ベス、ケールス姫様が血相變へて禪十字に綾取り、後鉢巻を凜と締め、裾もあらはに大薙刀を小脇に抱込み、此處迄現はれ來り、手持無沙汰のお面貌でコソコソと再び元のお館に引つ返されたのは一體何だらう。まるで戦場に於ける女武者のやうぢやないか。俺は此處に門番を酒と一緒に神妙につとめて居るから、

貴様一寸お館へ入つて様子を探つて来て呉れ。何だか氣が落ち付かないやうな心持がして来たからなア」

「さうだなア。合點の往かぬ姫様の御様子、之には何か譯があるのであらう。叱られるか知らないが一寸奥迄往つて来る。俺達は門番の分際として、昇殿は許されない身の上だが、何でも非常の事が大奥には突發して居るに違ひない。萬々一龍雲様の御身の上にては、吾々も悠々閑々として居る譯には往かない。叱られても構はぬ、奥迄踏込んで来る。様子は後から詳しく分るであらう」と云ひのこし、ベスは白鉢巻を締め襷十字に綾取りながら、尻引つからげ無雑作に奥殿さして進み入り、ケリヤの負傷や、龍雲、ケールス姫、テールの驚きの場面を一見し、且つ大體の様子を垣間見ながら、此分ならば餘り大した事はあるまい、夢の騷動だと呟きながらスタスタと踵を返さむとする時、目敏くもケールス姫はベスの姿を見て聲を尖らせ、

「お前は門番のベスではないか。館の禁制を破り、斯かる大奥迄何しに来たのだい」

と嗚鳴りつけられ、ベスは慄ひながら頭を掻き、

「ハ、ハイ、マ、誠に申譯が御座りませぬ。實はケールス姫様の唯ならぬ御様子
を拜みました、此大奥には何事か珍事突發せしならむ、如何に卑しき門番なりと
て、君の危難を救はずには居られない、昇殿の御禁制は百も千も承知致しては居
りますが、斯かる非常時にはそんな事を守つて居る事は出来ない、とも角お二方
を助け申さねばならないと、シールと申を合せ、不都合を顧みずここ迄参りまし
た。どうぞ御勘辨を願ひます」

「許し難き汝の行動、常ならば此儘に差措くべきではないが、汝の吾等を思ふ誠
忠に免じて唯今限り忘れて遣はす。氣をつけて嚴重に門を守れよ。さうして大奥
の此有様を、何人にも口外してはならないぞ。堅く口留して置く」

「ハイ有り難う御座います。決して決して首が飛んでも申しませぬから御安心下
さいませ」

龍雲は聲を尖らせて、

「ベス、早く此場を退却致せ！」

「ハイ」と答へてベスは此場を立去る。ケリヤは姫に足を切られて苦悶の聲を放ち「ウン　ウン」と唸つて居る。テールは腰を抜かした儘、目玉計りヂヤイ口コンパスのやうに急速度をもつて白黒交替に轉回させて居る。

心汚き龍雲が　寵兒となりて朝夕に

近く仕へし青年テールは　一閒に入りてウラル教の

神の御文を拜讀し　知らず知らずに夢に入り

前後も知らぬ其隙を　心に潛む曲鬼は

自由自在に跳梁し　夢路をたどる時もあれ

神地の城の表門　人馬の物音物凄く

攻め来る敵の鬨の聲　訝かしさよと飛び起きて

館の勾欄かけ登り　眼下をきつと見渡せば

今迄主と頼みたる　サガレン王は勇ましく

連錢葦毛の馬に乗り　金覆輪の鞍置いて

駒こまの嘶いななき勇いさましく

采配さいはい振ふつて寄よせ來きたる

續つづいて青鹿毛あをか黒鹿毛くろかに

跨またがる勇ゆう士しは何なん人と

眼まなこを据すゑて眺ながむれば

テールテールス、エームエームス兩勇士りやうゆうし

黄金こがねの采配さいはい打うち揮ふるひ

嚴きびしき下げ知ちに兵士つはものは

潮うしほの如ごとく打うち寄よする

スワいちだいじー大事だいじとかけ下くだり

數十すじふの勇士ゆうしを引率いんそつし

敵てきに向むかつて斬きり込こめば

衆しゅうを頼たのみて押おし寄よせし

遠さすの敵てきも辟易へきえきし

寄よせては返かへす磯いその浪なみ

旗色はたいろ悪わるく見みえけるが

膝下しつかに響ひびく関とぎの聲こゑ

雲霞うんかの如ごとく大軍たいぐんは

單梯陣たんでいぢんを張はりながら

少數せうすうの味方みかたと侮あなどつて

阿修羅王あしゆらわうの如攻ごとせめ來きたる

味方みかたは慄悍へうかん決死けつしの士し

鬼神きしんも挫ひしぐ豪傑がうけつが

如何いかがはしけむバタバタと

鋭すまき刃やいばに貫つひらかれ

苦くもなく其場そのばに倒たふれたり

テールテールは驚おどろき唯ただ一人ひとり

門内もんない深ふかく忍しのび入いり

門を鎖してスタスタと ケールス姫や龍雲の
 居間をばさして進み入り 敵は間近く迫つたり
 此場を早く遁走し 後日の備へをなしませと
 誠しやかに述べ立つる 晝寝の夢の物語
 誠となして龍雲は 顔の色までサツと變へ
 忽ち其場に腰抜かし 慄ひ戦くをかしさよ
 まさかの時に強いのは 女心の一心ぞ
 ケールス姫は立ち上り 長押の薙刀おつ取つて
 表をさして驅出し 寄せ來る敵を一騎だも
 餘す事なくなぎ拂ひ 女の武勇を現はすは
 今此時と勇み立ち 立出でなむとするところ
 左守のケリヤは入り來り 平穩無事の此城に
 何をもつてか姫様は 仰々しくも其姿
 止まり給へと云ひければ 姫は怒つて忽ちに

ケリヤの足を薙ぎ拂ふ

ウンと一聲叫びつつ

其場に倒れし憐れさよ

死物狂のケールス姫は

後鉢巻凜としめ

禪十字に綾取りて

強敵こそは御参なれ

唯今思ひ知らせむと

猛虎の如く驅出せば

こは抑如何に門前は

ソヨ吹く風の音も無く

天地静に寝ぬること

閑寂の氣は漂ひぬ

姫は不審に堪へずして

再び館の奥の間へ

手持無沙汰に歸り來る

とくと様子を調べれば

テールが夢の空騒ぎ

張りつめ居たる魂も

グタリと緩みケールス姫は

テールの司に打ち向ひ

その不都合を責めかくる

夢に夢見た慌て者

テールは頭掻きながら

やっと許され虎口をば

逃れし如き心地して

胸なで下すぞをかしけれ

此世に鬼はなけれども

吾身の作りし村肝の 心の鬼に責められて
苦しみなやむはテールのみか ケールス姫も龍雲も
同じく心を痛めつつ 舉措其度をば失ひて
慄ひ居たるぞおそろしき。

幸にケリヤの薙刀の創は思つたよりは淺く、切口に粘土をつけ繃帯を施したれば、
數日の後には殿中歩行の自由を僅に得る處迄回復したりける。
是より城内は間斷なく不可解なる事のみ續出し、龍雲を初め上下の司達は戦々
競々として安き心もなく、淋しげに其月日を送りつつありしといふ。

(大正一一・九・二三 舊八・三 加藤明子録)

神地の城の表門の番人シールは、只一人チビリチビリと酒を傾けながら、奥殿に進み入つたるベスの歸りを今や遅しと待ち居たり。かかる處へニコニコとして立ち歸り來りしベスの顔を見るより噛みつく様に忙しく、

「オイ、ベス、如何だつたい。大奥の首尾はイヤ様子は……」

「大山鳴動して鼠一匹だ。何事ならむと身をかため、恐れ氣もなく龍雲王の奥殿に忍び入り、ケールス姫様のあの御様子にては何事の大事變突發せしかと窺ひ見れば、豈圖らむや、平穩無事、天下太平、國土成就、四民安堵、瑞祥の氣が殿内に漲り渡り、床に飾られた福祿壽の置物が……ベスさまお早う……と腰を屈めて挨拶をして居ると云ふ長閑さだつたよ。も早此上は一言も口外は出來ない。先づ

これが俺の使命だ。アハ、ハ、ハ、」

「そんな事で如何して全權公使が勤まるか。も少し戦況を詳細に報告致さぬかい。報告しようにも實の處は仕方がないのだ。サツパリ【アフィン】が宙に迷つて了つた。驚異の面相を遺憾なく陳列してある羅漢堂を覗いて來た様なものだつた。されども明智の某、黒雲深く包みたる不可解の事實も、遺憾なく道破して來たの

だから偉いものだらう。何と云つても明敏な頭腦の持ち主だから、凡ての事實の核心に觸れるのは此ベスに限つて居るワイ、ウフ、フツフ。ア、小便の大タンクが溢れて腎臓が破裂しさうだ」

と云ひ乍ら、エチエチと怪しき足許にて便所に姿を隠す。シールは腕を組み獨語。
「マア、何と譯の分らぬ事が出来たのだらう。ベスの奴、一向不得要領の返答ばかりを竝べ立て肝腎の問題を外さうとつとめて居よる。これには何か深い譯がなくてはならぬ。一つ巧く酒を勧めて酔ひ潰し、泥を吐かしてやらなくちや、一通りの料理では駄目だ。背骨を抜き取り、腹の中迄開きにして、鱈鍋の様に何もかも暴露させてやらうかナ」

と呟き乍ら待つて居る。ベスは漸く小用を済ませ歸り来るを、シール「オイ、チツと酒でも聞し召したら如何だい。斯う四邊暗雲に包まれ、蒸し暑き無風地帯にあつては、やり切れないぢやないか。ドツと奮發して鯨飲馬食と洒落て、暑さを凌がうぢやないか。ウラル教の古い教にも……飲めよ騒げよ一寸先や暗よ、暗の後は月が出る……と云つてあるからにや、酒さへ飲めば屹度

御神慮ごしんりよに叶かなつて、大空おほぞらの陰鬱いんうつの雲くもも晴はれ、涼風りやうふう颯々さつさつとして面おもてを吹ふき、天青てんあをく日は清きよく、天あまの岩戸いはとびら開ひらきが出来るできであらうよ。酒さけなくて何なんの己おのれがナイスかなだ。何程なにほど立派りつぱなナイスの給仕きふじでも、飯めしばかりでは機はづまないからな。酒さけは百薬ひやくやくの長ちやうだ、酒さけは「やつこす」だ。薬師やくし如来にょらいだ、般若湯はんによたうだ、甘露水かんろすゐだ、釋迦しやくかだ、イエスだ。吾等われらを天國てんごくに救すくふ大救世主だいきうせいしゆは盤古神王ばんこしんわうでもなければ常世神王とこよしんわうでもない。飲のめば直ただちに心こころ浮うき立たち、天國てんごくを自由じゆうじざい自在じざいに逍遙せうえうせしめ給たまふ酒さけの神様かみさまだ。現實げんじつに天國てんごくに救すくひ下くださる神様かみさまは吾前わがまへに出現しゆつげんしますぞよ」

「あまり酒さけの神かみの御厄介ごやくかいになると、門番もんばんの役やくが疎おろそかになつて、免めんの字じに職しよくの字じを頂戴ちやうだいせなくては、ならなくなつて了しまふぞ。チツと心得こころえねばなるまい」

「酒さけの用意よういはもう宜よい。これで澤山たくさんだ。此上このうへは一滴いつてきも飲のめない。ア、えらく酔ようた……と云いひ出した時ときが本當ほんたうの酒さけの興味きやうみを覺おぼえた時ときだ。強しひられない酒さけは飲のめぬと云いふから、此このシールさまが斯かうしてお前まへに酒さけを「シール」のだ。アハ、ハ、ハ、」

ベスは喉のどの蟲むしがキューキューと催促さいそくをして居ゐる。到頭たうとう堪たまらなくなつてシールの言葉ことばに従したがひ、度胸どきやうを据すゑてグイグイと飲のみ始はじめた。忽たちまち舌したは纏もつれ出だし、近ちかくに居を

つてさへ其言靈は聞き分け難き迄酔つぱらつて了つた。酔へば如何なる秘密も喋り立てるは小人の常だ。

シールはベスを一寸むかつかせ、其勢に一切の秘密を吐かしてやらうと、稍聲を高めて、

「オイ、ハベルの塔、貴様は何時までも此門番に仕へ【ハベル】名物男で、云つてもよい事はチツとも言はず、云はいでも宜い人の蔭口は能くハベル……オツトドッコイ喋る代物だから、今日は何もかも俺の前で白状するのだ。サア、最前の復命を細さに吾前に陳列するのだぞ」

「あんまり馬鹿らしくて、話すだけの實は價値がないのだよ。テールの青二才奴、サガレン王様が數多の軍勢を引率れ、此館に押し寄せ來り給ひし夢を見よつて、龍雲様やケールス姫に慌てて報告しよつたのが元で、あの様な空騒ぎがオツ始まつたのだ。あんまり馬鹿らしいから誰にもこんな事は口外してはならないぞと、ケールス姫様から箝口令を布かれて了つたのだ。然し秘密は何處迄も秘密だから、天機洩らすべからず、此先は諸君の御推量に任すより仕方がないのだ。アハ、ハ、ハ、」

「オイ、俺一人に向つて、諸君とは何だ。チト脱線ぢやないか」

「脱線するのも當然だよ。脱線に始まつて脱線に終つたのだからな。こんな事を

誰が聞いても皆唾然として笑ふにも笑はれない事になる。共鳴するものは森の烏

位なものだ。ケールス姫様があの美しき身體に満艦飾を施して、甲斐々々しくも

薙刀を小脇にかい込み、赤い裾をべらつかせ、白き脛を顯はして……強敵御座ん

なれ……と立現はれ給ひし時の其健氣さ、凜々しさ。一目拜んでも、胸に清涼水

を注入した様な感じがするぢやないか」

「テールの近侍はそんな馬鹿な事を申し上げた以上は、龍雲様の怒りに觸れ、屹

度お手打ちになるだらうなア」

「ならいでかい、毎日日日お手打ちを得意になつて、姫様とケラケラ云ひ乍ら續

行して居られるではないか」

「何と俺は今まで知らなかつた。三十萬年未來の殷の紂王か妲己の様な惡逆無道

を喜んで遊ばすのか。そんな暴君に心を安んじて仕へて居る事はチツと考へねば

なるまいぞ。一つ風向が悪ければ、直にお手打ちとやられちや堪らないからな。

オイ、ベス、それ丈毎日お手打ちをして後は如何片づけて仕舞はれるのだらう。

根つから此門を潜つたお手打者は無い様だがのう

何造作があるものか、皆雪隠へ落して了はれるのだ

雪隠の中は随分澤山な亡者だらうなア

何と云つても、龍雲様と姫様が箸の先にひつかけて、ツルツルと口から飲み込

んで了はれるのだから埒の宜いものだ、近侍の奴等は目を三角にして、「そば」

から指をくはへて見て居るさうだが、何と氣の利かぬ【ウドン】な代物ぢやない

か

何だい、手打とは蕎麥の事だつたか。要らぬ事に強う氣を揉ましよつた、ウ

フ、フ、。然しベスよ、よく考へて見ると世の中は宜い加減なものだな。神さま

神さまと朝から晩まで、下手な調髪師の様に云つて御座つたサガレン王様は、大

自在天様の御保護もなく、あんな惨めな目にお遭ひなされ、今に行方も判然せず、

何處かの山野を落ちぶれて逍遙うて御座るであらうが、それに引換へ、あんな没

義道な事をやつた龍雲が、又ツケリコと王様氣取りになつて、姫様と相對し、朝

から晩まで手打をしたり、手を曳き合うたり、抱擁接吻したり、所在體主靈從の
限りを盡して脂下つて御座るのは、コレは又何とした世の中は矛盾であらうか。
俺やもうこれを思へば此世の中に大自在天もなければ、盤古神王も名のみあつて、
其實なきものと斷定せざるを得なくなつて來たよ。本當に無明暗黒の世の中だ。

如何したらこれが誠の世の中になるだらうかな

「オイ門番の分際としてそんな大それた事を囀つて、若しも龍雲様のお耳に達し
たら如何する積りだい。チツと嗜まないか。何程貴様が心を苛ち、忙殺的足踏み
をして藻搔いた處で、決して其意志の萬分一も貫徹するものでない。門番は門番
らしく上の方の評定をやめて、おとなしく朝から晩まで此處に沈澱するのが、そ
れが第一の安全辨だよ」

「オイ、ベス、お前は龍雲様の將來は如何なると考へるか」

「俺達がそんな事を干渉する丈の權能は無い。兔も角喉元へ這入つて、お鬚の
塵さへ拂つて居れば宜いぢやないか。袖の下からも廻る子は可愛いと云ふことが
あるよ。テールの奴、力も何も無い癖に敏しくく廻りよつて、アレあの通り、龍

雲様の丸で懐刀の様な地位に立ち、羽振りを利用して居よるぢやないか。下らぬ
道徳論に囚へられて理窟を喋つて居ると、彼奴は頭が古い、時代遅れだ、一つ頭
腦のキルクを抜いて古い血をぬき取り、新しく入れ替へて今一度鍛へ上げてやら
ねば、こんな寢息ものは夜店へ出した處で、乞食も買つて呉れないと云つて、親
切に頭腦の解剖をやられて了ふよ。兔も角、人間は自己の生活を安全にするのが
第一だ。道の爲め、君の爲め、世の爲め、人の爲め等と巧い雅號を表に使つて、
何奴も此奴も羊頭を掲げて狗肉を賣つてるのだから、世の中が斯う墮落して了つ
ちや、到底昔氣質の馬鹿正直では、牛馬にだつて噛み殺されて了ふよ。チツとシ
ツカリせないと社會の無用物となつて了はねばならぬからなア。アハ、ハ、ハ、
斯く話す折しも、何處ともなく門前近くに宣傳歌の聲聞え來る。

神が表に現はれて

善惡正邪を立て別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直し聞直し

身の過ちは宣り直す

尊き神の御教

假令天地は變るとも

誠一つの正道は

三口の御世の末迄も

堅磐常磐に變らまじ

一時の欲に踏み迷ひ

焼け朽ち錆びて腐るてふ

形の上の御寶に

天より受けたる分靈と

心を曇らせ身を穢し

知らず知らずに根の國や

底の國へと落ち行きて

吾と吾手に苦しめる

世人の艱みを救はむと

天津御神や國津神

此世を救ふ生神の

教をもちて四方の國

導き諭す宣傳使

此處に現はれ來りけり

勢ひ強き龍雲も

今は櫻の花盛り

常世の春と楽しみて

不義の快樂に耽る折

天津御空は忽ちに

黒雲起りて無殘にも

嵐となりて吹き散らす

明日明後日も來年も

ひやくねんせんねんさきまで
百年千年先迄も
此儘榮え行くべしと

おも 心こころの徒櫻あだみくら
忽ち強き夜嵐たちま つよ よあらしに

うちたたかかれて諸人もろびとに
もて囃されし櫻さへ

あらし 嵐あらしに散りて老若わうじやくの
足に踏まれる世の習ならひ

いんぐわおうはうたちま
因果應報忽ちに
廻る浮世うきよの有様ありさまを

し 知らず知らずに日ひを送おくる
曲津まがつの業わざぞ悲かなしけれ

あゝ惟神々々かむながらかむながら
御靈幸みたまさちはひましまして

ひとひ 一日も早く龍雲りううんが
心に棲すめる曲神まががみを

かみ 神の御水火みいきの彌高いやたかく
拂はらはせ給たまへケールス姫ひめの

きみ 君の命みことの迷まよひをば
科戸しなとの風かぜのいと清きよく

はら 拂はらひ清きよめて舊もとの如ごとく
赤あかき心こころとなさしめよ

あさひ 朝日は照てるとも曇くもるとも
月つきは盈みつとも虧かくるとも

たへ 假令たとへ大地だいちは沈しづむとも
誠まことの力ちからは世よを救すくふ

まこと 誠まことは此世このよの寶たからぞや
悪あくの身魂みたまも一時ひとときは

茂り榮ゆる事あるも 天地の神の敏き目に

如何でか洩れむ枉の罪 亡ぼされむは目の前

早く心を立て直せ さすれば神は汝等が

心に潜む曲鬼を 罰め給ひて天地の

神の御靈になりませる 清き御靈を授けまし

此世の寶となさしめむ 神世の柱となさしめむ

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

と謠ひ終ると共に、早くも歌の主は門前に姿を現はしにけり。

シール、ベスの兩人は酔眼朦朧としながら、此宣傳歌の聲に胸も刺さるる如き

心地して、恐る恐る表門をパツと開き見れば、白髪異様の老人、左手に太き杖を

つき、右手に扇を固く握り、儼然として仁王立ちになつて居る。シールは老人の

異様の姿に驚いて舌を縛らしながら、

「お前は何處の爺さまか知らぬが、今日は此お城の館は公休日だから歸つて下さ

れ。明日は又日曜、明後日は國際日、其翌日は王様のお父様の御命日、其又翌日は御誕生日、其又翌日はお姫様の御誕生日だ。さうして其先は役人共の誕生日や兩親の命日が續くのだから、何卒其日を除いて来て下され。これ丈機嫌好う般若湯に喰ひ酔うて居る處へ、殺風景な獨眼爺さまがやつて来ちや面白くない。何とか龍雲様の悪心を直してやらうと思つて来て呉れたのだらうが到底駄目だ。そんな老爺心は誰も聞くものはないから、可惜口に風引かすよりもトツトと歸つた方が、お前の爲めにお得だ。物言へば唇寒し秋の風、サアサア歸んだり歸んだり「アハ、何と面白い門番もあつたものだ。門番にしてこれ丈けの粹人が居る以上は、随分大奥は百花爛漫たる天國の光景が展開されて居るだらう。和氣霽々として上下一致、其樂しみを俱にする龍雲のやり方、誠に以て感服の至りだ。イヤもう人は斯うなくては叶はぬ。飲めよ騒げよ一寸先は闇よ、闇の後には月が出る。アハ、」

ベス「ヤア此奴ア面白い死損ひだ。あまり大奥が何々だから、一つ龍雲様に申し上げて、城内の空氣を一洗して貰ふ事に取計らふて見ませう。これこれ老爺どの、

其處に暫く待つて居ておくれ」

「アハ、別(べつ)に龍雲(りゅううん)の返答(へんたふ)を待つまでもなく、此(この)獨眼老爺(ひとつめおやぢ)がどしどしと侵入(しんにふ)するであらう」

「アハ、アもしもし、そんな事(こと)をして貰(もら)つてはタ、大變(たいへん)です。此(この)門番(もんばん)も忽(たちま)ち今日(けふ)から足袋屋(たびや)の看板(かんばん)で足上(あしあが)りになつちや堪(たま)りませぬ、愚圖(ぐづ)々々(ぐづ)して居(を)れば首(くび)が飛(と)びます。何卒(どうぞ)大奥(おほおく)のお返事(へんじ)を聞(き)いて來(く)る迄(まで)暫時(ざんじ)の猶豫(いうよ)を願(ねが)ひます。門番(もんばん)は門番(もんばん)としての職務(しよくむ)を固(かた)く守(まも)らねばなりませぬからな」

「アハ、お前達(まへたち)はそれだから現代(げんだい)に容(い)れられないのだ。あまり謹(つつし)んで門番(もんばん)を勤(つと)めるものだから、到頭(たうとう)大將(たいしやう)に……彼奴(あいつ)ア門番(もんばん)には最(も)も適當(てきとう)な人物(じんぶつ)だ……と鑑(かん)定(てい)されて了(しま)ひ、一生(いっしやう)一代(いちだい)卑(いや)しき門番(もんばん)を勤(つと)めて居(を)らねばならないのだ。常世(とこよ)の國(くに)の常世城(とこよじやう)の門番(もんばん)は、失敗(しつぱい)の結果(けつこく)拔擢(はつてき)されて右守(うもり)の神(かみ)に昇進(しやうしん)したことがあるぞよ。此(この)世(よ)の中(なか)にお前(まへ)の樣(やう)な馬鹿(ばか)正直(しやうぢき)な者(もの)が、如何(どう)して生活(せいくわつ)を完全(くわんぜん)に續(つづ)けて行(ゆ)く事(こと)が出來(でき)るか。さてもさても可憐(かはいさう)相(さう)な腰拔男(こしぬけをとこ)だなア。アハ、と肩(かた)を搖(ゆ)つて大(おほ)きく笑(わら)ふ。」

シール「ヤア此奴は中々話せる爺さまだ。一々肯綮に中る名論卓説を吐きよる。オイ、ベス、仲々前途有望だ。早く大奥へ報告して来い。屹度ウラル教だぞ……飲めよ騒げよ一寸先は闇よ……と云つたらう」

ベス「オウさうだ。此奴ア面白い！」

とベスは慌しく大奥さして進み入る。

（大正一一・九・二三 舊八・三 北村隆光録）

第一八章 心の天國（一〇〇六）

アナン、セール、ユーズ、シルレングの四人は、兵を起して夜襲を試み、神地城の奥の間に軽進して、遂に臨時作りの陥穽に墜落し、捉へられて四人は一緒に牢獄に投ぜられ、ヒソビソとサガレン王の身の上に付き、案じ過ぎて嘯いてゐる。アナンは小聲になつて、

「とうとう龍雲の曲神が陥穽に深くおち込み、こんなザマになつて了つた。モウ斯うなる上は何時解放されるかも分りやしないし、活殺の權は龍雲が握つてゐるのだから、俺達一同の生命は、丸で暴風の前の櫻の様なものぢやないか。バラモンの大神さまも餘り聞えぬぢやないか。悪人は自由自在に白晝に横行闊歩し、吾々如き至誠至實の人間は斯の如く慘酷な縲紲の辱を受け、鐵窓の下に晝夜呻吟せなくてはならぬとは、何とした事だらう」

と少しく弱音を吹きかけるを、セールはニヤリと打笑ひ、

「日頃剛膽なアナンにも似ず、何と云ふ弱音を吹くのだい。お前が吾々四人の内では最も先輩だ。そして此中でも智勇兼備の大將と仰がれてゐる身分ぢやないか。今日は又なぜそんな心淋しい事をいつてくれるのだ」

アナン「俺やモウ世の中の無常を感じて來たのだ。何程人間があせつた所で、吉凶禍福は到底吾々の左右し得べきものでない。何事も運命だと諦めるより、最早途はないからかう」

ユーズ「ナーニ、そんな弱々しい事を言ふものでない。お前達は信仰が足りない

のだ。このユーズはナ、斯うして肉體は束縛されてゐるが、肝腎要の御本尊たる
靈魂は、自由自在に快活に宇宙間を逍遙してゐるのだよ。肉體は假令殺し得ると
も、吾々の靈魂迄殺す丈の力はない。靈魂も肉體もすべて殺す力のあるものは只
神さま丈だ。俺達は俗人輩の自由人の目から見た時は、實に窮屈な憐れな境遇に
陥つた者だと思ふだらうが、ユーズに云はしむれば、却て龍雲如き惡魔に媚び諂
らふケリヤ、ハルマ、ベール等の心情が憐れになつて來るワ。龍雲だつてヤツパ
リ同じ事だ。彼奴らは天の牢獄につながれてゐるのだ。名位だとか位置だとか、
財産だとか、下らぬ小利小欲に魂をぬかれ、執着心といふ地獄の鬼に自由自在の
靈魂を束縛されて、呻吟してゐる憐れ至極の人物だ。ベールだつて何時も偉相に
牢番頭になつたと思ひ、横柄面をさらして、日に二三度此窓外をテクつて居よる
が、思つて見れば實に憐れな代物だ。朝から晩まで職務大切だと言つて、行きた
い所へも能う行かず、夜は夜でスベタ嬢の側でロクロク寝る事も出來ず、自分の
子供だつて、碌に顔を見る事は出來ない憐れな代物だよ。朝早く暗い内から吾家
を飛出し、夜遅く吾家へ歸つて行くのだから、子供は何時も熟睡してゐる。それ

だからベールの子供は、キツと父なし子だと思つてゐるに違ひない。思へば思へば
ば憐れ至極な代物ぢやないか。

憂き事の品こそ變れ世の中に

心安くて住む人はなし

と云ふ古歌の通り、誰だつてこんな暗黒無明の現世に安穩に暮してゐる奴ア一人
だつて、半分だつて、ありやアしない。其事を思へば、俺たちは實に幸福な者だ。
衣食住の保證はしてくれるなり、假令毒刃にかかつて斃れた所で、最早使ひ古し
た肉の衣だ。御本尊は如何ともする事は出来ないのだから、鼎鑊甘き事飴の如し
といふ様な氣分だ。何も心配する事はない、一切萬事を神さまの大御心に任して
おきさへすれば極めて安心だ。過去を悔むも最早詮なし。未來を案じて取越苦勞
をやつて見た所で、屁の突張りにもなるものでない。只今といふ此瞬間こそ、吾々
の自由意志を發揮し樂む所の權能を與へられたる貴重な時間だ。刹那々に樂ん

で行きさへすれば、刹那は積んで一時となり、時は積んで一日となり、一月となり、一年となり、十年百年千年万年となるのだ……大神の恵の露にうるほふて、今日も喜び昨日も明日も喜びに充つ……といふ様な心の持様一つで、結構な世の中と忽ち立直つて了ふのだ。ア、有難い有難い、こんな安樂な所が又と世の中にあらうかい」

と元氣な顔してはツしやいである。シルレングは三人の問答を聞いて、片隅に腕を組み何か思案にくれてゐたが、

「イヤもうユーズの説には大賛成だ。俺も俄に氣が晴々として來た。モウ此上は何事も思ふまい」

とシルレングの元氣な詞に、窓の外を忍び足に廻つて來たのは牢番頭の惡黨者のベールである。ベールは、

「オイ、アナン、其他の者共靜に致さぬか。ここを何處と心得てゐると威丈高に呶鳴る。」

ユーズ「なんだ、貴様はつい此間迄此ユーズの下役に使つて居つたベールぢやな

いか。ここを何處と心得とるとは譯の分らぬ質問ぢやないか。餘程良い頓馬ぢやのう。分らな云つて聞かしてやらう。ここは天空快闊として、曇りもなければ汚れもない、悩みもなければ苦みもない神靈界の天國だ。貴様は執着心に手足を縛られ、魂をからまれ、娑婆といふ牢獄に呻吟してゐる氣の利かない馬鹿者だろ。さやうな馬鹿者が此天國淨土が見えないのも強ち無理もない。咎め立てをするのも可哀相だから許してやるが、以後はキツと心得て、只今の如き馬鹿げた事は言はぬがよからうぞ」

ベールは聲を尖らせ、

「汝科人の分際として、吾に向つて其暴言、聞捨にならぬぞ。ヨシ待て、今に懲してくれむ。其時は吠面かわかぬやうに致せ。水責火ぜめはまだ愚か、槍の穂先で勦殺にしてやるから、其積りで楽しんで待つて居れ、テモさても憐れな者だワイ、イツヒ、ハ、ハ、」

「何を吐すのだ。主客轉倒も實に甚だしいわい。貴様こそ天地容れざる惡逆無道の科人だ。吾々は至誠忠良の士だ。決して天地に對し一點の恥づる所もなき志士

だ。汝科人の身を以て至誠忠實の吾ユーズに對し、暴言を吐くとは聞き捨てならぬ。今に覺えて居れ。地震雷火事爺、火の雨ふらしてこらしめてくれむに。テもいぢらしい者だのう、イツヒ、ゝ、ゝ、

「コリヤ、ユーズ、貴様は發狂致したのか。牢獄へ捕へられながら、自分の境遇も辨へず、ズケズケと憎まれ口を叩く大馬鹿者、貴様の不利益になることを知らぬか」

「アハ、ゝ、ゝ、ヤツパリ貴様は此世が戀しいと見えるな。汝の小さき汚き心を以て、吾々の英雄の心事を忖度せむとするは、實に僭越も甚だしい。其方こそ社會亡者の發狂人だ。チツと良心に尋ねて見よ。どちらが氣違か、いかな頑冥な貴様でも分るであらう。悪人の蔓る世の中、貴様たちの惡の眼より吾々を見れば、氣違と見えるであらう。なる程吾々は氣違には間違ない、併し乍ら氣の違ひ方が違つて居るのだ。氣違といつても決して貴様のやうな發狂者ではないから、混線せないやうに耳を浚へて聞くがよい。今の極惡世界の人間共の氣に合ふやうにしようと思へば至粹至純の誠の神の御心に叶はない。俗惡世界の大氣違共の心に合ふ

やうにすれば、大神様の御心に叶はないのだ。人生僅か一百年、永い歳月に比ぶれば、夢の断片みたやうなものだ。神より賜はつた吾々の生命は、萬劫末代生き通した。僅か一百年の肉體を樂まむとして、永遠無窮の生命に罪を殘すやうな馬鹿な事は致さない。そこが吾々と貴様等と大に氣の違つてる點だ。貴様もよい加減に改心を致して、現代に於ける最善と思ふ事を行つて、俺たちの様にこんな天國へ這入つて來い。昔のよしみで忠告してやる。オツホン」

「益々以て譯の分らぬ事を云ふ奴だ。實の所は今日龍雲殿より、四人の奴を放免せよと命令が下つたのだが、左様なへらず口を叩く奴は、到底改悛の状が現はれてゐないから、無制限にここに繋留しておく。サア、アナン、セール、シルレングの三人、お許しが出たから、早くここを逃れるがよい。誰だつて何時迄もこんな窮屈な所に居たい事はあるまい。サア早く此戸をあけるから出たがよからう」
と錠をガタリと外し、入口の鐵戸をパツと開く。
アナン「龍雲の赦しならば決して俺は出ないよ。あんな奴が許すといふ資格がどこにあるか。畏くもサガレン王さまに對し、刃向ひまつつた大罪人、吾々如き誠

身はたとへ牢獄の中にひそむとも

心は神の神苑に遊べり

欲と云ふ百の魔神に捉へられ

苦むべールの憐れなるかも

曇りたる曲のべールの心には

牢獄を地獄と思ひそめけむ

日月の光かがやく心には

鬼もなければ牢獄もなし

六尺の肉の宮をば縛るとも

心は高く大空に舞ふ

ヤイ、べール早く心を立直し

牢獄に來れ誠を聞かさむ

われよりも貴様の方が辛からう

夜晝寝ずにテクテクとして

ユーズは又中より、

ユーズこそ神の誠の宮代よ

鬼や悪魔も襲ひ得ざれば

龍雲やケールス姫の曲業を

いかでか神は憎まざらまし

憎むより神は憐れと思すらむ

自らおつる地獄餓鬼道

サガレンの王の命は惟神

神の守りに安く居まさむ

今暫し暴風吹けどもやがて又

風凪ぎ渡り榮えにあふべし

龍巻の雲の勢強くとも

科戸の風に吹かれ散るべし

セールは又歌ふ。

大奥おほおくの床ゆかまで穿うがちブルブルと

震ふるひてくらす奴やつぞ可笑をかしき

誠まことさへあらば天地てんちに何者なにものも

恐おそるべき者ものあらざらましを

君きみをすて誠まことをすてて龍雲りゅううんが

やがて吾身わがみの生命いのちを捨すつべし

アナンは又歌ふ。

アナンをば座敷ざしきの中なかに放ほり置おいて

人ひとを地底ちそこへおとし穴あな掘ほる

ケールスの姫ひめの命みことの陷おとし棄あな

知らず知らずに龍雲落ちける

待て暫し神が表に現はれて

曲津の首を薙ぎ放りまさむ

龍雲やべールが歎きて頼むとも

いかでか出でむこれの牢獄を

面白く牢獄の中に微笑みて

曲津の手振眺めくらさむ

べールは途方に暮れ、自分も亦四人の詞に何時とはなしに釣り込まれて、知らぬ間に牢獄の中に這入つて了ひ、中からピシヤリと戸を閉めた途端に、錠はガタリとおりた。肝腎の鍵は窓の外に黙つて横たはつてゐる。ユーズ「オイ、べール、とうとう貴様も改心しよつたな。サアもう斯うなる以上は、活殺の権はユーズ外三人が握つて居るのだ。どうだ、俺の言靈には降服致し

たか

ベールは初めて気が付き、

「ヤア此奴ア失敗った！ 取返しのならぬ事が出来たわい」

アナン「マアさうお急きになるにも及びませぬ。折角はるばると御訪問下さいまして、吾々一同は實に感謝に堪へませぬ。お茶なつと差上げたきは山々なれど、御存じの通りお館が貧乏ですから、碌なお茶も御座いませぬ。ここにアナンの魔法瓶が御座います。これなら少しは温かいでせうから、御遠慮なうおあがり下さい」

と前をまくらうとする。ベールは慌てて首をふり、両手を合せながら、「イヤもう、お構ひ下さいませぬ。茶は實は飲まないのです。盤古神王さまに茶断ちを致しましたから……」

ユーズ「何は免もあれ、ユーズの案内が一人殖ゑたのだから、お目出度い。どうぞ御入魂に願ひますよ。同じ天地の神さまの分霊、四海同胞だから、互に相親しみ相愛し、この天國の春を樂む事に致しませうかい」

セール「折角のベールさまの御入來だから、何ぞお愛想に上げたいものだ。オウ

幸ひ、此處にセール親讓りの蝶螺の壺焼がある。之を進ぜうかい」

と目配せした。四人は一時に握り拳を固めながら、

「惡逆無道の龍雲に與するべし、思ひ知れよ！」

と四方より拳骨の雨を叩きつけられ、べしは力限りの悲鳴をあげて救ひを呼ぶ。此聲を聞き付けて一人の牢番はあわただしく駆けつけ来る。

(大正一一・九・二三 舊八・三 松村眞澄録)

第十九章 紅蓮の舌(一〇〇七)

門番のべしは再び龍雲、ケールス姫の居間へ慌しく伺候し、恭しく兩手をつか

へ、

「恐れながら申上げます。只今門前に現はれました、白髪異様の老人が、老人か

と思へば平たくなつたり、長くなつたり、顔が四つも五つもあり、身體が背繼ぎ

したやうに見えたり、眼も鼻も随分澤山持った化物が現はれました。何と云つても頑張つて歸らうとは致しませぬ。到底吾々門番の非力では追拂ふ譯には行きませぬ。併し乍ら、飲めよ騒げよ一寸先は暗よ、暗の後は月が出る……と、へへへ、随分氣に入る事を云ひます。屹度あれはウラル教の神様が化けて御座つたのかも知れませぬ。善とも悪とも、たとへ方なきもので御座います」

龍雲はベスの言葉を聞き、暫く首を傾げて居たが、俄に口を尖らして、

「ベス、お前は大變に酩酊して居るではないか。目がチラチラして居るぞ。お前の酔うた眼で見たものだから、さう種々と姿が變つて見えたのであらう。決して化物ではあるまい」

「ハイ、些し許り聞き召したもので御座いますから、眼の調子が狂つても居りませうが、何は免もあれ、一風變つた人物で御座います。何卒お目通りをお許しになつて篤とお調べ下さいませ」

ケールス姫は傍より靜な聲にて、

「何は免もあれ、其男を此處へ案内して來たがよからう」

「ハイ、畏まりました」

とベスは座を立ち、ヒヨロリヒヨロリと廊下を危く踏み鳴らしながら表へ出て行く。暫くありて以前のベスは白髪の老人を導き、龍雲の前に恐る恐る現はれ、唯今申上げました化物とは、これで御座います。どうぞ篤とお調べの上、ウル教の神力をもつてお退治下さいませ。彼様なものが徘徊致すと吾々は門番も碌に勤まりませぬ」

龍雲「オイ、ベス、餘計な事を申すな。早く立ち去れ！」

ベス「ハイ、オイ化州、確りやらないと駄目だぞ」

と口汚く罵りながら此場を立ち去つた。

老人「神地の都の城主、サガレン王の後を襲うて政治を執る龍雲とは其方の事か？」

と雷の如き大聲を發して問ひかける。どこともなく底力のある聲に、遠の龍雲も面喰つて後へ二足三足タチタチと退き、

「ハイ、仰せの通り龍雲は私で御座る。貴方は此龍雲に對し御訪問下さつたのは、

如何なる御用で御座るか。さうして其御姓名は何と申さるるか、お聞かせを願ひ度い」

「吾こそは三五教の宣傳使、天の岩戸開きの神業に仕へたる天の目一つの神で御座る。汝に對し訓誡を與へ度き事あれば、老驅ををかし遙々と此處に參りしものぞ」

龍雲は三五教と聞いて、些しく顔色を變じたが、何となく犯し難き其威貌に度肝をぬかれ、

「音に聞えし天の目一つの神様で御座いましたか。これはこれは遠路の處、ようこそ御入來下さいました。何卒々々至らぬ龍雲、宜敷く御指導を願ひ申す」

「アハ、ハ、ハ、随分其方も外交的手腕は立派なものだ、餘程現代化して御座ると見える。併し乍ら龍雲殿にお尋ね致したい事が御座る。其尋ねたいと申すのは外

でもない、サガレン王の今日の境遇だ。苟くもバラモン教の教司、一國の王者の身をもつて、山野に流浪し給ふやうになつたのは、何かの理由がなくては叶はぬ。

此經緯を詳細に吾前に告白されたい」

「ハイ、これには種々の譯も御座いまするが、あまり込み入つての御干渉は迷惑千萬、何卒此話は打ち切つて、三五教の教理を御教示あらむ事を希望致します」

「ハ、ハ、ハ、ハ、吾々の干渉地帯でないから問うて呉れなと云はるるのかな。イヤ尤もだ、秘密の暴露を恐るるは人情の常だ。たつて辭退せらるるものを無理には強要致さぬ。併し乍らよく考へて御覽なされ！もしも此處に或王者があり、其王者には后があつて、夫婦相並び神を敬ひ政治をとり、圓滿に民を治めて居る。其處へ何處ともなく一人の妖僧が現はれ來たつて、其后进行を誑惑し、變つた信仰を強ひ、漸次にして其後の心を奪ひ、遂には畏れ多くも夫たり國王たる神司を、妖僧と共に腹を合して放逐し、後に晏然として其后进行を妻となし、自らは王者然として控へて居る惡逆無道の怪物ありとすれば、龍雲殿は如何思召さるるか。神の教を宣傳する宣傳使として是が默過する事が出來ようか、如何で御座るアハ、ハ、ハ。之は要するに譬で御座れば、決してお氣にさへられな。龍雲殿の明敏なる頭腦によつて、其解決を與へて貰ひたいのだ」

「ハイ、成る程六かしい問題で御座る」

「六ヶ敷き問題は問題だ。併し如何解決をつけたらよいかと聞いて居るのだ。イヤそこに俯むいて居るのはケールス姫殿で御座らう。其方の意見を承はらう」

「ハイ誠に恐れ入った次第で御座います。何ともお答への致しやうが御座いませぬ。貴方の御判断にお任せ申すより、もはや手段は御座いませぬ」

「今の中に心を改め、其方兩人が、計略をもつて逐出したるサガレン王を探ね出し、茨の鞭を負うて王に心の底より謝罪をなし、其罪を清めなければ、天罰立所に至り、地震雷火の雨の誠めに遇ふは最早眼前に迫つて居る。兩人早く決心をなさらぬと、其方が身邊の危険は刻々に迫りつつありますぞ。いらざる目一つの神が差出口とけなさるるならばそれ迄だ。目一つの神は此上兩人に對して忠告すべき事はない。よく良心に尋ねて、最善の方法を取られたがよからう。縁あらば又もやお目にかからうも知れない。左様なら……」

と云ふより早く、コツンコツンと廊下に杖の音を響かせ、表を指して歸り行く。

龍雲、ケールス姫は、目一つの神の後姿を見送り、茫然自失爲す處を知らず、顔色忽ち蒼白に變じ、太き溜息を吐いて居る。

あななひけう
三五教に仕へたる

きたてるひこ
北光彦の宣傳使

あめ
天の目一つ神司

まつら
松浦の郷を後にして

かうもりがは
河森河を遡り

かうぢ
神地の都に現はれて

こころきたな
心汚き龍雲や

ひめ
ケールス姫に打向ひ

あくぎやくむだう
悪逆無道の行動を

くわいこ
悔悟せしめて天國の

その
園に導き助けむと

おい
老の歩みもトボトボと

おそ
恐れげもなく進み來る

もんぼん
門番ベスに伴はれ

おくでんふか
奥殿深く進み入り

りううん
龍雲ケールス兩人に

むか
向つて眞理を説き諭し

その
其改心を迫りおき

いとう
悠々として長廊下

つゑ
コツリコツリと杖の音

しだいしだい
次第々々に遠ざかり

いつ
何時の間にやら崇高な

かみ
神の姿は消えにける

あゝ
あゝ惟神々々

みたまさち
御靈幸はひましませよ

わう
サガレン王を初めとし

まつろ
服ひまつる忠誠の

かみ
神の司や信人を

誠まことの道みちにまつろひて 天授てんじゆの眞理しんりを悟さとらしめ

八十やその曲津まがつに疲つかれたる 龍雲りゆうんケールス兩人りやうにんを

尊たふとき神かみの正道まさみちに 眼めを醒さまさしめ朝夕あさゆふに

神かみの教をしへにまつろはせ 百ももの司つかさの御魂みたままで

洗あらひやらむと雄々ををしくも 守まもりも固かたき此城このしろに

單身たんしん進すすみ入いりにける 神かみの御靈みたまの幸さちはひて

醜しこの曲津まがつも影かげ隠かくし 天津御神あまつみかみのたまひたる

元もとつみたまに立たち歸かへり 神人しんじん和合わがふの天國てんごくを

神地かうぢの城しろの棟高むねたかく 照てらさせたまへ惟神かむながら

神かみのみ前まへに願ねぎまつる。

二人ふたりは目ま一つの神かみの立たち去さりし後あとにて、又またもやひそひそと話はなしに耽ふけり居ゐる。

モシ龍雲りゆうんさま、今見いまみえた目ま一つの神様かみさまは三五教あななひけうの宣傳使せんでんしだと云いはれましたが、

何なんとマア御神徳ごしんとくの高たかい方かたでせう。お顔かほは目めつかちで、何なんとはなしに見劣みおとりがする

やうですが、どこともなしに犯すべからざる威嚴が備はつて居ました。かういふと濟みませぬが、常々神徳高き龍雲様だと思つて居ましたが、傍に寄せるとまるで比べものにはなりません。象の傍によつた猫のような氣分が致しましたワ」

「是はしたり、餘りと云へば餘りの無禮ではないか。吾々を猫にたとへるとは不埒千萬、それ程此龍雲が小さきものに見えるならば、なぜ其方は目一つの神を引き止めて夫となし、此龍雲を放逐せないのか」

と聲を尖らせてゐる。

「何も貴方を疎外したのぢや御座いませぬ。目一つの神様の御神徳を讃へたので御座いますワ。貴方は見れば見る程、交際へばつきあふ程小さくなり汚くなり、弱くならつしやるやうですワ。こんな事なら、なぜ神徳高きサガレン王に背いたであらうかと、今更悔悟の念に堪へませぬ。此館は妾が住家、今はいい氣になつて王者然と構へて居られますが、實際を云へば私の館、お氣に召さねば何時なりと歸つて下さい」

「これケールス姫殿、其方は狂氣したのか、其言靈は何で御座る」

「ハイ、一たん悪魔に誑惑され、大蛇のかかった龍雲様に従つて居ましたが、今漸く病氣全快しまして正氣に立ち歸りました。もはや正氣に立ち歸つた上は、今迄の罪が恐ろしく、又龍雲の惡心が憎らしくなつて來ましたよ」

「心機一轉も甚だしいぢやないか。これケールス姫、よい加減に此龍雲を擲掬つて置くがよい。下らぬ事を云つてさう氣を揉ますものではないよ」

「妾はもはや此世に生きて居る事は出來ませぬ。大罪を犯した者で御座いますから、潔く自殺を致します。假令三日でも五日でも、縁あればこそ不義の契を結んだ妾、臨終の際にのぞんで一口忠告を致して置かねばなりません。惡は何時迄も續くものではありません。貴方はこれから男らしく割腹して、サガレン王様に罪を謝すか、但は世捨人になつて再び難業苦業をなし誠の神の司とおなりなさるか、それは貴方の自由意志に任しませうが、たとへ如何なる事があつても、惡を企んだり策略を廻らしたり、今迄のやうに嘘をいつてはなりません。これが私の龍雲に對する忠告だ。此世に生きて何の詮もなし、左様ならば龍雲殿、お別れ致しますぞや」

と云ふより早く、懷中より懷劍をとり出し、今や喉に「ガバ」と許り突き立てむとす。龍雲は慌てて姫の手を確りと押へ、聲を慄はせて、

「ケールス姫殿、暫し待たれよ。短氣は損氣、死なうと思へばいつでも死ねる。此龍雲も唯今限り改心を致すから、どうぞ死ぬ事だけは止めて下さい。可惜神地の城の名花を散らすは誠に惜しい、先づ思ひ止まつて下され。」
と姫の手を力限りに握りしめて居る。

「イエイエ、何と云つて下さつても罪多き此體、死を選ぶより外に道はありません。ぬ。どうぞ其手を放して下さい！」

と身を藻掻く。其騒動を聞きつけて走り入つたる右守の神のハルマは、此體を見て打驚き、

「龍雲様、姫様、尊き御身を持ちながら、何の不自由もなきに夫婦喧嘩をなさるとは、盤古神王様に對し畏れ多いでは御座らぬか。苟くも王者の身をもつて、俗人輩のなすが如き刃物三昧とは何事で御座るか。」

ケールス姫は泣き聲を絞りながら、

「ヤア其方は右守の神のハルマであらう。吾は決して龍雲殿と争ひはして居ない。餘りの罪の恐ろしさに、自害をしようとして居るのだ。それを龍雲殿が執念深くも止めようとなさるのだから、どうぞ其方、私の頼みだ、龍雲殿の手を放させてお呉れ！」

「これこれ姫様、自殺は罪惡中の大罪惡と申すぢやありませんか。如何なる事情かは存じませぬが、私が此處へ現はれた以上は、決して死なしは致しませぬ」と云ひながら、強力に任せて姫の手より劍を奪ひ、手早く窓を開けて眼下の谷川へ投げ捨つれば、龍雲はやれ安心と吐息を吐く時しも、慌だしく此場に馳來るテールは兩手を仕へ、

「モシモシ、此城内に火災起り、非常な勢で火は風に煽られ、火炎の舌は瞬間に城の大部分を舐盡し、早くも此館に延焼しました。サア早く、立退きを願ひます」

と云ふ間もあらず、黒煙濛々として四邊を包み、龍雲、ケールス姫、ハルマは、見る見る黒煙に包まれにける。

(大正一一・九・二三 舊八・三 加藤明子録)

第四篇 言靈神軍

第二〇章 岩窟の邂逅(一〇〇八)

松浦の里の天然の岩窟の前に聞えて来た女の宣傳歌。

神が表に現はれて

善と悪とを立て別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ

身の過ちは宣り直す
あやまのなほ

抑も起りを尋ぬれば
おもおこたつ

國治立大御神
くにほるたちのおほみかみ

嚴と瑞との二柱
いづみづ ふたはしら

神の命の枉業に
かみ みこと まがわざ

根底の國に下りまし
ねそこ くにくだ

下津岩根の底深く
したついはねそこふか

惠ませ給ふ御心は
めぐたま みこころ

龍宮海より尚深し
りうぐうかい なほふか

救ひの神と現れまして
すくかみ あ

埴安彦や埴安姫の
はにやすひこ はにやすひめ

神素盞鳴大神の
かむすさのをのおほかみ

至嚴至重の神界の
しげんしちやう しんかい

天地四方の神人の
あめつちよも かみびと

三五教の神の道
あななひけう かみのみち

國の御祖と現れませる
くに みおや あ

豊國姫大御神
とよくにひめのおほみかみ

鹽長彦や大國彦の
しほながひこ おほくにひこ

虐げられて一度は
しひた ひとたび

百の艱みを受けさせて
もも なや う

隠れ給ひつ神人を
かくたま かみびと

天津空より尚高く
あまつそら なほたか

野立の彦や野立姫
のだち ひこ のだちひめ

嚴の靈を分け給ひ
いづ みたま わ

神の命の分靈
かみ みこと わけみたま

瑞の御靈と諸共に
みづ みたま もろとも

清き大智を世に照らし
きよ だいち よ

身魂を四方に生ませつつ
みたま よも う

をしへつかさ 在ちこち
教司を遠近に 配らせ給ふ尊さよ

かむすさのをのおほかみ
神素盞鳴大神の 御子と生れし君子われは

ちち みこと かしこ
父の御言を畏みて メソポタミヤの顯恩郷

けう かむやかた
バラモン教の神館 鬼雲彦の側近く

つか まつ あななひ
仕へ奉りて三五の 清き教を傳へむと

おも つか ま
思ひそめしも束の間の 今は夢とぞなりにけり

われら おとどい はちにん
吾等姉妹八人は 顯恩郷を後にして

おのも おのも
各自々に宣傳歌 謠ひて進む折柄に

けう くぎひこ
バラモン教の釘彦が 一派のものに捕へられ

かな おとどい ごにんづ
悲しや姉妹五人連れ おのもおのものに棚なしの

やぶ をぶね の
破れ小船に乗せられて 波のまにまに捨てられぬ

かみ めぐ う なが
神の恵みを受け乍ら 千波萬波を乗り越えて

おほわだなか たたよ
大海中に漂へる 眺めも清きシ口の島

みさき あんちやく
ドンドラ岬に安着し 夜を日についで大神の

大道おほぢを傳つたへ宣のべながら 漸やうやく此處ここに來きたりけり

あゝ惟かむながらかむながら神々々 御靈みたまさち幸はひましまして

小絲こいとの館やかたにあれませる シロの神島みしまの神國かみくにに

サガレン王わうの神司かむつかさ タールチン司つかさやキングス姫ひめの

貴うづの命みことを始めはじとし テーリス、エームス、ゼム、エール

其外そのほか百ももの司達つかさたち 惠めぐみの露つゆに霑うるほひて

心こころ汚きたなき龍雲りううんが 醜しこの企たくみを根底ねそこより

顛覆てんぷくさせて元もとの如ごと 王位わうゐに復ふくさせ給たまへかし

さはさりながら大神おほかみの 仁慈無限じんじむげんの御心みこころは

決けつして人ひとをば傷きずつけず 生命いのちをとらず麻柱あななひの

仁慈無限じんじむげんの正道まさみちを 心こころの空そらに照てり明あかし

救すくひ助たすくる思召おぼしめし 必かならず大事だいじを過あやまらず

瑞みづの御靈みたまの貴うづの子こと 生うまれ出いでたる君子きみこわれ

御供みともに仕つかふる清子きよこ姫ひめ 只今ただいま此處ここに現あらはれて

バラモン教の人々に 誠の心を打ち明けて
進め参らす言靈を 完全に委曲に聞き召せ
朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも
龍雲如何に強くとも 誠の神の現はれて
誠一つの言靈を 射放ち給へば曲神も
忽ち神威に相うたれ 雲を霞と消え失せむ
あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

と足拍子を取つて勇ましく謠ひ乍ら館の前に進み来る。

エームスは知らず知らずに此宣傳歌に引きつけられ、二人の宣傳使の前に進み
寄り丁寧に禮をなせば二人も恭しく答禮し、

「妾は三五教の若き女の宣傳使で御座います。今此處に伴つて居りますのは清子
姫と云ふこれも宣傳使で御座います。妾は或事情の爲め、鬼雲彦様の部下に捕へ
られ、此處まで流されて漸く漂着して來た者で御座います。サガレン王様と申す

のは、大國別神様の御子息國別彦様では御座いますまいか。お差支なくば、何卒拜顔が致したいもので御座います」

「ハイ左様ならば暫くお待ち下さいませ。エームスこれより奥へ参り伺つて來ます。何卒それ迄お腰を卸してお休みを願ひます」

「早速の御承知、有難うムいます。左様なれば清子姫様、暫く休息さして頂きませう」

暫くあつてエームスは恭しく出で來り、君子姫、清子姫の先に立ち、サガレン王の潛みたる岩窟に進み入る。サガレン王は君子姫の姿を見るより今更の如く打ち驚きぬ。其故はメソポタミヤの顯恩郷に於て常に顔を合して居た爲に、見覺えが何處ともなくあつたからである。サガレン王は歌ふ。

「思へば高し神の恩 計り知られぬ顯恩の

郷に潛みてバラモンの 教をきはむる折柄に

神素盞鳴大神の 御子と生れし君子姫

朝あさな夕ゆふなに健まめやかに
鬼雲彦おにくもひこの側そば近く

仕つかへ給たまひし神姿みすがたを
それとはなしに朝あさ夕ゆふに

眺ながめて暮くらし居ゐたりける
吾われは大國別神おほくにわけのかみ

をしへつかさ
教司をしへつかさの貴うづの御子みこ
國別彦命くにわけひこのみことなり

鬼雲彦おにくもひこが暴虐ぼうぎやくの
醜しこの魔風まかせに煽あふられて

已やむなくお城しろを脱出だつしゅつし
エデンの川かはを打渡うちわたり

フサの海原横斷うなばらわうだんし
波なみに漂ただよひ印度洋いんどやう

千波萬波せんばばんばをかき分わけて
漸やうやくシロの島影しまかげを

認みとめし時ときの嬉うれしさよ
神かみの恵めぐみに抱いだかれて

漸やうやく神地かうぢの都路みやこぢに
進すすみて教をしへを宣のりつるが

心正こころただしき國人くにびとは
一ひとり人りのこ残のこらず吾道わがみちに

服まつろひ來きたりて神館かむやかた
瞬またたく間うちに建たて終をはり

要害堅固えうがいけんこの絶勝ぜつしょうをば
選えらみて此處ここに城造しろつくり

吾われは推おされてシロの島しま
神地かうぢの都みやこの王わうとなり

神を敬ひ民を撫で
世は平けく安らけく

治まりかへつて四海波
静にそよぐ折もあれ

岩井の里の酋長が
娘と生れしケールス姫の

君の命を發見し
愈此處に妻となし

嚴と瑞とは相並び
顯幽一致の政體を

開く折しも腹黒き
醜の曲津の龍雲が

何處ともなく入り來り
忽ち館を蹂躪し

惡逆日々に募りつつ
遂には吾を追ひ出し

今や暴威を揮ひつつ
世を亂すこそ悲しけれ

あゝ惟神々々
神の御靈の幸はひて

三五教の宣傳使
天の目一つ神様は

此處に現はれ來りまし
顯幽一致の眞諦を

完美に委曲に説き給ひ
喜ぶ間もなく素盞鳴の

神の命の御裔なる
汝の命は今此處に

現はれ給ひし雄々しさよ 君子の姫よ清子姫

吾は尊きバラモンの 教を奉ずる身なれども

皇大神の御心に もとより變りはあるまじく

思へば思へば有難し 汝と吾とは今よりは

心を協せ力をば 一つになしてシロの島

四方の國人悉く 尊き神の御道に

服へ和し龍雲が 心に潜む曲神を

千里の外に追ひ拂ひ 迷ひきつたるケールス姫の

君の命を善道に 導き救ひ麻柱の

誠の道を永久に 經と緯との機を織り

治めて行かむ惟神 神に誓ひて眞心を

ここに披瀝し奉る あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と謠へば、君子姫はこれに答へて、

あゝ惟神々々 尊き神の御裔と

生れ出でませる國別彦の 神の命の言靈よ

天教山に現れませる 日の出神や木花の

咲耶の姫の神言もて 父大神に従ひて

三五教を天ヶ下 豊葦原の國々に

開き傳ふる宣傳使 吾は君子の姫なるぞ

父の御言を畏みて バラモン教の大棟梁

鬼雲彦の側近く 仕へまつりて三五の

誠の道を諭さむと 心を盡し身を竭し

千々に説けども諭せども 靈の曇りし神司

千言萬語の言の葉も 豆腐に銚糠に釘

寄り處なき悲しさに あらぬ月日を送る内

太玉神ふとたまがみの現あらはれて 巖いづの言靈ことたまう打ち出いだし
雄健をたけび給たまへば鬼雲彦おにくもひこの 神かみの司つかさは逸いちはや早く
見みるも恐おそろし其姿そのすがた 大蛇をろちとなりて黒雲くろくもの
中なかに姿すがたを隠かくしける 妾姉妹わらはおとどいはちにん八人はちにんは
右みぎや左ひだりに相別あひわかれ 流れも清きよきエデン川がは
後あとに見捨みすててエルサレム フサの國くにをば遠近をちこちと
彷徨さまよひ巡めぐりて御教みをしへを 傳つたふる折をりしもバラモンの
神かみの司つかさの釘彦くぎひこが 手てした下の者ものに捕とらへられ
無残むざんや五人ごにんの姉妹おとどいは 見みるも危あやふき捨すてをぶね
艫ろかいもなしに海原うなばらに つき出いだされし恐おそろしさ
神かみを力ちからに三五あななひの 誠まことを杖つゑに兩人りやうにんは
潮しほの八百路やほぢを打渡うちわたり 波なみのまにまに漂ただよひて
大海おほわたなか中に浮うかびたる 木草きぐさも茂しげるシロの島しま
ドンドラ岬みさきに上陸じやうりくし 夜よを日ひに次ついで今此處いまここに

サガレン王が行末を 救はむ爲めに來りけり

人は神の子神の宮 慈愛の深き大神の

其懐に抱かれて 誠一つに進みなば

如何なる曲の猛ぶとも 何か恐れむ神心

いざ之よりは汝が命 バラモン教や三五の

神の教と云ふ様な 小なき隔てを撤回し

互に手を執り助け合ひ 此シ口島に蟠まる

八岐大蛇や醜狐 曲鬼どもを言向けて

昔の儘の神國に 完美に委曲に樹て直し

ミロクの御世を永久に 開き仕へむ惟神

神の御前に君子姫 謹み敬ひ祈ぎ奉る

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ』

と謠ひ終り、茲にサガレン王、君子姫は胸襟を開いて久闊を敘し、相提携して、

龍雲りゅうん始めはじケールス姫ひめ其他そのたの神司かむつかさ達たちに憑依ひょういせる曲津神まがつかみを打拂うちはらひ、本然ほんぜんの心こころに立たち歸かへらしめ、再びふたたびシロの島しまの神地かうぢの都みやこをして至治しづたい太平たいへいの樂園らくえんと復かへすべく、王わうを先頭せんとうにタールチン、キングス姫ひめ、テーリス、エームス其他そのたの幹部かんぶを始はじめ、數多あまたの至誠しせいの男女だんぢよを引率いんそつし、旗鼓堂きこだうだう々として宣傳歌せんでんかを歌うたひながら、馬うまに跨またがり都みやこを指さして進すすみ行ゆく。惟神靈かむながらたま幸倍ちはへ坐世ませ。

(大正一一・九・二三 舊八・三 北村隆光録)

第二章 火の洗禮ひのせんれい〔一〇〇九〕

サガレン王わうに眞心まごころを 捧ささげて仕つかへまつりたる
誠忠せいちう無比むひの神司かむつかさ アナン、セールを始はじめとし
ユーズの司つかさシルレンゲ 數多あまたの同志どうしと諸共もろともに

義勇の軍を召集し

夜陰に乗じて龍雲が

秘む神地の城塞に

破竹の勢凄じく

侵入するや龍雲が

深き企みの陥穽

ありとも知らず軽進し

思はぬ奇禍に陥りて

高手や小手に縛せられ

無残や四人は牢獄に

投入れられて朝夕に

サガレン王の身の上を

案じ煩ひまちまちの

噂をなして日を送る

時しもあれや曲津神

牢番頭のべール奴が

曲津の神の命令を

固く守りて朝夕に

四人の司の身邊を

監視するこそ恐ろしき

如何はしけむ龍雲は

俄に心機一轉し

四人の司を牢獄より

一時も早く解放し

救ひ出せよと下知すれば

醜のべールはブツブツと

小言タラタラ面をば

南瓜の如くふくらせて

スタスタ来る牢の前

いろいゝ雑多と押問答

四人は一同口揃へ

龍雲如き悪神の

指圖をうけて吾々は

いかで此場を動かむや

それより汝を初めとし

曲津の憑りし龍雲が

一時も早く悔悟して

誠の道を表白し

尻尾を下げて吾前に

来るにあらずば何時迄も

出獄ばかりは拒絶すと

やり返したる健げさよ

ベール司は怪しがり

固き鐵扉を引あけて

思はず知らず中に入り

一言二言言靈の

征矢を放ちし間もあらず

無残やベールはアナン等が

同士に拳固の雨霰

所構はず打撲され

悲鳴をあげて救ひをば

求むる折しも牢獄を

見まはり來りし獄卒の

敏くも耳に轟きて

靴音高く驅來る

ヤットは驚きベールをば

救ひ出さむと戸を開き

一足二足進み入り

あたり見まはす折もあれ

アナン、セールやシルレング

ユーズの四人は二人をば

高手や小手に縛しめて

悠々牢獄を立出でぬ

二人は齒がみをなしながら

目を剥き口を尖らして

曲者今や逃れたり

數多の獄卒逸早く

彼等四人を縛せよと

聲を限りに呼ばはれど

何の響もなくばかり

吠え面かわくを一同は

尻目にかけて嘲笑ひ

悪の報いは此通り

早く改心現はせと

言葉を残してどことなく

思ひ思ひに城内の

あなたこなたに隠れける

俄に吹來る山嵐

大木を倒し枝を裂き

無残に家屋を滅茶々に

吹飛ばすこそ物凄き

風の力に城内の

建築物の中よりは

炎々濛々噴き出す

煙けむりの中なかよりペロペロと
紅蓮ぐれんの舌したをばはき出だして
瞬またたく間うちに館やかたをば
將棋倒しやうぎだふしに嘗なめつくす
數多あまたの男女なんによは右左みぎひだり
うろたへ廻まはりて泣なき叫さけぶ
阿鼻あびけうくわん叫喚ごうくわんの地獄道ぢごくだう
見みるも無殘むざんの次第しだいなり

ケールス姫ひめや龍雲りゅううんは
火焰くわえんの舌したに包つつまれて
息いきもふさがり闇雲やみくもに
うろたへ騒さわぎ息いきの根ねの
今いまや切きれむとする所ところ
忽たちまち聞きゆる宣傳歌せんでんか
ゴウゴウ ガラガラ
バタバタと 館やかたの棟むねのおつる音おと
勢いきほひ猛たけき風かぜの鳴なり
老若男女らうにやくなんによの聲こゑ限かぎり
救すくひを叫さけぶ叫喚けうくわんの
聲こゑを壓あつして聞きえ來くる
其言靈そのことたまの勇いさましさ
甦よみがへりたる心地こころちして

尊たふとき神かみの御救みすくひと

仰あふぎ喜よろこぶ胸むねの内うち

咫尺しせき辨べんぜぬ所迄ところまで

煙けむりに包つつまれ苦くるしみし

ケールス姫ひめは意外いぐわいにも

俄にはかに心こころをおちつけて

館やかたの棟むねのバチバチと

燃もえ行ゆくさまを打眺うちながめ

覺悟かくごをきはめ居ゐたりしが

之これに反はんして龍雲りゅううんは

あわてふためき右左みぎひだり

前まへや後うしろとかけめぐり

柱はしらに頭あたまを打うちつけて

アイタ、ツタあゝ苦くるしい

息いきはふさがる血ちは滲にじむ

誰たれか忠義ちうぎの人ひとが來きて

われをば救すくひ出いだせよと

もがき苦くるしむ憐あはれさよ。

間ま近ぢかく聞きゆる宣傳歌せんでんか

其その言靈ことたまを調しらぶれば

サガレン王わうを始はじめとし

瑞みづの御靈みたまの君子きみこひめ姫

タールチン司つかさや清子姫きよこひめ キングス姫ひめを始めはじめとし
エームス、テリス、ゼム、ルーズ ヨール、レットやターレンの
涼すずしき聲こゑと聞きえたり。

あゝ惟かむながらかむながら神々々 神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜん悪あく正せい邪じやを立たて別わける 此この世よを造つくりし神かむ直なほ日ひ

心こころも廣ひろき大おほ直なほ日ひ 只ただ何なに事ことも人ひとの世よは

直なほ日ひに見み直なほし聞きき直なほし 龍りゅう雲うん司つかさの過あやちは

只ただ今いまここで焼やき直なほす 三あな五な教ひけうやバらモんの

教をしへに仕つかふる宣せんでん傳し使し 吾われは君きみ子この神かむ司つかさ

吾われは國くに別わけ彦ひこの神かみ 神かみの力ちからを身みに受うけて

神かうぢ地しろの城しろに立たて籠こもる 曲まが津つの魂みたまを焼やき直なほし

火ひの洗せん禮れいを施ほこして すべての汚けがれを焼やき清きよめ

焦熱地獄は忽ちに

高天原と一變し

仁慈無限の大神の

教を傳へ仁政を

布き施して國民を

安きに救ひ助けむと

吾等はここに向うたり

曲のかかれる龍雲や

ケールス姫を始めとし

テール、ハルマや其外の

醜の醜人悉く

汝が胸に秘みたる

八十の曲津を追ひ出し

誠の道に歸れよや

神は至愛にましませば

いかに心の曲りたる

汝等なりとて徒に

命は取らせ玉ふまじ

あゝ惟神々々

神の恵を尊みて

一日も早く村肝の

心を直せ身を清め

元つ身魂になれよかし

神地の城は今日よりは

サガレン王のしろしめす

珍の聖場となりけり

牢獄の中に繋がれし

アナン、セールヤシルレング

ユーズの司は今何處

早く此場に現はれて

彼等曲津の逃げまどひ

苦しみ悩む友輩を

煙の中に飛び込んで

一人も残さず救ひ出せ

神は吾等を守りまし

尊き清き汝等を

厚く守らせ玉ふらむ

進めよ進めいざ進め

紅蓮の舌を吐き出す

火焰の中も何のその

神に叶へる吾々は

火にさへ焼けず水にさへ

溺るる事なき強者ぞ

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

サガレン王は黒焰の中に立つて、宣傳歌を歌ひ乍ら、數多の部下を指揮し、城

内の老若男女を救ひ出さしめむと努力して居る。

君子姫、清子姫は奥殿深く猛火の中に進み入り、死を決し、観念の臍を固めて、

泰然自若たるケールス姫を小脇に抱へ城の馬場に救ひ出し、清子姫は甲斐々々し

く、度を失うて狂ひ居る悪魔の張本人龍雲を引抱へ、君子姫に従ひて、城の廣場に救ひ出しぬ。其外數多の人々を一人も残さず、サガレン王の率ゐ來れる至誠の勇士、煙の中をかけ巡り、無事に人命を救ひたるこそ、全く神の御助けと知られる。どこともなしに又もや聞ゆる宣傳歌、敵と味方の區別なくいと殊勝げに耳に入る。

此世を造り固めたる 誠の神が現はれて

善惡正邪を立別ける われは北光神司

神素盞鳴大神の 神言畏み齋苑館

後に眺めてはるばると フサの國原横斷し

月の國中南行し 海を渡りてシ口の島

サガレン王や君子姫 龍雲司やケールスの

姫の命を助けむと 雲路を分けて下り來し

天の目一つ神なるぞ 火の洗禮は恙なく

神かみのまにまに終をはりけり
此城このじやうない内に立籠たてこもる

八岐やまた大蛇をろちや醜狐しこぎつね
曲鬼まがおに共どもの眷族けんぞくは

火ひの洗禮せんれいに怖おぢおそれ
黒雲くろくも起おこし雨あめを呼よび

風かぜのまにまに逃にげ散ちりぬ
今いまや神地かうぢの聖場せいぢやうは

汚けがれも曲まがも拂拭ふつしきし
水晶すゐしやうの如ごとく清きよまりぬ

あゝ惟かむながらかむながら神々かみ々々
神かみの御水みいき火さつを授さつかりて

此世このよに生うまれ出いで來きたる
萬よろづの物ものの靈長れいちやうと

稱たたへられたる人ひとの身みは
神かみに等ひとしきものなれば

いかでか曲まがのあるべきぞ
名位めいゐ壽富じゆふうの正欲せいよくに

清きよき心こころを惱なやまされ
遂つひには體主たいしゆ靈從れいじゆうの

惡魔あくまの風かぜにそそられて
利己りこ一いつ邊ぺんの魂たまとなり

清きよき身魂みたまは忽たちまちに
そこなひ破やぶれ汚けがれはて

曲まがの棲處すみかとなるものぞ
曲津まがつの巢すくふ龍雲りううんも

心こころに悔悟くわいごの花咲はなきて
今いまは罪つみなき神かみの宮みや

汚れも咎めも更になし
ケールス姫を始めとし

龍雲司に諂ひて
體主靈従をきはめたる

百の司や下人よ
老若男女の嫌ひなく

心を安らに平かに
吾身の前に現はれて

今迄犯せし過ちを
皇大神の御前に

早く謝罪し奉れ
大恩受けしサガレン王の

神の命は今ここに
魂の光りを現はして

清く現はれ玉ひけり
神素盞鳴大神の

八人乙女の其中に
目立ちて健げな君子姫

御供に仕ふる清子姫
タールチン司やキングス姫の

貴の命やエームスの
清き司も今ここに

汝等百の人々を
救はむ爲に現れましぬ

あゝ惟神々々
かくなる上は天ケ下

四方の國には仇もなく
曇りも汚れもなきものぞ

老若男女の隔てなく
上と下との分ちなく
城の馬場のいや幅広く
心を清めて一所に
集まり来れよ惟神
神に誓ひて目一つの
神の司が今此處に
汝の爲に宣り傳ふ
あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ

と歌ひ了ると共に、天の目一つの神は煙を分けて、コツコツと杖をつき乍ら、一同が避難の場に微笑を浮べつつ現はれにける。

(大正一一・九・二四 舊八・四 松村眞澄録)

第二二章 春の雪(一〇一〇)

神地の城は、天惠的に火の洗禮を施され、城内の惡魔は残らず退散し、すべて

の建造物は烏有に歸し、天清く風爽かに、土また總ての塵芥を焼き盡し、天清淨、地清淨、人清淨、六根清淨の娑婆即寂光土を現出した。

サガレン王の率ゐ來れる正義の人々をはじめ、城内に止まりて龍雲の頤使に甘んじ、知らず知らず邪道に陥り居たる數多の人々も残らず目を醒し、廣き城の馬場に集まつて、何れも身に微傷だにも負はざりし神徳に感謝の涙を流しつつ、天の目一つの神の導師の下に、國治立大神、鹽長彦大神、大國彦大神を齋くべく、俄作りの祭壇の前に、天津祝詞を奏上し、神徳を讚美し、悔い改めの祈願を凝らし、敵と味方の障壁もなく、宗教の異同も忘却して只管神恩を感謝するのみにして忽ち地上の天國は築かれけり。

神地の城は火の洗禮によりて、地上に一物も止めず烏有に歸したれども、サガレン王がまさかの時の用意にと、新に造り置きたる河森川の向岸の八尋殿は、未だ一人の住込みたるものもなきままに、完全に殘されありしかば、サガレン王は一同の人々を率ゐて新しき八尋殿に立入り、都下の人々が先を争うて、火事見舞として奉りたる諸々の飲食を竝べ一同を響應し、且つ天の目一つの神、君子姫、

清子姫を主賓として、感謝慰勞の宴會を開く事とはなりぬ。

ケールス姫も龍雲も亦悄然として、此席に恥かしげに小さくなつて片隅に控へ居る。人の性は善なりとは宜なるかな、ケールス姫は一時、妖邪の氣に迷はされ、心汚き龍雲が計略の罠に陥り、恐れ多くもわが夫たり君たる國別彦の神司を無視し、且つ放逐したる其惡業を心の底より悔い、身も世もあらぬ思ひにて、良心に責められながら、つつましやかに片隅に息を殺して畏まり居る。又龍雲も一時の欲に搦まれ、惡鬼邪神の捕虜となり、惡逆無道の醜業を繰返したることを深く悔い、今迄犯せし罪の恐ろしく心の呵責に身の置き處もなく、人々に顔を向ける勇氣もなく、頭を下げて片隅に縮こまり居る。今迄の龍雲は大兵肥滿にして、一見温良の神人の如く見え居たりしが、己が惡事を悔悟すると共に、深く神魂に浸み渡り居たる曲神の、身内より脱出し終りたる彼の身は、忽ち縮小し、萎微し、以前の如き氣品もなければ、打つて變つた瘦坊主の見るもいぶせき姿となりしぞ憐れなり。

これを思へば、總ての人は憑靈の如何によつて其神魂を向上せしめ、或は向下

せしめ、善惡正邪、種々雑多の行動を知らず知らずに行ふものなるを悟らるるなり。神諭にも、

「善の神が守護致せば善の行ひのみをなし、惡の靈が其肉體を守護すれば惡の行ひをなすものだ」

と示されてあるは宜なりと謂ふべし。又惡魔は決して惡相をもつて顯現するものではなく、必ず善の假面を被りて人の眼を眩ませ、惡を敢行せむとするものである。一見して至正至直の君子人と見え、温良慈悲の聖者と見ゆる人々にも、また柔順にして女の如く淑やかに見ゆる男子の中にも、惡逆無道の行ひをなすものがあるのは、要するに惡神の憑依して、其人の身魂を自由自在に使役するからである。又一見して鬼の如く、惡魔の如く恐ろしく見ゆる人々の中に、却て誠の神の身魂活動し、善事善行をなすものも非常に澤山あるものである。故に人間の弱き眼力にては到底人の善惡正邪は判別し得らるるものでない。人を裁くは到底人の力の能くし能はざる處、これを裁く權力を享有し給ふものは、只神様計りである。故に三五教の宣傳歌にも、

「神が表に現はれて善と悪とを立て別ける」

云々と宣示されてあるのである。漫りに人の善悪正邪を裁くは所謂神の権限を冒すものであつて、正しき神の御目よりは由々しき大罪人である。又心魂の清く行ひの正しき人が一見して其心の儘が現はれ、至善至美至直の善人と見ゆる事もあつて、又心の中の曲り汚れて悪事をなす人の肉體が、一見して悪に見え卑劣に見ゆる事もある。總ての人の容貌は心の鏡であるから諺にも云ふ通り、

「思ひ内にあれば色必ず外に現はる」

の箴言に漏れないものも澤山にある。然るに凶惡犖猛なる邪神は容易に其醜状を憑依せる人の容貌に現はさず、却つて聖人君子の如き面貌を表はし、悪を行ひ世人を苦しめ、以て自ら快しとする者も澤山にある。故に徒に人の容貌の善悪美醜を見て其人の善悪や人格を品評する事は到底不可能なる事を考へねばならぬ。

千變萬化、變幻出沒極まりなく、白晝に悪事を敢行するは悪魔の得意とする處である。悪魔は清明を嫌ひ、暗黒を喜び、暗にかくれて種々雑多の罪惡を喜んで行ふものである。然しこれは一般的悪魔の爲すべき働きである。大悪魔に至つて

は然らず、却つて清明なる天地に公然横行し、萬民を誑惑し、白日の下正々堂々と其惡事を敢行し、却つて心暗き人々より、聖人君子英雄豪傑の尊稱を與へられ、得々として誇り、世人與し易しと蔭に廻つて、そつと舌を吐き出す者も澤山ないとは云へない世の中である。

一旦惡魔の容器となつて縦横無盡に暴威を振り、旭日昇天の勢を以て數多の部下に臨みたる龍雲も、惡靈の神威に恐れて雲を霞と脱出したるより、今迄威風堂々たりし彼も今は全く別人の如く、身體の各部に變異を來し、非力下劣の生れながらの劣等人格者となつてしまつた。されどもこの龍雲にして、再び正義公道を踏み、信仰を重ね、神の恩寵に浴しなば、以前に勝る聖人君子の身魂を授けられ、温厚篤實の君子人と改造さるるは當然である。ケールス姫は龍雲に一步先んじて心の妖雲を拂ひ、心魂に眞如の日月を輝かし、前非を悔ゆるに至りしかば、今此場になつても比較的身魂を動搖せしめず、自若として神に一身を任せつつあつた。龍雲は恥かしげに立ち上り一同に向つて懺悔の歌を謠ひ、天地の神明に謝罪の誠を盡した。其歌、

天と地とは古の

無限絶對無始無終

神徳無邊の大神が

陰と陽との息をもて

造り固めし御國なり

國治立大神は

天津御神の勅もて

尊き御身を顧みず

豊葦原の瑞穂國

下津岩根にありまし

大海原に漂へる

島の八十島八十國を

完美に委曲に造り終へ

百の神人悉く

守らせたまふ有難さ

神世はやすく平けく

治まりました吹き荒ぶ

醜の魔風の跡もなく

罪も汚れも無かりしが

神の御息に生れたる

蒼生の親とます

天足の彦や胞場姫の

天地の道を踏み外し

皇大神の御心に

背きたるより天ヶ下

四方の國には汚れたる

妖邪の息は充滿し

其息凝りて鬼となり

八岐大蛇や醜狐

醜女探女を發生し

世は常闇となりにけり
それより漸く世の中に

悪魔は盛に蔓りて
天地曇らせ現身の

世人の身魂を蹂躪し
尊き神の生宮と

生れ出でたる人の身を
いつとはなしに曲神の

珍の住家となし終へぬ
吾も神の子神の宮

恵に漏れぬ身なれども
いつとはなしに曲神に

つけ狙はれて由々しくも
天地容れざる大罪を

重ね來りし恐ろしさ
至仁至愛の大神は

吾等が汚き行ひを
憐みたまひて忽ちに

各自に洗禮與へまし
心に潛む曲神を

苦もなく追ひ出し給ひけり
あゝ惟神々々

御靈幸倍ましまして
サガレン王に背きたる

吾等が罪を許させよ
ケールス姫を朝夕に

汚しまつりし醜業は
天地容れざる罪なれど

神の尊き御心に
清く見直し聞き直し

宣り直しませ天地の
尊き百の神の前

罪に沈みし龍雲が
今迄犯せし罪を悔い

心を清めて大前に
慎み敬ひ詫びまつる

天の目一つ神司
君子の姫や清子姫

其外百の人々の
尊き今日の働きを

喜びるやま心より
慎み讚美し奉る

斯くなる上は龍雲が
今迄悩みし村肝の

胸の曇りも晴れ渡り
黒雲遠く吹き散りて

大空渡る日月の
光を拜む心地よさ

國別彦の神様よ
ケールス姫よ龍雲が

今迄汝に加へたる
きたなき罪や曲業を

廣き心に宣り直し
許させ給へ惟神

神かみに誓ちかひて將來ゆくすゑの
身みを退しりぞきて天あめの下した
命いのちの限かぎり身みの限かぎり
亡ほろぼしまつるわが覺悟かくご
あゝ惟かむながらかむながら神々々
神かみの御前みまへに願ねぎまつる
世よ人びとを救すくひ身みの罪つみを
安やすく諾うへなひたまへかし

ケールス姫ひめは又また謠うたふ。

醜しこの魔ま神かみに迷まよはされ 神かみの末裔みすゑと現あれませる
國くに別わけ彦ひこの神司かむつかさ わが背せの君きみに相背あひそむき
曲まがのかかりし醜しこ人びとに 心こころの限かぎり身みの限かぎり
媚こび諂へつらひて何時いつとなく 罪つみの淵ふちへと沈ちん淪りんし
あらむかぎりの罪惡ざいあくを 盡つくし來きたりし恐おそろしさ
大慈だいじ大悲だいひの大神おほかみの 靈みたまの光ひかりに照てらされて

曇りし胸も晴れ渡り

眩みし眼も明かに

輝き渡りて身の罪を

直日に見直し聞き直し

顧みすれば恐ろしや

天地の神の許さざる

重き罪をば知らずして

重ね来りしうたてさよ

あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして

日の出神や木の花の

咲耶姫の神言もて

神素盞鳴大神が

世人を普く救はむと

三五教の御道を

四方の國々島々に

開かせ給ふ神司

数ある中に取りわけて

清き尊き北光の

神の司や君子姫

清子の姫を下しまし

火の洗禮を施して

神地の都に蟠まる

醜の魔神を吹き拂ひ

清めたまひし尊さよ

心の闇は晴れ渡り

元つ御靈に嬉しくも

立ち歸りたる吾なれど

一度魔神に汚されし 吾身體を如何にせむ

寄邊渚の捨小舟 取りつく島もなく涙

いづれに向つて吐却せむ サガレン王の御心は

假令吾等を許すとも 重ねし罪の吾が體

如何でか元に歸るべき 妾は是より聖城を

後に眺めて葦原の 瑞穂の國を隈もなく

風雲雷雨をしのぎつつ 三五教の御教を

開きて世人を善道に 導きまつり皇神の

恵の露の萬分一 報いまつらむ吾心

許させたまへ天津神 國津神達八百萬

國魂神の御前に ケールス姫が誠心を

誓ひて願ひ奉る あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と謠うたひ終をはり、恥はづかしげに片隅かたすみに身みを潜ひそめて蹲うつくまり居をる様さま、人ひとの見る目めも哀あはれげに
感かんぜられ、一同いちどうは期きせずして同情どうじやうの涙なみだにかき暮くれにける。
(大正一一・九・二四 舊八・四 加藤明子録)

第二三章 雪達磨ゆきだるま「一〇一一」

サガレン王わうは悠然いうぜんとして立たち上あがり、金扇きんせんを擴ひろげて中央ちうあうの高座かうざに登のぼり堂々だうだうとして
歌うたひ舞まふ。

あゝ有ありがた難ありがたし有ありがた難ありがたし 天地てんちの神かみの御み惠めぐみは
伊い行ゆきたらひて隈くまもなく 吾等われらを始はじめ人々ひとびとの
身み魂たまを照てらし給たまひけり 荒風あらかぜすさぶシ口の島しま
白雲山はくうんざんの頂いただきに 吹ふき起おこりたる龍雲りううんが

醜しこの御息みいきに包つつまれて
バラモン教けうの宣傳使せんでんし

國別彦くにわけひこの神司かむつかさ
サガレン王わうの身邊しんぺんは

日ひに夜よに危あやふくなりなりにけり
時ときしもあれや眞心まじこころの

岩いはより固かたき兵士つはものの
現あらはれ來きたりて災わざはひを

逃のがれて吾われを救すくひつつ
花はな咲さく春はるを松浦まつうらの

小絲こいとの館やかたに守まもり行ゆく
千代ちよも八千代やちよも搖ゆるぎなき

固かたき岩窟いはやに隠かくるひて
白雲山はくうんざんの雲霧くもぎりを

科戸しなごの風かぜに吹ふき拂はらひ
神地かうぢの都みやこを十重とへ二十重はたへ

包つつみて曇くもらす龍雲りううんを
神かみの軍いくさを勵はげまして

取とり除のぞかむと朝夕あさゆふに
武道ぶだうを勵はげむ折をりもあれ

神かみの恵めぐみの淺あさからず
深霧ふかぎり分わけて北光きたてるの

三五教あななひけうの神司かむつかさ
鳩はとの如ごとくに降くだりまし

天地てんちの神かみの御心みこころを
完美うまらに委曲つばらに説とき給たまひ

至仁しじん至愛しあいの心こころもて
曲まがの砦とりでに向むかへよと

教へ給ひし尊さよ
タールチンやエームスの

忠誠無比の司等は
翁の言葉に悦服し

日に夜に勵みし武術をば
全廢なして惟神

神の御前に跪き
誠一つの言靈を

放ちて曲を悉く
言向和し天國の

恵みに浴し救はむと
心を定むる折もあれ

瑞の御靈の救ひ主
神素盞鳴大神の

八人乙女の君子姫
心の色も清子姫

又もや此處に來りまし
再び神の御教を

宣らせ給ひし有難さ
吾はそれより君子姫

其他の司を引連れて
白雲山の山麓に

薨輝く神地城
來りて見れば城内は

黒煙四方に立ち昇り
紅蓮の舌は遠近の

建造物を悉く
嘗め盡さむず勢に

暫し見とれて居たりしが 忽ち響く神の聲

神の御子なる諸人を 救ふは今や此時と

吾身を忘れて黒煙の 中に自ら突進し

采配振つて下知すれば 君子の姫や清子姫

タールチンやエームスや キングス姫やテリスの

清き司は逸早く 煙に包まれ悩み居る

數多の人を救ひ出し 城の馬場に連れ來り

色々様々介抱し 勞はり守るぞ尊けれ

折りしも聞ゆる宣傳歌 謹み敬ひ心をば

すまして嬉しみ聞く程に 小絲の里に現はれし

天の目一つ神司 涼しき聲を張り上げて

煙を分けて響きたる 其神姿ぞ雄々しけれ

あゝ惟神々々 神は吾等を守りまし

道に背きし人々も 残らず助け給ひけり

吾等も一度は龍雲が
汚き仕業を憎みしが

直日に見直し聞直し
反省すれば尊しや

彼も神の子神の宮
もとより汚れし者ならず

知らず知らずに曲神に
心の根城を奪はれて

道に外れし曲業を
行ひ居たる憐れさよ

決して責むべきものならず
責むべきものは吾心

少しの油断ありしより
神地の都の上下を

騒がせたるも吾なりと
思へば恐ろし神の前

詫ぶる由なき吾罪を
許させ給へ天地の

神の御前に懺伏して
畏み畏み祈ぎ奉る

朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも
神地の城は焼けるとも

神の心の彌廣く
吾の身魂のいと清く

怨みも仇も谷川の
早瀬に捨ててスクスクと

清き心のパラダイス 上下尊卑の分ちなく

老若男女の隔てなく 教の道の如何をば

省みずして相共に 仕へ奉らむ神の前

あゝ惟神々々 御靈幸はひましまして

ケールス姫や龍雲の 醜の司を始めとし

従ひ奉りし諸人の 罪をば許させ給へかし

サガレン王が今此處に 心の誠を現はして

皇大神の御前に 畏み畏み祈ぎ奉る

あゝ惟神々々 御靈幸はひましましてよ

天の目一つの神は立ち上り祝歌を謠ふ。

天と地とを造らしし 此世の御祖と現れませる

國治立の嚴靈 豊國姫の瑞靈

御靈を十字に綾なして

三五の月の御教を

四方に開かせ給ひけり

瑞の御靈の神靈

神素盞鳴大神は

嚴と瑞との御教を

麻柱ひ給ひて八乙女を

メソポタミヤに遣はされ

バラモン教に立て籠る

鬼雲彦を言向けて

豊葦原の瑞穂國

残る隈なく三五の

仁慈無限の御教に

百の神人救はむと

心配らせ給ひけり

さはさり乍ら曲神の

勢ひ仲々猛くして

山の尾の上や川の瀬に

砦を造り汚れたる

教を四方に布き竝べ

世は益々に曇り行く

天の下なる神人は

苦しき歎き山河は

何處の果ても枯れ干して

木葉の露も光りなく

月日は雲に包まれぬ

かくも怪しき常暗の

大海原を晴らさむと

天教地教の山上に

百の神等呼び集へ

此世を救ふ生神の

大御心を照らすべく

神の司を任せ給ひ

國の八十國八十の島

洩れなく落ちなく

救世の大福音を宣べ給ふ

あゝ惟神々々

神の御言を畏みて

沐雨櫛風厭ひなく

教を傳ふる宣傳使

中にも尊き君子姫

清子の姫の神司

鬼雲彦に仕へたる

曲の司に捕はれて

百千萬の苦しみを

受けさせ給ひ荒波の

伊猛り狂ふ海原を

半ば破れし棚なしの

小舟に乗りて海中に

清く浮びしシロの島

ドンドラ岬に安着し

神の恵みの彌深く

河森川の谷道を

遡りつつ松浦の

小糸の里に着き給ひ

千代の住家の岩窟に

隠るひ居ます神司
サガレン王に面會し

誠の道を説き明かし
神の軍を引率し

白雲山の山麓に
薨も高く聳りたつ

神の館に蟠まる
醜の司の龍雲や

ケールス姫を救はむと
サガレン王と諸共に

葦毛の駒に跨りて
進み來れる雄々しさよ

シロの館の四方より
黒煙忽ち立ち昇り

紅蓮の舌は許々多久の
建造物を嘗め盡し

ケールス姫や其外の
人の生命は風前の

燈火の如く見えければ
吾身を忘れて三五の

神の司を始めとし
バラモン教の神司

サガレン王は逸早く
身を躍らして黒煙の

中に進ませ給ひつつ
厳しき下知の其下に

神地の城の人々は
一人も残らず救はれて

尊たふとき神かみの御み恵めぐみを 感かん謝しゃせしこそ尊たふとけれ

あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々 御み靈たま幸さちはひましまして

醜しこの魔ま神かみに襲おそはれて 身みを隠かくしたるサガレン王わうの

司つかさの命みことも恙つつがなく 神かみの恵めぐみみに相あひ浴よくし

タールチンやキングスや テーリス、エームス、ゼム、エール

其その外ほか百ももの司つかさ達たち 心こころの底そこより打うち解とけて

今け日ふの酒うたげ宴あひならに相あひ立たぶ 上しやう下か和わ樂らくの樂たのしみは

天てん國こく淨じやう土ども目まの前あたり 娑しやば婆ば即そく寂じやく光くわう淨じやう土どぞと

祝いはふも尊たふとし神かみの前まへ 謹つつしみ敬あやまひ祝ほぎ奉まつる

あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々 御み靈たま幸さちはひましましてよ

(大正一一・九・二四 舊八・四 北村隆光録)

第二四章 三六合「一〇一二」

キングス姫は立上り、銀扇を擴げて歌ひ舞ふ。

白雲山の山麓に そそり立ちたる神館

天地を包みし黒雲も 今や全く晴れわたり

正義の光は日月の 輝く御代となりにけり

タールチンの吾夫は サガレン王に見出され

左守の神と任せられて 朝な夕なに眞心を

盡して仕へるたりしが 何處ともなく降り來る

曲の司の龍雲が 舌の劍に貫かれ

其身も危くなりければ バラモン教の大神に

朝な夕なに眞心を 捧げて祈りし時もあれ

心傲ぶる龍雲が 妾に向つて恐ろしや

天地許さぬ戀雲の

心汚き其艶書

吾背の君の目を忍び

いらへをなせと迫り來る

餘りの無道に呆れ果て

天地に神はなきものか

誠の神のいますなら

此黒雲を逸早く

晴らさせ玉へと祈る折

吾背の君は側近く

進ませ玉ひて龍雲が

艶書を見せよと恥かしや

迫りますこそ是非なけれ

顔赤らめて龍雲が

心亂れし艶書を

吾背の君に相渡し

夫婦和合の謀計

茲に返書を認めて

戀に迷ひし龍雲を

夏風涼しき藤の森

大木の下に誘ひつ

企みも深き陷穽

道の眞中に相穿ち

今や遅しと待つ内に

神ならぬ身の龍雲は

かかる企みのある事を

夢にも知らず夜に紛れ

館を一人立出でて

戀こひしき女をんなの只ただ一人ひとり 空そらを眺ながめてわれ待まつと

思おもひ詰つめたる愚おろかさよ 龍雲りゅうん忽たちまち坂路さかみちに

吾わが背せの君きみの穿うがちたる 無むざん残ざんや穴あなにおち込こめば

木蔭こかげに潜ひそみしタールチン 君きみの仇あだをば滅ほろぼすは

今いま此この時ときと勇いさみ立たち かねて用意よういの鋤くはをもち

苦くるしみ悶もだゆる龍雲りゅうんの 頭あたまの上うへよりバラバラと

岩石がんせき交まじりの土塊つちくれを 蔽おほひかぶせて何なに氣げなく

吾家わがやをさして歸かへりけり 惡運あくうん盡つきざる龍雲りゅうんは

思おもひ掛がけなくエームスの 神かみの司つかさに助たすけられ

命いのちカラガラ城内じやうないに 慄ふるひ慄ふるひて立歸たちかへり

あくるを待まつてエームスを 吾側わがそば近く呼よび出いだし

汝なんぢはわれの危難きなんをば 救すくひし功績いさをはよみすれど

タールチンやテーリスと 心こころを協あはせて吾身わがみをば

ベツトせむとの企たくみなり かくなる上うへは一時ひとときも

容赦ようじやはならぬと言いひ放はなち
情容赦なさけようじやも荒繩あらなはに

手足てあしを縛しばりて牢獄らうごくに
投込なげこみけるぞ無殘むざんなれ

あゝ惟かむながらかむながら神々々
神かみの御靈みたまの幸さちはひて

吾等われら夫婦ふうふうは牢獄らうごくに
捕とらへられたる身み乍ならも

少すこしの苦痛くつうも感かんじなく
神かみの賜たまひし吾魂わがたまは

天地てんちを廣ひろく逍遙せうえうし
東雲しのめちか近く旭あさひかけ

昇のぼらせ玉たまひて六合りくがふを
照てらさむ時ときを待まつ内うちに

アナン、ユーズの神司かむつかさ
義兵ぎへいを起おこして城内じやうないに

闘ときを作つくつて攻せめ來きたる
其勢そのきほひぞ勇いさましき

吾等われら夫婦ふうふうは忠勇ちゆうゆうの
神かみの司つかさに助たすけられ

サガレン王わうの隠かくれます
小絲こいとの里さとの岩窟がんくつに

暫しばしかくれて龍雲りううんを
誅伐ちうばつせむと謀計はかりごと

めぐらす折をりしも三五あななひの
神かみの司つかさの宣傳使せんでんし

北光神きたてるかみの現あれまして
神かみの誠まことの御心みこころを

完美うまらに委曲つばらに説き諭さとし 心こころにかかりし村雲むらくもを

洗あらひ玉たまひし嬉うれしさよ サガレン王わうを始めはじとし

君子きみこの姫ひめや清子きよこ姫ひめ 吾背わがせの君きみやエームスや

テーリス、ウインチ、ゼム、エール 百ももの司つかさと諸もろとも共に

言靈軍ことたまぐんを編成へんせいし 風かぜに旗はたをば翻ひるがへし

旗鼓堂きこだう々と山路やまみちを 單縱陣たんじゆうぢんをはり乍ながら

攻めよせ來りし勇いさましさ 又またもや北光彦きたてるひこのかみ神

ここに現あらはれましまして 善惡正邪ぜんあくせいじやの道みちを説とき

敵てきと味方みかたの隔へだてなく 心こころの空そらの村雲むらくもを

伊吹拂いぶきはらひて救すくひまし 神人和樂しんじんわらくの瑞祥ずめしやうを

八尋やひろの殿とのに集あつまりて 祝ことほぎまつるぞ嬉うれしけれ

あゝ惟かむながらかむながら神々々かむながらかむながら 御靈幸みたまさちはひましませよ

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令命たとへいのちはすつるとも 神かみの御爲國おんためくにの爲ため

心盡こころつくしの大丈夫ますらをが 神かみと君きみとに捧ささげたる

其眞心そのまごころは永久とこしへに 千引ちびきの岩いはのいや固かたく

千代ちよも八千代やちよも動うごかざれ 神かみは吾等われらを守まもります

吾等われらは神かみの子こ神かみの宮みや 神かみに等ひとしき行おこなひを

現あらはしまつり世よの人ひとを 神かみの大道おほぢに導みちびくは

神かみの司つかさと任まけられし 吾等われらの尊たふとき務つとめなり

國治立くにはるたちのおほかみ大神かみや 鹽長彦しほながひこのおほみかみ大御神おほみかみ

大國彦おほくにひこの御前おんまへに 眞心まごころ捧ささげて願ねぎまつる

あゝ惟かむながらかむながら神々々 御靈みたまさち幸さいちはひましませよ』

エームスは立上たちあがり祝歌しゆくかを謠うたふ。

㌶ 常世とこよの國くにの自在じざいてん天てん 大國彦おほくにひこを祀まつりたる
バラモン教けうの神館かむやかた 顯恩城けんおんじやうにあれませし

大國別の貴の御子
國別彦の吾君は

心汚き曲神に
虐げられて聖地をば

後に見すててはるばると
百の悩みに堪へながら

大海原を乗越えて
波に浮べるシロの島

珍の御國に着き玉ひ
バラモン教の大道を

心をつくして遠近に
開かせ玉ふ有難さ

セイロン島の國人は
君の御徳を慕ひつつ

遠き近きの隔てなく
集まり來りて大神の

恵に浴し吾君の
其仁徳に感激し

遂には君を王となし
大峽小峽の木を伐りて

珍の館を建設し
サガレン王と奉稱し

主師親三徳兼備せる
神の司よ大君と

上下一般喜びて
仕へまつれる時もあれ

醜の魔風のふきすさび
隙行く駒の恐ろしく

城内深く侵入し ケールス姫を手に入れて

ウラルの教を隈もなく 此國內に擴めむと

企みし曲津の龍雲が 天運ここに相盡きて

今は全く舊惡を 吾大君の御前に

つつまずかくさず言上し 救ひを求むる世となりぬ

思へば思へば過ぎし夜半 月見をせむと藤の森

峰に上りて吹き來る 夜風に汗を拭ひつつ

月の光をほめながら 坂道下る折柄に

迂り落ちたる陷穽 訝しさよと窺へば

思ひもかけぬ人の聲 こは何者の惡業か

おちたる人は何人と 供を家路に走らせて

鋤や鍬をば數多く 使ひて漸く救ひ上げ

月にすかして眺むれば 豈計らむや朝夕に

君に仇する曲津神 心汚き龍雲と

悟りし時の残念さ

斯うなる上は是非もなし

天地の神の御心に

任さむものと断念し

家路に歸り一夜さを

明かす間もなく龍雲が

捕手の奴に捕へられ

案に相違の牢獄に

投込まれたる無念さよ

あゝさり乍らさり乍ら

神は至愛にましませば

いかでか悪魔の龍雲を

見のがし玉ふ事やある

あゝ待て暫し待て暫し

心を清め身を清め

尊き神の御救ひに

これの牢獄をぬけ出し

サガレン王の御爲に

八岐大蛇の宿りたる

醜神たちを悉く

神の伊吹に吹き拂ひ

清明無垢の聖場と

立直さむは目のあたり

あゝ惟神々々

大國彦の御神よ

われらが盡す誠忠を

憐み玉へと祈る折

アナン、セールやウインチヤ

ゼムの司つかさが時ときを得えて 義勇ぎゆうの軍いくさを編成へんせいし

進すすみ來きたりて吾われ々われを 救すくひ玉たまひし嬉うれしさよ

勇氣ゆうきはこここに百ひゃく倍ばいし 勢いきほひ込んで龍雲りゅううんが

居室きよしつをさすして進すすみ行ゆく あはれやユーズはじを始めはじとし

アナン、セールまことやシルレング 誠まことの司つかさは室内しつないの

俄にはかつく作おとしあなりの陷おとしあな穽なに おち入いり玉たまへば諸人もろびとは

曲まがの巢すくへる此館このやかた 深ふかい入いりするは虞おそれあり

一ひと先まづここを引返ひきかへし 再ふたび軍備ぐんびをととのへて

彼龍雲かれりゅうんが輩ともがらを 劍つるぎの威徳ゐとくに斬きりはふり

殲滅せんめつせむといひ乍ながら 軍いくさを返かへすもどかしさ

あゝ惟かむながらかむながら神々かみ々々 神かみの此世このよにましまさば

惡あくを退しりぞけ善神ぜんしんを 何故なにゆゑ助け玉たまはざる

などくと愚癡ちをばこぼしつ つ 思おもひ思おもひいちいちち同どうは

一ひと先まづ姿すがたをかくしける サガレン王わうはテーリスや

エームス二人に助けられ
河森川の坂道を

下りて時を松浦の
小絲の里に至りまし

正義の勇士を驅り集め
再び龍雲誅伐の

準備をすすませ玉ふ折
北光彦の神司

鳩の如くに降りまし
續いていでます君子姫

清子の姫の宣傳使
吾大君と諸共に

心を協せ御力を
一つになして宣傳歌

歌ひて進む勇ましさ
神の恵の幸はひて

今日の喜び松の世の
堅磐常磐の礎を

築き玉ひて永久に
白雲山の雲もはれ

神地の都の庭固く
千引の岩の其上に

千代の住處を固めつつ
神を敬ひ民を撫で

治め玉はむ今日の日は
五六七の御代の開け口

一度に開く木の花の
咲耶の姫の御姿

蓮の花の一時に 匂ひ出でたる目出度さよ

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

此の外數多の神司の祝歌は澤山あれども、紙面の都合に依りて省略したり。

因にサガレン王は天の目一つの神の媒酌に依り、君子姫を娶つて妃となし、シ
口の島に永久に君臨する事となりぬ。又エームスは目一つの神の媒酌にて清子姫
を娶り、サガレン王が側近く右守神となつて、顯幽一致の神政に奉仕し、ケール
又姫は悔い改め、天の目一つの神の弟子となり、宣傳使を許されて天の下四方の
國々を巡教し、龍雲は此島を放逐され、本國印度に歸り、心を改めて大道の宣傳
に従事せしといふ。惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・九・二四 舊八・四 松村眞澄録)

終り